つて居りまするで、抑、あつたら司法部の方々の尊臨を請うて、吾々の考へ及ばぬ所をば御遠慮なく御懇話を頂戴し又御攻撃も蒙りたいと思ひまするで、今夕茲に御案内を申上げた次第でございます。幸に閣下諸君の御臨場を蒙つて、茲に十分の談話を爲し得られる機會を得ましたことは、誠に喜ばしく存じまする。茲に臨場を辱うしました閣下諸君の健康を祝します。（明治四十二年五月五日、銀行倶樂部晩餐會に於ける司法官招待の席上にて）

九三　關係諸事業重役辭任告別の辭

各種事業關係の由來

突然に御集りを願ひまして、殊に今日の御集會は私から御願せねばならぬ事柄でございますのに、それに宅へ御呼立て申して甚だ失禮でございます。加ふるに休日の所を誠に御苦勞でございます。

豫て御話をしてあつて申上げるといふことでない。御聽き下すつたならば一寸突飛の御感じをなさるか知れませぬけれども、一口に申上げると私が是まで、御列席の皆樣の御關係の各事業に付いては、或は取締役會長、取締役、若くは相談役等の名を以て別して厚く御懇親も致し、場合に依つては御指導も致して參つたのでありますけれども、もうさう深く御仲間に這入らないでも、各會社の事業に付いて御心配に思召すことは無からう。自身に於てもそれまでに及ばぬやうに考へますと云ふのが一つと、又一つには私も段々年を取りまして、御承知の通七十にもなります。限り無く各種の事業に關係致すといふ譯にも參りませぬ。抑、あつたら少し時間を造り得るように致したい。それには從來の關係も成るべくたけ絶ちたい。――斯う考へ來つたのでございますが、さて何時が宜しいといふ區切も無くして、自然と從來の惰力で今日まで經過致しましたが、段々熟慮致しますと、何時まで經つても限りも無く無りまするし、元來餘り各種の事業に關係しますことは、宜いとは自分も思つて居りませぬ。それも若し己が去つて此の重なる會社に懸念といふやうな場合でもございますれば、假令自分は老衰したにもせよ、又考直しも思せなければならぬかも知れませぬが、熟〻爾來の有樣を考へますと、私が別段好い慮を持つて居る譯ではありませぬけれども、皆樣が押立てゝ首腦にして下さる爲に、或は虛位に立つ嫌もありませうけれども、先づ今日まで大なる瑕瑾もなく、多くは各會社の腦髓の地位に御置き下すつたのは、實に感謝に堪へませぬのであります

す。殊に今日此處に御集りを請うた各會社との關係は、皆會社が成立つてから都合に依つて株を持つたといふのではございませぬ。都て自身が企てたと申しても宜い。又は其の企に付いて當初から相談に與り、若くは其の組立は以前であつたけれども、或る有力の人から厚い委託を受けて、我が物の如き關係を以て盡力したといふものもございます。いづれも皆深い關係を持つて御相談に與つて居る譯であります。まだ此の外にも相談役、取締役、監査役等の關係を持つて居るものも數個ございますけれども、さういふ從來成立つた所へ都合に依つて御仲間入をしたのは、殊更に斯かる御話を致しませんでも御免を蒙るといふことだけで事足ると思ひます。併し皆樣に對しては、それでは何分私の心が許しませぬ。詰り申せば自分は其の初からの組立に與つた譯でありますが、事に依ると段々と御人が變つて、今日は其の創業の際とは全く別人になつて居るといふのもある位ですから、前に申す如く段々地位も進んで、最早皆樣だけで御差支を見ない。――斯う思ひながらも、先づ第一に篤と御話を申上げて置かぬと、何だか不人情に突然厭になつたから止すといふ如き御感情を受けてはならぬ。假令御免を蒙ると申しても、舊來の御交誼は飽く迄も變らぬ樣に存續したいと思ひます。而して私が此の如く皆樣の御關係の會社に辭任を申すからというて、未だ明日屹度死ぬと限つた譯ではない。又何も老衰して世の中の事理を解せぬから社會を退くといふ趣意でもございませぬ。元來此の世の中に立つて事業をするに付いては、成るべく專業が宜いといふことは、誰が言ふまでもなく解り切つた話で、世の進みに伴うて專業が強くなつて參ります。極く卑近なる例を申せば、此處に一村落が出來る。人の集る所必ず其處には自分から製作する人もありませう。又其の製作物を買うて消費する人もありませう。此の間に立つて物を供給する人は、必ず其の場所の繁昌に從つて變化するといふことは免れぬ順序である。甚しきは呉服も賣る、茶漬も賣る、味噌も賣るが草鞋も賣る。俗に云ふ萬屋といふものは、これは何の理由から生じて來たか。一業一品では決して其の生計を支へることが出來ない。經濟が立たぬからして、自然の勢さういふ話になるものと見える。併し其の土地が段々繁昌して、種々なる需用供給が進んで參ると、其の間に呉服屋は呉服ばかりになり、種物屋は種物ばかりになる。現に東京の有樣は今日の繁昌に至らぬ昔日でも、稍

分業法が成立つて來た。僅かな一都府に付いても、それ位の譯てございますから、世の中のことは總て推して知るべしと申しても宜からうと思ふ。歐米の趨勢を見ましても、人文の進歩、學理の向上に從つて、益〻分業が強く行はれるやうに思ひますから、人としては成るべく一に專らなるが宜いといふことは論を俟たぬ。然らばそれ程道理のあることを、なぜ私が是まで各會社に關係したかといふことに付いては自ら非難もありませうけれども、私自らは已むを得ざる事情があると辯解致したいのであります。

守舊の風潮と新事業

忘れも致しませぬ、明治六年に銀行者になつて銀行業の經營も遣つて見ましたが、殆ど其の總てが意の如く行かないで失敗に終らうとしたことがなか〳〵數多かつたのでございます。其の初め勿論自らに經驗があるのではなし、銀行といふ學問をしたこともない。日本に銀行といふ事業がありませぬから、見知つたことは一もなかつたけれども、――度々皆樣には何かの折に申上げたことがあると思ひますが、――役人をして居る際に靜かに考へて見ると、どうも此の明治の新政府は、政治觀念ばかりが强くつて經濟觀念が甚だ乏しい。殆ど一技一能ある人が都會へ出て來ると、總て如何なる希望を持つかといふと皆役人になるといふ考、甚しきは教育機關を造つて、其の教育に依つて、――而も役人では一生を滿足に送り得られぬ如き技藝を學んで居る人さへも、猶ほ商賣人となることを恥づるといふ念があつたので、さういふ時代に銀行者になるといふのですから、自分の意念では、是非此の實業方面から社會の傾を引止める樣な途がありはしないか、といふことが自分の期念であつた。同時に商賣人の位地が甚だ低い。又學問觀念が甚だ乏しい。從つて道德とか、德義とかいふ樣な氣風が甚だ少い。丁度明治七年に第一銀行が起りましたが、其の前に政府の勸誘に依つて爲替會社、開墾會社、回漕會社といふやうなものが出來た。所謂官の干涉に依つて成立したもので、三井とか、小野とか、或は島田とか、大坂でもそれ〳〵舊來の豪家から選まれて其の仲間に這入つて組立てましたが、實地を取扱ふ人は其の中の番頭さんで、御役人は唯政治の權力を持つてそれに干涉するに止まるといふ委てあつた。それは明治初年のことで、私は其の邊のことは能く知りませぬけれども、明治二年の冬に大藏省の役人になつて樣子を見ると、右等の會社は一年餘りに見事遣損つてしまつた。三十九年にわ

いわいといふ勢で成立つた會社が多く失敗した。それとこれとは違ひますが、謂はゞ似たやうな有様で、左様に政府が力を入れて組立つたものが皆失敗してしまつた。私が出た時分僅に爲替會社が一つ殘つて、是も餘程損をしたけれども僅に維持して居つた。而して一般の商賣人はどうかといふと、兎角役人は政治上に付いては特殊の智惠がありもしたてありませうが、商賣關係に付いては理窟を以て商賣のことを云ふ。迚もそれで引合の付くものではないといふやうな思入で、古風の商家は今のやうな實例から改進的の商賣人をば、平たく申せば山師といふやうな觀念を以て迎へて、もう御役所へ出入をする、洋服を著、時計を持つ商賣人ならば油斷すな。權利とか義務とかいふことを口にするやうな商賣人は、まるで流義違の商賣人であるといふやうに、伊勢町傳馬町の商人からは押並べて見られたのであります。それでありますから、明治六年に銀行は立てましたけれども、古風な商賣人は吾々共を、今に潰れるのだといふやうな觀念を以て待遇されましたから、どうしても新舊の調和が程能く運びませぬ。試に第一銀行の經營當時のことを調べて見ますと、大抵三井と小野が出金して、三井と小野が其の金を借りて、惡く言へば『鼬こつこ』見た様な商賣をして、新しい方面に得意を開くといふことは、十にして一とも言へない位の有様であつた。加ふるに前に申す通り、偶〻教育を受けた實業的人間が出來ても、是等は實業界に入るのを以て野に降るとか、いや官吏の權利を得ることが出來ないとかいうて、同じ給金ならそんなところへ行くものかといふやうな考を持つて居る。現に明治十三年頃のことであります。其のことに付いて私は大學總長男爵加藤弘之さんに向つて――今のやうに總長とは言はぬ時分です――貴方が斯うして化學や理學を教へて生徒を作るけれども、生徒は教員と役人より外にならないといふ觀念を持つて居るのは間違つて居る。現に斯ういふ實例がありますというて、瓦斯局て頼んだ所谷英敏といふ人の事に付いて大に不足を言うて行つたことがあります。詰り瓦斯は民業に移るのだ。今行けば役人の榮譽を得られぬ。同じ給金ならそんな所へ行く奴があるものかといふやうなことて生徒仲間に煽動せられて、折角出來た相談を斷りに來たといふから起つた論です。そこて私は――是は困つたものだ。新舊思想の戰だ。新舊の戰ひというて相對して攻擊をするといふ譯てはないけれども、己達の事業を誠實に

黽勉に遣つて打勝たなければ、到底これは新舊人を改進せしむることは出來ない。だから身を以て當るの外はない。幸に新思想の事業が成立つて行つたならば、遂には成る程と始めて守舊家が此の方へ見倣つて來るやうになるであらう。爭つて見た所が益も無い。謂はゞ論より證據で、事實に待つ外無い。元來自然の持論は其の頃からして、日本の商賣人は力が强い。個に別々に遣つて居ては、どうしてもいけない。又此の公共の事實を進めて行かうといふ方の考からせば、己一身の富のみ增すといふことは、自分等は餘り好まない。況や其の時の政策としても相當な智惠のある人を其處に使はうとしても、細い資本では少い報酬しか出せぬといふことは當然のことであります。どうしても合本法に依つて相當の報酬を出して、良い人智惠のある人を得なければ、學問の利益を受けるといふことも出來ない。故に事業の發達は合本法を以て進めて行く外無いといふのが、私の唯一の目的であつた。若し之を私の政策と云ひ得べくんば、それを普及することに努めたのであります。そこで此の改進主義を以て守舊主義に打勝つといふには、どうしても銀行ばかりでは、いけなくなつて來た。各種の事業に對しても勢ひ手を

先づ物質的事業に著手す

著けなければならぬ必要が生じて來た。

其の頃から王子の製紙會社に――確か銀行に從事した翌年に關係をし始めた。是は外國人から聽いたか自分で考へたのか、紙といふものは文明と離れないものだ。眞正の文明を進めようとするには、日本の紙を改良しなければいけない。少し突飛な立論のやうではあるけれども、此の紙の事業といふものが文明を進める一大要素である。新聞紙にしても、書籍にしても、總て學問といふ事に付いては紙が必要である。續いては印刷法といふものが、簡便に且つ緻密に出來なければならぬから、印刷事業に力を入れるが宜からうといふことであつた。けれどもそれらの事は人文の進歩といふ方で、物質的事業の進歩といふ考てなかつたのですから、深く力も入れませなんだが、海陸運送――即ち鐵道船舶といふものに付いては、特に力を入れざるを得ぬやうに考へた。尤も海運に付いては明治七八年頃から岩崎氏が大に力を入れて居つた。其の前に私が官に居るときに郵便蒸氣船會社といふものが出來て居つたが、これも前に申すやうな政府關係の事業で、擔當者其の人を得なかつた爲に旨く行かない。岩崎氏の汽船會社に對して兩立が出來な

い。遂に此會社も三菱に合併してしまつた。そこで十三年頃には、唯三菱ばかりに海運事業を獨占させるのは甚だ宜しくないといふので、種々なる方面から反對說が出て來て、遂に共同運輸會社といふものが成立しました。是等も、私は銀行者として力を添へざるを得ぬ爲に贊成の位置に立つた。それに付いて當時三菱攻擊は殆ど澁澤が發頭人であるとまで看做されたのであります。けれどもそれらの事は後に段々解つて、明治十八年には其の共同運輸會社と三菱とが合併した。其の合併した後更に數年を經て、私も遂に日本郵船會社の取締役にならねばならぬやうに相成つて、今日まで其の地位に居る次第でございます。又工業に關係したのは先づ紡績業です。是は明治十年からの事であります。いつも戰爭がある と事業が膨脹する。日露戰爭は最も激しかつたのですが、彼の西南の役後十一年十二年の頃も、輸入の超過といふものはなか〳〵激しかつた。今日から云へば其の數字は少いが、其の時の有樣から見ますと異常に荷爲替が殖えて來た。其の時分には總ての輸入品が神戸に這入らずに横濱に這入つて來たので、私の銀行でも俄に商賣が殖えて來たというて訝る位であつた。普通の商賣は甚だ乏しいと思つて居つたけれども、戰爭の爲に大に變化を惹起して、同時に是は大變だと思つた。向後木綿物に付いては、殘らず日本人は外國の品物より外扱ふことは出來ぬやうになつてしまふに相違無い。どうかして之を內地で作ることが出來ないものであらうかといふのが、紡績事業に力を入れなければならぬ動機であつたのです。其の他絹織物又は製麻、この事業も多くは右に述べる理由によりて創立するに至りました。又瓦斯事業は、其の前からして東京府の共有金の關係から私が擔任して居りましたから、是も相當の時機に自分の主義の合本法に依つて東京府の關係を離れて、民間で經營するが宜からうと思つて居りましたが、遂に十八年に民業とすることになりました。さういふ譯で、どうしても社會の物質的事業を勢ひ自ら拵へて、さうして此の銀行事業と良いコンネクションを造るより外無いと考へた。又それが實際急務であつた。これが彼是と遂に多數の仕事の關係を殖したところである。恰も前に申す草鞋も賣らなければならず、味噌も賣らなければならず、反物も賣らなければならなかつたといふのは、或は時代の要求と申して宜からうと思ふ。

時代の要求と責任解除

が併し何時までもさういふ時代て居るものてはなからう。既に其の時代の要求は滿足した。まだ多少不滿足があるかは知りませんけれども、追々に改むべきは改めなければならぬと自分も思つて居りました。私に對して近頃餘り各種の事業に關係が多いといふ非難もあるから、それて俄かに心を動かしたといふ譯てもありませぬ。年を取りましたから多少用を節したいといふのは、勿論重なる原因てはございますが、併し全然老衰したから社會を御免蒙るといふ趣意てもございませぬ。しかしながら前に申すやうな事情て、今日御集りの皆樣の御關係の事業に付いては、殆ど己が首腦の位置に立つて今日に至つたのてあるが、熟〻將來を考へて見ると、もう皆樣て充分遣れるのてある。私を御引留なさらんても宜い。多少居つたのが宜いと思召すこともあるか知れませんけれども、是非引留めなければならぬといふ程の必要も無いてあらう。さう何時までも各種の事業に關係するといふことは勿論好ましいことてはない。殊に大勢も今申上げた通りてあるとすれば、此の邊を以て任を辭するといふは最も適當てあらう。――斯う考へまして、今日を以て、第一に情合の厚い、關係の深い皆樣の各會社の任務を解いて戴きたい。而して任務を解いて戴くといふには、唯一片の辭表を以て御免を蒙るといふことては、別して交誼の厚い皆樣に對しては不親切の行動に相成ることを恐れまするので、失禮てはありますが今日御集りを願つて私の衷情を申上げた譯てございます。さういふ譯なら仕方がない。自分等てどうか工風をして遣らう。併し行掛りがあるから多少の相談をしなければならぬと、斯ういふことてございましたら、假令行掛りが無うても經濟界を全く御免を蒙るといふ譯てはない。御相談に應じまする。併し死ぬ迄も此の多數の關係を繼續するといふことは、餘り智惠の無い所作と心得ますから、茲に皆樣の各會社に向つて、是非今日の責任の位置を辭任後の衷情

御願のやうなことを、御呼立てして申上げるは失禮てございますが、今述べた理由はいろ〳〵混淆して居りますから、事理明晰とは申されぬかも知れませぬ。約めて申すと、第一に年を取つたから、親戚も朋友も、少し用を減すが宜いてはないかと申されるけれども、一つ減じ二つ減じ、といふことはどうしても出來ない。それて辭するといふ以上は、總てを御免蒙らなければならぬ。其の中には斯ういふ行

掛りがあるから、此の始末を附けないで引いては困るぢやないかと、斯う思召される方があらうと思ふ。例へば岡崎君の日韓瓦斯會社の如き、犬丸君の人造肥料會社の如き、西野君の帝國劇場會社の如き、御前に頼まれて遣つて居るのに、其の頼んだ人が手を引いてしまつては、後の始末はどう附けるといふやうな小言が必ず出るだらうと思ふ(御小言ではなからうけれども)。さういふやうなことは、必ず行掛り上御相談に應じて、取纏りを附けねばなるまいと思ふ。小林さんのホテルに付いても同様であります。梅浦君の石川島造船所にしても、己は近頃這入つたのに出し拔いてしまふといふのは怪しからぬ。其の他にも多少さういふことはありませうけれども、それを一々考へて居りますと、矢張元の通りになつてしまふ。結局死ぬまで止めることは出來ぬといふことになる。或は今年に限つたことはないかも知れませぬが、七十の年が二度ある譯ではないから、今年を以て期限とする外無からう。されば此の機を以て御免を蒙るといふ考を起しまして、遂に其の中の最も密接の關係を有し最も御申譯をせねばならぬ皆様に今日御集りを請うて、衷情を吐露する次第でございます。もし非難論者から言うたら、それは御前の己惚だ、餘計なことだ、といふやうなこともありませうが、それは人の見やうで、言ふ人は言へ。知る人ぞ知る。敢て頓著はしませぬ。誹られたからどう、讃められたからどうと、人言に依つて動かうとは思ひませぬ。これまで既に兎角の批評を受けたのでありますから、止めるに付いても亦批評があるでありませう。孔子は『四十而不惑、五十而知天命、六十而耳從、七十而從心所欲不踰矩』というてあるが、私は今日矩を踰えるのか踰えぬのか判りませぬが、唯人言に依つて心を動かしはせぬ積りであります。讃められたから遣る、誹られたから止めるといふ趣意ではない。唯折があつたら〳〵と考へて居りましたが、それからそれと種々の關係が生じて區切りが付かない。實は先年病氣以後、餘程各種の關係を減省した積りでありましたが、人から言はれると何時でも餘儀無くなるのです。併し其の餘儀無いといふ間には、自ら餘儀無くしたいといふ氣味も無いではありますまいが、さういふことは既往のことですから、人に向つて苦情も言へず、また自らも唱へない。今日申上げた所を以て、どうぞ是非共御免を蒙りたい。——何と仰せられても、斯う考を定めました以上は、御承諾を願はねばなりませぬ。其の爲に若しも御親みが薄くなる

といふやうなことでは困る。私は皆様の會社に對しては何處までも株も維持して居ります。御相談があつたら何時でも應ずる積りである。併しもう事實に就いてそんな相談相手にならんでも十分に行けるに相違無い。けれども此の上は強ひて御引留め下さるといふことは、これまで必要の無い上に、それでは私を愛する情が薄いといふものではないか。深い御交りであるからは、今度の事は寧ろ喜んで下さるべき譯で、成る程仕方が無い。さういふ譯なら他日必要の時には相談に來ると、快然と斯う仰しやつて戴きたいと思ひます。甚だ長たらしく申上げて前後不揃でございますが宜しく御承知を願ひます。

（明治四十二年六月六日、兜町澁澤事務所に於て各會社の重役諸氏に對し、心事を披瀝したる告別演說なり）

退官と理想

九四　實業界勇退と渡米の決意

此の機會に於て一身上に關する二つの事を申上げて置きたいと思ふのでございます。それは御承知の通り、私は從來各種の事業に關係して居りました。即ち各種の會社の取締役もしくは相談役監査役として――其の數はなか〳〵少くなかつたのです。けれども熟〻考へて見ますると、何時までもさう種々の事務に關係するのが相當とも思ひませぬ。尤も其の此に至つた所以を尋ねると、已むを得ない事情があると私は思ふ。回顧すれば明治六年に私は第一銀行に入りました。此の第一銀行に入りましたのは自ら好んで入つたので、而して自ら入つたと云ふのは、或は私經濟の意味もあつたかも知れませぬが、より強い考は此の商工業といふものを發達させなければならぬ。商工業の發達を謀るには合本法に依る外は無い。自分は從來漢學も洋學も學び得たこともなし、又熟練し得た事も無い。何が、我が才能に通ずるかといふことは甚だ選み兼ねたけれども、先づ銀行業などは是から先丹誠して、一方には其の學理をも研究し、實務も練磨して行つたならば、或は遣れはしまいかと思ひ、又一つには其の時分の商工業者の一體の思入れが甚だ卑屈であつて、一般の社會からは大に卑下されて居たといふことは、少し年を取つた御方の能く承知せらるゝ所である。斯の如き微力斯の如き品格では、迚も國を富すことは出來ない。不肖ながら自分は幾らか他の模範にならうといふ理想を持つた。そこで第一銀行に入つたのである。ところが、さて第一銀行の仕事を遣

るに付いてとんと行支へたと云ふのは、第一に御得意がない。詰り三井とか小野とかいふ株主が我が金を出して銀行を組立て居るとは云ふものゝ、又其の人達が銀行の金を借りて行く。俗な言葉で言へば『鼬ごつこ』をするやうな有様で、新しい得意を容易に見出すことが出來ない。左様な有様で如何なる結果を來したかといふと、明治七年には小野組が破産した。小野組破産の結果、第一銀行は創業早早大失敗に終らんかと掛念せられた。併し幸に貸金には擔保品もありましたので、破産の場合に至らずに濟みましたけれども、兎に角當時の情勢はさういふ姿であつた。詰り其の頃の商賣の中心は、堀留とか、伊勢町とか、傳馬町とかの邊にあつた。今は少し其の區域も動いて來ましたけれども、――其の中心地の有力なる商賣人、――其の中には今でも有力の者もありますが、先づ杉村とか、塚本とか、或は小林とか、丁治とかいふやうな重立つた商人は、成るべくたけ我々改進主義の商人を遠ざけるやうに心懸けた。蓋し今に潰れるだらうといふ危みを以て待遇して居つた。此の姿では迚も改進主義の商賣人の範圍を擴めることは出來ない。如何にもして、守舊主義に改進主義が打勝つといふ時代にならなければ、自分の理想を實行することは出來ないと、斯ういふ觀念を惹起した。

富國的觀念と各種事業

さういふ念を別して深く起したのは明治十年頃と思ひます。十年の戰爭の變化から事業が進んで來る。此の邊時機ではないかといふ觀念を強く起したことは、今でも覺えて居ります。それから種々なる工業に力を入れなければならぬといふことを頻りに思うた。其の前に保險業とか運送業とかいふやうなものは是非なくてはならぬと思ひ、運送業は私が政府に居る時分郵便汽船會社といふものを前島さんの力に依つて組立つた。併し是は段々衰へて、とう〳〵三菱と合併してしまひました。保險會社も其の時分に組立てた。併し眞に工業に力を入れたのは、今申すやうに多分十一年頃から最も其の念慮を強くしたやうに覺えて居ります。さて運送會社は段々三菱の手によつて成立つて來ましたけれども、保險會社は私が世話をして發達を謀つた。併し運送業に付いては、三菱のみでは如何あらうかと云ふ掛念から他に一の事業を起さうといふので、共同運輸會社といふ三菱に對する競爭會社を造つた。爾來五年七年と經つ間に、追々株式組織の利益を人も知るやうになり、從つて人も力を入れるやうになつて來た。迚も其の中の重

なるもの即ち保險事業抔は、中々普通の商業資本では成立し難いもので、其の時に武家華族十數名、横濱鐵道の引受が沙汰止みとなり、其の拂込んだ金が殘つて居りますので、頼む樣にして保險と紡績業とに其の資金を入れて貰つたといふことが、抑、其の會社を起す主因となり、從つて私が自然と種々の事業に手を出す因緣となつたのであります。明治十八九年頃からは、獨り大阪に於ける紡績事業のみならず、其の他にも手を著けた。製麻會社、織物會社、煉瓦會社、人造肥料會社等の創設にも力を盡したのは、大抵明治二十年頃から二十一二年頃の間と思ふ。斯く種々の事業に關係する念慮の起つたのは、銀行業の得意を造らなければならぬといふことを深く期したのが原因である。明治十一年頃と覺えて居るが、銀行は何を得意にするか。預金ばかりを得意に持たなれば、銀行事業の發展する道理は無い。恰も好し亞米利加のバンカース、マガジンにも同樣の事の書いてあつたのを見て、私が一の論文を書いたことがあります。それ等が最も各種の事業に手を出す原因に相成つて、其の事柄が一年々々に進んで參つて、自分の力が一向强くなつた譯ではなかつたけれども、關係は年一年に殖えて來て、過日辭表を出して見ると、是ほどの事業に關係を持つたかと、自分ながら可笑いやうに感じました。

實業勇退の眞意

元來どのやうな人でも、左樣に無限に多數の仕事に能力の屆くものでないことは明かである。其の初の期念は今申上げるやうな事情であつて、自身と雖も左迄間違つた料見ではない。當時に於ては實に已むを得ぬことであつたと思ふけれども、何時までもこれを繼續するといふことは適當でなからうと思ふ。さらばと申して、私が明治六年に商人にならうといふ念慮を起したのは少しも誤つては居ないと考へますから、棺を蓋ふまで其の主義をば立て通したいと思ひます。其の間に時々自らは動いた積りはありませんけれども、他より動かされたことは幾度もあります。併しながら幸に今日まで繼續し來りましたから、矢張此の實業界に身を置きて、微力ながらも力を盡して行きたい積りでありますが、併し何時までも昔日の有樣を繼續すべきものではなからう。況や其の時代から比較して見ると、申さば皆脊丈が伸びて、最早十分に獨歩みが出來るやうになつたのでありますから、或る場合には私の居つた方が多少爲にならうかとも思ひますけれども、今日はもう御別れ申す時機であらうと、斯う思ひましたので、先日から其の事を關係の面

面に申出てた次第であります。併し第一銀行は、其の初私の商人となつた場所でありますから、經濟界を全く退くといふ場合でない限りは、――それも餘り老衰したら職務を全うすることが出來ませぬから、繼續して居るのも宜くないと思ひますけれども、未だそれ程に老衰したとは思ひませぬ。――或はしたかも知れませぬけれども。それ故に第一銀行の事業に就いてはもう少し微力を盡したい。――皆樣にさう嫌はれぬ以上は。そこて他の場所は、丁度七十といふ時てあり、此の邊を機會として是非區切を附けたいといふ考て、本月の六日に其の事を申述べる爲に此處へ御出を願つた人もございますが、未だ殘らずは片附きませぬ。或は據無いから同意したとか、或は同意しないとかいうて、未だ押問答をして居る分もございます。けれども私の期念は縱へさういふ事を言はつしやる方があつても、一旦申出した以上は――非を遂ぐるといふ譯てはないが――困るといふから又止るといふては、何時迄も極りが付きませぬ。殊に情合は勿論變りませぬし、此の先とても何か御相談を要することがあれば之に應ずる覺悟て、必ずしも一切拒絕するといふ趣意てはない。從來自分が多くは首腦の地位に在つた會社のことてありますから、假令其の會社の重役の位置を離れても、自身經濟界を退かぬ限り、其の關係は從來と變らぬのてある。況や私は相當の株主てもあるし、其の株を今賣つてしまふなどといふ意味ては決してない。さすれば情態に於て少しも變るところはない。唯表面の職務を御免を蒙つたに過ぎないのてあるから、そんなに力を御落し下さることはあるまいと申して、頻りに押問答の部分に對して同意を請うて居るといふ次第てございます。是が私の一身上に大に變化を來した點てあります

渡米の決意と國際問題

から、龍門社の評議員諸君に一應申上げて置きます。

それから更に一つ申上げるのは、昨年亞米利加から實業界の人々が、日本の各商業會議所からの誘引に依つて、本邦へ視察といふか觀風といふか來られた。それに付いて、私は商業會議所に以前長く會頭をして居つた緣故もあり、而して此の事は唯商業會議所といふ關係ばかりてはない。自ら國際の關係を持つて居る事柄てございまして、外務大臣も成るべくは貴下が個人として一の招宴を開いて呉れたら、大に來客に對して好い感情を持たせるてあらうといふ內々御誘の言葉もありました。さなきだにと思つた折柄てありますから、一日の歡迎會を開きまして、

大層都合よく日本滯在中諸方の觀迎も行屆いた折柄、丁度米國艦隊は來られる。それに對する歡迎も頗る盛であつて、旁〻以て多少兩國間の情意を融和したと思ひます。其の續て今度は米國から來て呉れと言うて來られたさうです。其の初めはシャトル、タコマ邊の四個所の會議所の申合である。昨年は十一會議所殘らず擧げて來た。今度は其の會議所が殘らず聯合して言うて來た譯ではないが、外務大臣は昨年の繼續の事柄であるから、これを機會として成るたけ日本でも彼等の滿足するやうな顏振の出張を煩したい。況や米國の方では尙更どういふ顏振が出て來るかといふことを注視して居る際でもあり、唯慰の旅行とは違ふといふやうなことで種々考へて居られた。尤も商業會議所が首腦ではあるけれども、是非貴下に行つて欲しいと云ふことを、嘗て外務大臣から內意がございまして、續いて次官からも會ふ度每勸められました。また東京商業會議所は中野武營氏が、昨年の行掛りから自分も行きたいと思ふ。さりながら自身が一行代表者の位置に立つやうな譯になると、日本の貫目を輕くする虞があるから、出來るならば貴下を煩したいと云ふ懇篤の話もありました。私は何も勿體を附ける積りもありませんけれども、第一には言葉も出來ませぬし、又船は弱いし、年は取つて居る。何れの點から考へても容易に承知しましたとも申兼ねて、其の都度に何れ考へてと、殆ど二三月經過して居りましたが、丁度此處に御列席の中にも一二其の協議に與つた御方もありますが、此の間實業家連の會合で諸井君なども其の御一人の仲間でございました。商業會議所へ寄られたときに、いつまでも頭立つ人が決まらんで居つては甚だ困る。而して澁澤に大分諸方から囑目して居るやうであるけれども、未だ判然と立つといふことを明言せぬ。從つて他の向々も差定まらぬ。時期も迫つて來るし、殊に北部ばかりでなしに桑港以南も皆一致して遣るといふことになつて、領事からの電報も來て居る。旁〻以て早く決めなければ困る。吾々の職務といふ譯ではないが、實業家の打寄だから實業界の代表の考で協議して、是非早く定めて貰ふやうにしたら宜からうといふ種々相談の結果、千家男、高橋男、中野氏三人が當日會同仲間の總代として、是非私に一行の代表者に爲つて呉れといふ相談を受けました。是に至つて御斷りする譯にもならず、殊に平素親しくして居る人々から斯くまで勸められるのは、誠に迷惑と思ひましたけれども辭す譯には行くまい。

判然國家の關係と云へるかどうか知れませぬが、所謂老後の御用納の覺悟を以て御引受しませうといふことを三人に答へました。續いて其の翌日及び翌々日外務省の人々大藏省の人々なども打合を致しましたが、未だ其の手續はどうするといふまでに運びませぬ。續いて桂侯爵井上侯爵なども、これに付いてはどういふ振合にして遣つたら宜いか。どういふ顏振を選んだら宜からうかと申すことを、蔭ながら力を添へられるやうな譯で、昨日も桂侯を尋ね、今日も他の用て井上侯を尋ねました所、愈〻立つさうだが、それに付いては餘計な御世話か知らぬが、兎に角個人とは云ふものゝ、自ら一國の商賣社會を脊負つて行くやうな譯になる。誰が見てもさう見えるから、君が行くならば『政府の事は己は知らぬ』ては困る。さればと云つて役人てないから、さう細いことは知らんても宜いが、財政の事は一通り心得て行つて呉れんては困るといふ樣な話て、段々注文が重りさうてございますが、勿論そんな事を聽いて行つて、亞米利加てそれを役に立てるといふことは出來ませいと思ひますけれども、愈〻私が出掛けると云ふに付いて多少老人連が同情して、心配をして呉れるといふやうな譯てありますが、私に取つては存外責任の重き旅行をせねばならぬ場合になつたので、唯其の決意を致しましたといふことを御話申して置きます。（明治四十二年六月二十四日、龍門社評議員會席上に於て同社員に告白したる演說なり）

濟貧恤窮は人道

九五　濟貧恤窮に就いて

此の講演會に當りまして、私が此處に一場の愚見を陳ずるの光榮を得まする次第てございます。而して私が申上げて見たいと云ふ問題は、貼出してございます通り『貧を濟ひ窮を恤む』と云ふ題案てござります。御承知もございませうが、私は本業が銀行てございまして、當年の六月までは其の他の各種の事業にも關係致して居りました。併し餘り種々なる業務の關係は老人堪へ兼ねまして總て御免を蒙りましたけれども、矢張等しく經濟界に銀行者たることは尙ほ繼續致す積りてございます。さう云ふ身柄てございますから、此の問題は甚だ不都合千萬てございます。或は罪滅しにても言ふと斯う仰しやるか知りませぬが、それ程罪を作つた覺えはございませぬ。又擬慈善てあらうかと云ふやうな御評も受けるか知りませぬが、自ら慈善家を以て任ずる程十分の講究はしてございませんからして、

斯う申上げましても、完全な眞理を諸君の御耳に入れ得るや否やは分りませんけれども、從來東京市の養育院の事務は引續いて經營して居りまして、多少濟貧の事には趣味を有つて居ります積りてございます。同時に聊かの經驗もございますので、此の問題に依つて愚說を此處に陳述して見たいのてございます。濟貧恤窮と一口に唱へますると、殆と漠然として唯貧を濟ひ窮を恤むに就いての道理を講ずるかと云ふやうにも聞えますが、私はもう少し範圍を狹めまして、我が東京市に於ける濟貧恤窮と云ふ意味に於て、愚見を申述べて見ようと思ふのてございます。併しながら貧を濟ひ窮を恤むと云ふことは、單に東京市がせねばならぬとか、何の地方がせんても宜いと申す事柄てはないので、殆ど天下を擧げて、凡そ人類の住うて居るところには必ず相當の事はせねばならぬし、又相當なる設備はあるのてございます。故に範圍を狹く東京市だけて申上げましても、矢張等しく國に關する濟貧恤窮と云ふことにはなり得るだらうと思ふのてございます。又此の濟貧恤窮と云ふ事柄が、種々の方面から見られるのてございまする。例へば政治家の目から見た濟貧恤窮、教育家の眼から見た濟貧恤窮經濟眼を以て觀察する濟貧恤窮、又人道に依つて論ずる濟貧恤窮と、濟貧恤窮の觀察は種々なる方面から見得るだらうと思ひます。私の本分は經濟の中に居りますから、先づ多くは經濟眼を以て見たいとは思ひますけれども、併し濟貧恤窮なる方法は人道に基いて發するものてあつて、此の人道は政治上からも教育上からも、勿論重んぜねばならぬことてありまするからして、茲に論ずる所が單に經濟範圍に止めて、政治とか、教育とか、若くは人道に關係せぬものだと云ふ意味てはございませぬ。故に大袈裟の申分を致しまするならば、總ての方面から見た、濟貧恤窮として申上げたいと、斯う考へるのてございます。

此の問題を申上げますに就いて凡そ二つに分類する。先づ濟貧恤窮の東京市に於ける概略の歷史、又慈善の事柄が各種に分れて行はれ居りますけれども、私が詳かにして居るのは、さう數多くはございませぬから、基本を東京市養育院に採りまして、現狀斯かる有樣てあると云ふことの經歷と、目下の現況を先づ諸君の御面前に陳情して見たいと思ふのてございます。同時にそれが海外の國々と比較して申上げると云ふ譯にはなりませんけれども、先づ英吉利の倫敦ては如何なる振

合てあるかと云ふ比較は、多少參考にならうかと考へます。いまだ充分調査は致しませんけれども、彼の國には斯う云ふ有樣に組立てられて居ると云ふ概況をも、併せて申上げてみようと思ひます。而して先づ東京市に於ける濟貧恤窮の歷史と現狀を叙述するを前段と致しまして、其の濟貧恤窮が前に申す政治眼から見る、經濟眼から見る、人道から見ると云ふ差別に依りて、未來斯くありたいと云ふ理想にまで論及致しまして、此の問題を完くして見たいと斯う考へます。

東京養育院の起原

元來貧を濟ひ窮を恤むと云ふ慈愛心は、帝國の古い昔から行はれて居つたやうに思はれます。ずつと昔光明皇后が貧者の垢を洗つたなどゝ云ふやうなことも歷史に見えて居ります。德川幕府時代の救助法もそれ〴〵あつたやうに見えますが、一體日本の習慣は家族制度ですから、一家と云ふものに種々なる制度が網羅されて居る。又隣保の制度も行き屆いて居りましたから、人を濟ふと云ふ事柄は小さく分れて、或は親戚に依り或は故舊に依つて濟ふと云ふやうな仕組が多いやうに見受けられます。海外諸國のやうに個人主義なる風習でなかつたからして、大なる團體で人を濟ふと云ふ事柄よりは、個々に相濟ふと云ふことが行はれて居つた爲に、貧窮人を濟ふと云ことが、海外のそれの如く世の中に持囃されると云ふことが無かつたやうに見えます。のみならず日本には、其の昔は乞丐と稱へる種類があつた。これは政治上から西洋のそれの如く十分に禁止しないやうでございましたから、舊幕時代には群を成して所々を押歩いたと云ふやうな有樣でありました。維新になりましてから明治四五年の頃、東京市に於て乞丐の徘徊するのを、市の政治に從事する人々が憂へて、殘らず狩盡したか知りませぬが、先づ一時の手段を以て乞丐を狩集めた。さうして此の市街に乞丐の歩行して居ることを禁じました。これは何でも外國の貴賓の來るに付いて、海外の國には乞丐などといふものが徘徊せぬので、日本にのみあるのは誠に見惡いから、是非これは狩集めるが宜からうと云ふことであつた。これは多分明治四年頃と覺えて居ります。所が乞丐を如何に處置するかと云ふ始末に困りまして、其の時分に非人頭と云ふものがあつた。是は車善七と云ふ人で、幕府の時代からの職業であつた。其の人に賴んで、集めた乞丐の生活の方法を講じて、其の職業を與へると云ふことを心配させた。それが今日の東京市の養育院の濫觴でございます。左樣な處置は執りま

したけれども、一時の手段としては車善七も意見も立つたでありませうが、之を繼續してやると云ふ、又其の中に幾らか生活の途に付くものは出院させる。從つて又他の乞丐を此處に集めると云ふ方法に至つては、どうしても永續的にやらなければならぬてすから、非人頭にのみ任せて置く譯にいかぬ。また其の收用する費用は、其の頃東京市にございましたる共有金と云ふものを以て之を支辨した。而して其の共有金といふものは如何なる性質かと云ふと、天明から寛政へ掛けて有名な幕府の老中松平越中守、白河樂翁と稱へる人が、至つて儉約な人て政治上の費用を詰めましたが、町方の諸經費をも節約せしめて、其の節約させた金高の一割と云ふものからして、其の一分を其の事に從事した者に與へ、二分を豫備に備へ、殘る七分を積立つて、さうして後々に市の共有金にするが宜からうと言つて取極めた。それが寛政頃と存じます。俗に七分金と稱へて東京市に備つて居つて、維新の初めには其の金額は中々大きな高になりました。此の金額を以て、東京府て車善七に託して乞丐を收容することに致しました。養育院の當初の起因は左樣なことです。さうして其の場所は何處かと云ふと上野の護國院と云ふ寺てあります。—

—其の寺院に收容を致しましたのてあります。明治の初めには東京に於ける濟貧恤窮卽ち慈善的事業と云ふものは、此の養育院が唯一の設備てあつたので、其の他には何も無かつたと申上げて決して過言てはございませぬ。其の後に至りて起つて來たのは、多分明治十一二年頃てあつたと思ひます。それから追々に同樣の者が出來て參りましたが、今申述べました養育院の初め頃には、未だ維新草創の場合てあつたから、總ての人が皆政治に熱狂して、決して慈善の濟貧のと云ふことには、誰も振返つて見る人は無かつたと云ふ時代てあつた。他の慈善設備に關するものは、此處に取調べたものがありますから、後て朗讀して御聞に入れませうが、先づ養育院の事業に就いて尙ほ其の經歷を叙述致しませう。

養育院の廢止とその感慨

護國院に收容致しましてから、引續いて追々に入院者が殖えて來た。中々護國院ては場所が狹いから收容し切れなかつた。私が東京市の養育院に從事したのは、其の護國院から引繼いてから今迄關係して居ります。——抑養育院には緣故深い一番古い者てある。東京市養育院の役員中て、私程長く勤めて居る者は無いと申上げ得るのてございます。護國院を移しましたのは、下谷和泉橋の元藤堂屋敷

の跡であつた。是は何しろ伊勢の津の藤堂と云ふ大名の跡だから甚だ廣かつた。其の時分には大名屋敷の跡は廣大に過ぎて始末が付かぬものですから、是が窮民救助の假場所になつたと云ふ事も、今考へると頗る奇觀であつた。立派な長屋を種々に區別して、乞丐を入院させて收容致したのでございます。多分明治十五六年頃迄此處に養育院を繼續致しました。所が十二年に東京府會と云ふ者が出來まして、此の東京府會が年々養育院に對する費用をば決議致して、東京府から養育院に其の資金を支出して呉れる順序であつたが、明治十六年に至つて東京府會が養育院廢止と云ふ案を出した。其の時の府會の議論は、養育院の如き物を持續して置くと、東京市のみならず日本全國に惰民許り增殖して往く。詰り惰民の養成所になる。人の勉强心を妨げる設備であると、英吉利の窮民に對する救助法は大分學者が非難して居る。或る經濟學者政治學者の非難說が段々あつたでございませう。英吉利にも其の時分の東京府會が一面許りを觀察して立論する如き論者も多くありましたらう。併し世の中は一面許り見るものでない。色々の方面があつて、萬事宜しきを得るのだが、さう云ふ風に濟貧恤窮は宋襄の仁に陷り易い。

姑息の愛に流れる。其の樣なことをしては人の勉强心を阻碍する。是は寧ろやらぬが宜からうと云ふ說が、其の頃の府會には多數であつた。而して到頭養育院を廢止した。其の時分私は矢張院長で居りましたから、此の東京府會の議論には極力反對をしました。英吉利の學者がさう云ふ說を云ふのは、畢竟窮民救助の方法が惡いからである。もし其の方法が惡ければ惰民養成にならぬとは言はれない。併しながら、段々生存競爭の結果、貧富が懸隔して來ると云ふことは、國の文明の進む程尙ほ烈しくなる。是は免れぬ道理ではないか。故に此の懸隔が烈しくなればなる程、貧者は益〻貧者になり富者は愈〻富むことになる。倫敦の東部の貧民抔と云ふものは中々烈しい有樣である。而して倫敦の全體は今日富實して居る。世界の都府だと人に稱せられて居る倫敦に、極貧なものが澤山あるではないか。而して英吉利に、社會主義から論じても、或は政治觀念から見ても、又は經濟から論じても、矢張相當の救恤法は行はれて居ると云ふことが現在あるではないか。或る學者がさう云ふ風に議論をするのは、今東京市の如き追々發達して大都市になり得る資格を有つて居る都市を、其のやうなことをやつて、甚しきは野に餓莩どこ

ろてはない、市の眞中に餓莩が出ても恬として住民は構はぬか。外國に對して何と云ふか。昔日の乞丐を狩つたのは餘り良い手段ではない。一を知つて二を知らぬ方法であつたから、唯車善七に委ねると云ふ、跡始末の付かぬ處置をしたけれども、今日は其の方法が立つてはないか。其の收容をして居るものを惰民たらしめぬ仕方はいくらもある。目前の施設が惡ければ善くすることも出來る。然るを今日唯一片の議論を以て、數年遣り來つて居る設備を廢して此の窮民を路頭に迷はせると云ふことは、苟も仁心あり慈善心ある人の難んずる所ではないか。之をしも忍ぶならば、君を弑するをも忍ぶ人と言はなければならぬ、とまで論じましたけれども所謂多勢に無勢、敵はなかつた。一年だけは止めましたが翌年は、殘留人は宜いが新しく收容するのはいかぬ。生活が出來れば必ず出院させる。死んだら減ずる。減じ切つたら止めろと云ふことに評決された。其の時の府知事は今も現存し居られる芳川伯で、內務少輔にして東京府知事を兼ねて居ると云ふ場合であつた。そこで私は大に之を憂へまして芳川伯に、誠に情無い有樣だと云つて衷情を陳述した。しかるに其の時の東京府會の二度目の議決は、實に涙を溢して殘念に考へました。併し既に議決せし上は據無く東京市の養育院と云ふものをば府の管轄を離して、さうして私の設備にした。同時に婦人慈善會と云ふもの組立つて、貴婦人に依つて年々金を集めて、其の金に依つて僅かな人だけを濟ふ事にした。其の時分廢された時の人員が四百五六十人あつたと思ひます。

自治制と養育院の復活

左樣な譯になりましたから、それを殘らず繼續することは出來ない。そこで下谷の場所は政府の地所であつたのを、政府と東京府でどう云ふ都合であつたか相談し合つて、其の地面家屋を東京府に貰ふと云ふことになつた。故に養育院も長く其處に居つた場所であるからして、俗に申す追出される手切金を幾らか、東京府から養育院の基金として分與して呉れと云ふことを申出しまして、何でも四萬圓を養育院に向けて附與されたと覺えて居ります。尤も其の前に四五萬圓の基金があつたから、都合八九萬圓の基金を以て、それから本所の長岡町夜鷹小笠原と云ふ場所に移轉した。それが養育院が三轉した有樣である。其の時分には人數も減じて、二百幾十人しか置きませなかつたと思ひます。其の細い數字は覺えて居りませぬ。今申上げたのは明治十八年の頃で、軈て東京は自治制度が布かれて、二

十二年に東京市は自治制になりました。併しながら其の頃は今日の如き制度でなく、全體を支配するのは府知事兼市參事會の會長と云ふことで、特に市制であつた。養育院は其の市制を布かれた時に私共熟考して、養育院は我々其の持主と云つても我が物ではない。既に市制を布かれて自治制が行はれるに際して、斯樣な設備はもと東京府から分れて今日になつたものだから、之をして何時までも私の設備にして置くのは將來の爲に宜しくない。これは矢張東京市の所管に屬せしめ、而して根が慈善事業であるからして、引續いて婦人慈善會も補助する。他の寄附金も種々なる方法を以て慈善者から募集することを力める。市の事業であるからというて、市税のみに依つて經營するものとせんて宜しからう。慈善者に依頼することは是迄通りにして少しも差支は無からう。私の設備て維持して居ると、萬一其の人が亡くなると其の事業は衰頽して、遂に憂ふべき場合に至らぬとも言へぬ。先の東京府會の如き暴論は最早出はすまいから、市の營造物の中に加へるが宜からうと云ふのて、明治二十二年に始めて東京市の養育院になりました。爾來引續きて東京市養育院て、私は養育院の事務を扱ふ爲に東京市參事會員になりまして、東京市にある所の造營物は常設委員を作り、其の委員中の委員長と云ふ職分て、養育院に關係致し來つたのが十年許りてございます。其の後明治三十一二年頃てございましたか何分市參事會員として養育院に關係致して居りますと、市參事會員は市政に關する職分てあつて、或る場合には養育院の事務ばかり取扱つて居られぬ。市街鐵道が出來る。それに對して反對するとか同意するとかさう云ふ事柄がある。市會と市參事會と說を異にする場合が生じますから、惡くすると養育院に一心に從事することが出來ませぬから、そこて市參事會員を辭退致しまして、續いて院長と云ふ東京市の吏員に相成つて、爾來今日迄經營して居る。是が養育院の今日迄繼續した歷史てございます。

養育院の擴張

其の以來養育院が如何に發達したかと云ふと、本所長岡町から多分二十九年に唯今の小石川の大塚に移りましたのてございます。是は長岡町から見ると大に設備を增しました。併し其の頃には、多分に入院者があるとしても七八百人に過ぎぬと云ふ豫算て、總ての場所を建築致しました。病室なり通常の居室なり、或は子供の學校の設備、工藝を與へる工場或は洗濯場、其の他の施設を今申す位の豫定

て準備し、其の地所は一萬三千坪許りを買ひまして設けたのてあります。然るに明治三十年頃から段々入院者が増して參りまして、迚も今の場所て收容が出來能はぬやうになりました。甚しきは一疊敷に一人以上を入れねばならぬと云ふ程窮屈になつて參つた。如何に貧民ても、殆ど衞生を害すると云ふことになりました爲に、屢〻これが擴張を謀りましたけれども、東京市の費用も多端て、養育院に金を費すことが出來ない。但し養育院に就いては成るべきたけ市費に頼らぬと云ふ經營て遣りましたから、私共自ら東京市のものてございますけれども、費途は多く慈善基金に頼りたいと云ふ主義て、力めて市の支出は望まんて遣り來りましたけれても、如何せん場所に困つて參りますと同時に、子供の居所及び教場を、大塚の一院中に部屋は分けて入れ置きましたが、確然と大人等と區別することが出來ぬ。—同じ家屋の中に收容致し置きました。然るに此の子供と大人とは大に性質が違ひまして、之を一所に收容すると云ふ事は宜しからぬ制度てある。是非子供だけは別に置きたいと云ふことは、數年前から私共の深い希望てあつたが、唯其の金を得ることが出來ぬ爲に困窮して居つた。是非其の事を行ひたいと云ふ都合から、一昨年來大層苦しみまして、幸に昨年の秋に至つて漸く市參事會が大に便宜を與へて呉れまして、即ち巣鴨に幼童を別置する分院が組立てられました。此の巣鴨分院の總坪は一萬坪、建坪千六百坪許りて、もと大谷派本願寺の中學校に拵へました者故、教室も寄宿舍も立派に備つて居ります。食堂、浴室、會堂總て具備して居りますので、或は皆樣の中には御覽なすつた御方もございませうが、若し御覽にならなければ、どうぞ機會もあつたら御一覽下さることを希望致します。

貧童別置と託鉢金

幼童をして斯樣な安全な位置に收容することに相成りましたのは、全く東京市の御丹精てあつた。併し左樣に東京市に御禮は申すものゝ、實は其の金は東京市から出して貰つたのてはございませぬ。今申上げた通り、私共は數年來丹精しまして、院資增殖會と云ふものを起して、小さい金を諸方から御願して集めて居ります。まだ中々目的通りに集りませんけれども、五年を約束して勸募して居ります が、五年の間に凡そ十萬圓或は十三四萬圓にならうと云ふ豫約が出來ましたので、前に申した學校が十三萬圓て買入れることになりましたから、是非共買つて呉れと云ふことを東京市に迫りました所が、東京市參事會は、誠に尤だから買つて遣り

たいが金が無い。しかし事柄は尤と思ふけれども、金の都合が付かぬと云ふことですから、それならば院資增殖會に集つた金が目下四萬圓ありますから、此の四萬圓だけをば東京市に振込むが、あと九萬圓金が無ければならぬ。此の九萬圓は養育院の基本財産の公債證書を東京市に御貸し申しませう。これを以て東京市で九萬圓出して下さい。さうして東京市が九萬圓の基本財産の利息だけ補助して呉れると云ふと、養育院の事業は是迄通りに其の經營が出來る。而して此の利息は二年か三年補給をして下さると、其の間に我々が一生懸命に託鉢をして、九萬圓は是非補つて元に戻します。二三年の間利息を補給して下さい。さすれば幼童別置が出來ます。是非幼童別置をしなければ、本院は實に人數が多くて困るのみならず、幼童は是非共分けて別に收容したいと言つて、段々市參事會に迫りましたのが、聞屆けられて昨秋決定し、此の春取引をして先日分院の開院式を擧げることにしました次第てございます。

惡童と感化部

尙ほ其の他に養育院はどういふ方面に力を伸して居るかと申しますと、明治二十九年から三十年に掛けて、市内の乞食とも違ひますけれども、浮浪少年の追々に惡い方に傾く、所謂惡化の虞れのある者が段々ございます。其の徘徊する場所を云ふと淺草、或は日本橋最寄りを、鐵砲笊と云ふもの提げて屑拾ひをして居ります。大きくなると俗に立ちん坊などゝ言ひますが、坂の所へ往つて車の後押しをする。此の子供等がどう云ふ有樣に傾いて往くかと云ふと、多く掏摸となる。掏摸の親方が子供を收容する。私はよもやさうではなからうと思ひましたが、掏摸には立派な教育方法があつて、掏摸學校と云ふも少し大袈裟な申分だが事實はあるのてございます。又面白い話がある。貧窮の子供を貰つて、其の子供を丹精して教育するかと思ふと案外さうでなく、其の子供を己の財源にするのてす。即ち其の子供を貸すのてす。淺草觀音の前邊りに往つて其の子供を連れて乞丐をする。子供が一の財源になり器械になる。此の子供が可哀相げに泣くと、參詣に御出での方も時々錢を投げなさる。錢を得ると子供を返して其の錢だけは自分に取る。それて子供の損料を幾らか拂つて居る。嘘だと思ひますと事實てある。先般養育院て浮浪少年の收容法を吟味する頃に、種々なる方面に人を遣つて調べて見ると、淺草の何とか云ふ所てす。大層貧困てあるが慈善な人だ。五六人の子供を養

つて居ると云ふことで、奇特な人だと云ふのて能く聞合せて見ると、子供を貸す職業を遣つて居る。是は泣子の至つて痩せて居るのが値段が高い。それは極く少年の間の處置て、少し大きくなると惡事を敎へる。先づカッパライなどと云ふ。それからブタハジキと云ひますが、どう云ふ事をしますか其の文字は私にも能く分りませぬ。それから前に申す屑拾ひ、斯う云ふ種類が今日ても東京市に數あるに相違ございませぬ。それが多くは少し氣の利いたのは掏摸敎育を受ける。此等の少年を集めて惡事を止めさして、善導する道を講じたいと云ふのが、明治二十九年三十年頃養育院の人々の發起て、畏れ多いことてすが英照皇太后崩御に就いて慈善資金を全國に下賜されまして、東京ても二萬七千圓分配された。それが吾吾は好い機會と考へまして、內務省に上申して使用方法を養育院て講じて見たいと思ふ。同時に一般からも寄附金を募集して基金を作りますと云ふことを內務大臣に出願しまして、感化部を設置することに致しました。それも三十三年に漸く成立ちまして、本院てやつて見た所が、感化部を本院てやつたのが大失敗て、浮浪少年を感化するのが、反對に普通の幼童を惡化せしめることになつた。敎へるのが却て敎はるやうになつた。惡い人が多人數一緒に這入つて來ますから、一二年遣つて見たが、どうしても養育院に於て感化事業を遣らすことが出來ませぬ。爲にとう〳〵方法を變へました。今其の感化部は如何なる有樣になつて居るかと申すと、吉祥寺と云ふ、甲州街道飯田町停車場を發して一時間足らずて達します。其處に井ノ頭の辨天があり、又御料林がございます。其の料林の中を特に養育院の爲に拜借しまして感化部が設けてございます。現に收容して居る兒童は、今日の所百十八人になつて居ります。卽ち前に申しました種類て、多くは警察から又は養育院に這入つて來た筋の惡い少年、どうしても感化しなければならぬと云ふものを收容して居ります。井ノ頭學校と稱へて多くは皆就學年齡以上、大きいのは十六七になつて居りますから、一方に心の鎭まるやうに善導する。而して大抵感化が屆いたと思ふのは、諸方に徒弟若くは雇預け或は養子に出して、また新しいのを入れる方法になつて居ます。此の井ノ頭に於ける仕事は夫程資金は費しませぬが、それても場所を開きますから建築其の他て殆ど二萬以上三萬近い資金を費して居ります。

傳染病患者と空氣療養

更にもう一つ養育院が子供の爲に斯う云ふ設備を致して居ります。入院する總ての少年は、普通の子供よりは兩親も良くない。又營業も惡い。從つて病身である。其の病氣も通常の者であれば恐れませぬが、肺菌加答兒或は結核にならうとするのが多い。是等はどうしても唯普通の治療では癒りませぬ。空氣療養より外、全治せしめる法が無いと言つても過言ではなからうと思ひます。今日養育院の醫療の設備は、――日常這入つて居る御醫者は左迄大家ではございませんけれども、大體を觀察する御醫者は大學の立派な博士に御依賴して居ります。三浦博士、入澤博士、目下の所は橋本節齋と云ふ博士が主任になつて居りますが、さう云ふ名家が代る〳〵醫長を勤めて居る。丁度入澤博士の醫長時代であつた。同博士は此の空氣療養に付いて、是は醫學上の大理論で、どうしても斯う云ふ場所で斯かる病氣を根治せしめる事は不可能ですから、空氣療養にする外無い。一つ空氣療養の趣向を御採りなさいと云ふ事であつたが、それは費用が掛るから困ると答へたら、それならば成るべく費用の掛らぬ樣にするが宜いと云ふので、三十三年頃房州勝山町で百姓家を借りて試にやつて見たら大に宜いと云ふので、勝山の寺の名は忘れましたが寺院を借りて二三十名やつて見ました。すると段々に其の効能が明かに分つて來ました。又人數を多く遣れば、院に收容して置く程格別に費用が增しませぬ。追々其の方法を講じましたが、何分借家ではいけませぬから、一昨々年から、一層是は轉地療養の爲に療養所を造るが宜からうと云ふことに決しました。前に申しました婦人慈善會に寄附を三年間賴みまして、三年の間に殆ど三萬圓近く寄附を得ましたので、尤も初めから屹度三萬圓に充てようと思つたのではございませぬ。二萬圓以上の金が掛るだらうが、毎回の慈善會で其の集金を寄附して呉れたならは是だけの事が出來ると云ふ豫算からして、房州の舟形といふ所に療養所を造りました。先月(四十二年五月)十六日に開院式を致しまして私も實地を見て來ました。養育院の貧兒を遣るのは惜しい位である。私は肺病でないから効能が無いか知りませぬが、自分で入つて見たい位であります。鏡ヶ浦に面しまして遠く富岳を望み、其の風景は佳し、其の邊の民俗も至つて純朴でございまして、實に好療養所を得たと頗る喜んで居ります。

東京と倫敦の慈善事業

上來申上げたのが大塚本院、巢鴨分院、井の頭感化部卽ち井の頭學校、又最終に申

しました房州の療養所、是等を合計して、今日の總人數を殘らず、養育院の力で收容するかと申しますと云ふと、さうではない。養育院の基金より生ずる金で收容する者は其の內三百人許りで、他の者は東京府若くは東京市が日常の費用は出すのでありますが、總ての家屋其の他の設備は養育院の費用に依つてやつて居ります。例へば棄兒に向つて東京市が費用を出すとか、行旅患者に對して東京府が日常の費用を拂ふと云ふのであります。併し其の割合は頗る安い費額で之を收容して居ります。養育院の體裁は是て大抵申し盡しましたやうでございますが、併し東京市の慈善事業は、私が養育院に關係して居ります爲に斯の如き歷史と經濟とを陳述し得られますが、其の他にどれ程のものがあるかと申しますと色々のものがございます。茲に各種のものを一寸調べて置きましたから申上げる樣に致しませう。例へば福田會、東京育兒院、東京出獄人保護所、東京感化院、家庭學校、出獄人救濟所、婦人救濟所、木賃宿、安料理店、勞働者寄宿舍、無料宿泊所、養育院少年修德會、養老院、今申上げた東京市養育院慈善事業、二葉幼稚園、瀧の川學園、同仁會、私立庶民夜學校、私立第二庶民夜學校、シンリョウ小學校、私立特種學校、盲人技術學校、遺廢院、同愛社、慈惠會――此の慈惠會と云ふのは皇后陛下の御眷顧の下に組立てられてあつて、是も私が副會長で會長は德川公爵が御引受になつて居ります。數を申しますと是程でございます。而して先づ其の中で東京市養育院は、一年の費用が十三萬七千圓を支出する程の大きな仕掛に相成つて居ります。其の他のものは一年の經費が四千圓とか五千圓とかいふ小規模のものであります。慈惠會の如きも、一年の病院費が三萬圓位の高でございます。東京市の慈善設備は凡そ是位のものでございます。假りに倫敦の有樣と比較して見ますと、實に驚入るやうでございます。悉くを讀みますのは餘り煩はしうございますから止めますが、倫敦の慈善事業機關の數は二千餘あります。而して是等に對して、倫敦市に於て一年の慈善事業に對する費額が尠くも七八千萬圓、凡そ一億圓を算へる位である。また法律に依つて救助に支出する費用許りでも、凡そ三千五百萬圓位あるといふ事である。長年貧民救恤のことには苦しんで居る。且又國運の進むと共に、政治上からも社交上からも、段々進み來つた英國であります從らして斯の如くになつて居る。我が東京市も、維新後四十年の間に富も進んだ。人も增した。總ての設備が大に擴

張されたと相互に誇りますが、誇つた今日であつても、漸く今申しました費用は一年の額が二十萬にも充たぬ。東京市養育院が大層大きな金額を費すというても十三萬七千圓。慈惠會が盛だと言つて三萬圓に足らぬ。其の他五千とか三千とか云ふ費用のものが十數箇所あると云ふに過ぎぬ。これに比較して倫敦は一年に市の費用が七八千萬圓と云ふのですから實に比較にも何もなりませぬ。これ程富の程度が違つて居るのではなからうと思ひます。餘りと言へば馬鹿らしい。是は蓋し私の思ふには、前にも申述べました通り、日本には古來の風習として家族の制度から貧民を救助するのが個々の間に大に行はれて居る。從つて團體的救助法が左迄發達されぬのであらうと思ふのでございます。故に此の數字の懸隔は、以て國民の慈善心の厚薄、貧富の懸隔が斯樣に帝國と英吉利と違ふと云ふやうな觀察は大なる間違てある。左樣に思はんても宜からうと存じますのでございます。全國一般の有樣は如何になつて居るか、到底私の淺薄な見聞では明確に申上げることは出來ませぬが、東京市に於ける文明の進歩、都會の繁昌と共に、濟貧恤窮の事業が追々に進み且つ整うて參つたと云ふは、前來に略〻叙述し盡したやうに

政治經濟人道と貧民

思ひます。是からして、濟貧恤窮と云ふ事柄が政治上からは如何、經濟上からは如何、人道上からは如何と云ふ愚見を申添へて此の講演を終らうと思ひます。

前にも東京府會の時分の事を頻りに嘆息して申上げましたけれども、如何にも貧者を救ふと云ふことは、餘程心せぬと大なる過失に陷つて、爲に國の元氣を阻喪し、人の勉强心を阻害すると云ふことは隨分有勝ちのものです。故に政治眼を以て見たならば、果して此の貧者を救ふと云ふことが結構と許りは言ひ得ぬであらうと思ひます。けれども、凡そ人と云ふものが世に立つて、自分さへ安穩に自分さへ富めば、それで人間たるものゝ能事が終るものかと云ふことが、第一に論究しなければならぬ問題だらうと思ひます。若しさう云ふ主義を以て此の世の中を支配して行つたならば、それこそ社會は無間地獄に陷つて仕舞ふてあらうと思ひます。前にも申上げた感化部の人々はどう云ふ通有性を有つて居るかと云ふことを觀察しますと、己さへ好ければ人はどうでも構はぬ。斯う云ふ性質が多い。是は貧困に陷る者の押並べての惡性と云はなければならぬ。自分さへ都合が好ければ人は構はぬ。果してさう心懸ける人だから人より自分の都合が好くなりさ

うなものだが、其の願が反對に來る。自分の都合が段々惡くなりまして、遂に右樣な境遇に陷る。これは其の親も多くは其の性質だから、其の子も亦其の性質を帶びる。故に人たるものは自分だけを以て本位とし、自分さへ都合が好ければ人たる本分が濟むと思ふのは大なる間違で、我が分も勿論立つて往かねばならぬが、人の世に立つは人の爲になり國に盡すと云ふことが、第一の主眼でなければなりませぬ。人の爲になり國に盡すと云ふことには、大きいも、小さいも、廣いのも、狹いのもあらう。各自樣々に相違はある筈なれども、要するに孔子の所謂忠恕の道である。孔子の『我道一以貫之』といふ事に付いて門人が曾子に問うたら『忠恕のみ』、――斯う答へた。忠恕は己さへ好ければ宜いと云ふのとは反對の行爲でありません。果して然らば人道から論じても、斯の如き貧民に對して氣の毒だ、憐れだと云ふことは、人間として出さなければならぬものだらうと思ふ。但し其の憐憫が、若し其の人をして過つて怠惰を增長させるならば、或は害になるか知らぬ。故に其の方法は愼まなければならぬ。其の方法は愼まなければならぬけれども、救助して過つの恐があるから人の不幸は救はんで宜いと云ふに至つては、殆ど殘酷極りて誤れるも亦甚しいと私は思ひます。故に政治眼から見たならば、或る場合には窮民救助と云ふことは寧ろ弊害であると云ふ趣旨も出ないではなからう。併し人道から論じたならば決してさう云ふものではありませぬと、斯う私は判斷する積りである。而して經濟眼から見たならば、どうなるか。是は無論救はなければいかぬのである。若し其の貧民を救はなければ經濟上得てあるか。損てあるか損得許り論じては言葉が野卑になりますれども、畢竟英吉利で富む人が頻りに慈善に力を盡されると云ふのは、前に申す人道もあるでせう。また一方には經濟的觀念から出て來ると思ひます。若し國家に惡い者が澤山出來ると是が法網に觸れて、監獄に入れるとか又は種々なる政治上の處置をしなければならぬと云ふならば、其の費用は如何になるであらう。惡事をして刑に觸れ、官に收めて之を養ふとしても、矢張國民が之を收容すると同一の譯になつて來る。而してそれ迄に種種なる害毒を社會に流させる。是は通常の貧窮から盜賊に陷るとか、或は强盜をするとか、火を放けるとか云ふだけの害に就いても左樣である。更に一歩進んで論じて見ると、遂に是が貧富の爭となつて例の社會黨になつて來る。現に政治家

が頻りに心配をするのは生存競爭の結果貧富の懸隔てある。帝國の如きは家族制度て、人を憐むと云ふ主義の强い、個々相救ふと云ふ風俗が、左樣な惡習慣を十分豫防して居ります。是は誠に喜ぶべきことてある。即ち倫敦抔とはまるて比較にならぬ。今日其の設備も尠く費用も少額なるのは、現はれた費用が乏しいので、事實慈善心が少いとか、貧富が左樣に懸隔して居るとは言へぬと斷言しますが、偖此の氣運が如何に進化して行くかといふことを考へなければならぬ。一方に一人が富んて、其の隣が貧困て大勢寄つて其の人に寄食するは、前に申す慈善心からは大變結構だが、個人的に國を進める働きから論ずると餘程の弊害てある。例へば一人の主人があつて、是に寄食する者が十人あるとすれば、五千萬の住民が僅に五百萬人になつて仕舞ふ。朝鮮は千萬人居ると云ふが、其の實百萬にも足らぬ譯になる。一人の主人が富むと、そこへ何か緣故を以て十人も二十人も寄食をして居つて、其の人は働かない。之に反して英吉利亞米利加の人々は、大抵一人て努めて生活をしなければならぬと云ふことてあるから、住民は皆生產的人別に算へられる。故に其の風習を進めて往くと、今の良習慣を打破ると云ふことになる。そこて一方が充分行はれて一方は進まぬことてあつたら、其の間に衝突は免かれぬ。其の極遂に國家に大なる危害を起さぬとも言へぬと、私は恐れるのてございます。是に於て經濟眼から見ますると、此の慈善と云ふものは、國家の富を永遠に保續するに於て最も力めなければならぬことだと申上げ得られるやうに考へるのてございます。果して然らば政治眼から見ても、決して貧民が澤山あるのは(惰民を造ることは嫌ふとしても)政治家が喜ぶ筈は無からう。又人道から論ずれば前に申しました通り、經濟眼から見ても後段に申し述べます通りとしたならば、此の濟貧恤窮と云ふことは實に今日の急務と考へる。又大に心を盡さなければならぬ事實と思はねばならぬと、私は斷言するに憚からぬやうに思ひます。況や一般の傾きが成るべく個人的生活の發達を進めつゝある經濟事情てあるに於てをや。若しも一方だけを進めて一方を進めずに置きますと、其の間に生存競爭の結果貧富の隔絕を强め、其の貧富の隔絕を强める極點は如何に成行くと言ふならば、是は申上げんても御了解が出來るてあらうと思ひます。東京市に於ける濟貧恤窮の維新以來の現況は前段に申上げました通りてある。又之に對する未來の希望は後

段に申述べましたので、大抵の愚見は御了承下し置かれたゞらうと思ひます。是て此の講演を終ります。（明治四十二年六月二十六日東京市第七回講演會に於て）

九六　東京瓦斯會社回顧談

瓦斯事業の起原

御許しを得ましてございますから、此處て一言の御別れの言葉を申上げて置きたう思ひます。唯今專務取締役から、私の身上に付いて諸君に御諮り下さいましたことを拜承致しまして、其の御言葉中に永年勤勞を致して過分てあると云ふ御賞詞を含んて居りましたことは、身に取つて此の上も無い光榮てございます。明治十八年に會社の成立ちました其の以前も、隨分年久しく此の瓦斯事業には關係致して居りましたのてございます。瓦斯の根元を調べますると、明治四年に故人になられた由利（公正）さんが、歐羅巴より機械を買うて持つて參つたのが、日本に瓦斯事業を起すの原因に相成つたのてございます。其の時分には、決して東京市中に瓦斯が斯くの如く盛んになり得るものと豫期した譯てはなかつたやうてあります。或は吉原に持つて參つて瓦斯を點けたいと云ふ希望てあつた、と申すことも傳聞致して居る位てあつたのてあります。七年に至つて横濱に瓦斯事業を起すと云ふに付いて、瓦斯機械が東京にも持つて來てあるから、共に東京の經營を始めて宜からうと云うて、其の時分東京府にあつた共有金に依つて瓦斯事業が經營されたのてございます。越えて一年、多分明治八年から私は瓦斯事業に關係を致しました。九年には大に資本を出して、其の時の有樣ては迚も營業には相成りませぬけれども、それ迄に百萬圓資金が出て居つた上に、更に十數萬圓資金を支出して、些か引用家を造り點火を始めることに相成つた。併しながら其の時分には迚も營業として經營することはむづかしかつたのてございます。即ち九年から瓦斯局長と云ふことを東京府廳から囑託されまして、東京府廳の吏員數人と相談して、全體を私が管理して此の事業を經營し來つたのてございます。

事業の一頓挫

其の中電燈と云ふものが段々世の中に盛んになつて參つて、十五年と覺えて居ります、一時は電燈の爲に瓦斯は廢滅になりはせまいかと云ふ、學者又は世間の評判てあつたのてあります。當時此の瓦斯局を、殆ど如何にしたが宜からうと云ふ、東京府の今て言へば市參事會の如き職分を有つて居る人々が、頻りに思慮を惱ま

したことであつたのであります。併し私共が其の時分、技術家なり種々なる方面から聞込みまするとと、電燈會社が如何に盛んになつても、瓦斯事業が其の爲に廢滅することはなからうと云ふ稍確信がございました爲に、自分等は此の瓦斯事業をば矢張引續いて經營し行けるものと思つて、十五年に瓦斯局と云ふものを廢止してしまふと云ふことを論ずる席に參り、人々と討論して瓦斯事業を維持致しましたこともございます。

瓦斯業の民營と擴張計畫

それからして丁度十八年頃になつて、追々に點燈家が殖えて參つて、兎に角瓦斯に利益を生ずることになつた。それ迄の間は始終少々づゝは費用損て經營して居つたのでございますけれども、十八年に幾らか利益を生じましたに付いて、始めて自分等はどうしても斯かる事業は民設に致した方が宜からう。然る上からには東京市の支出金に損の無いやうな方法にして民業に移したいと云ふ意見を起しまして、東京市に其の事を諮ると云ふと、會社を組織するならば相當の價値で拂下げるやうに致したいと云ふことであつた。それから其の時分に府内に左樣な事柄の御相談をなし得らるゝと思つた御方に、多分四五十人の人々に案内をしまして、新設會社を起さうと云うて組立てました。それが丁度十八年でございます。

爾來歳月を重ねること二十四年(明治四十二年迄)御報告の回數が四十八回に相成ると云ふ譯でございますが、自分等は其の時分に、東京市に瓦斯事業を會社として置かれましても、決して斯くの如く千萬圓以上の資本になるなどと云ふことは眞に豫期しませなんだ。極めて先見の明が無かつたのであつた。まだ三十年頃までは、或は百萬幾らか二百萬圓位の資本で、ぼつ〳〵進めて經營はし來りましたけれども、此の樣な大事業になるものとは殆ど豫想も致さぬ位であつたのであります。併し丁度現に今重役に御出でなさる大橋(新太郎)君などは、三十一年と覺えて居ります、瓦斯事業の大に市内へ擴張し得らるべきことを豫想されまして、從來關係して居ります爲に私に特に御相談があつて、此の瓦斯事業には大に注目して充分なる擴張を圖ると云ふことの御意見を伺つたことがございます。自分等は勿論、それ迄に少々進歩して來ましたから、未來進歩の力はあると思つたが、左樣にまで擴張しようとは考へなかつたのでございます。俄に同君などの御說に依つて自分等の從來の迷霧を開いて、東京市に向つて充分なる誘導をなし充分なる設

備をしたならば、――其の時分は二百萬位の資本でありましたらうか、悉く覺えて居りませぬが、――まだ數倍に擴張し得られるだらうと豫期致して、爾來は別して擴張を務めましてございます。更に進んで丁度三十五年でございました。是程に需用が進んで來たから、外國人を加へて大に擴張するが宜からうと云ふ案迄自分等は起した事がございます。それ等の事に付いては御列席の株主諸君の中で、外國人を加へることは不同意であると云ふ御說を以て、私の旅行中に昔通り日本人でやりたいと云ふ御意見を御述べになつた御方もあつた樣でございます。同時に外國の方の話も最初想像した樣には進みませぬ。遂に外國人を入れることはせずに、日本人だけで追々に擴張して參られたのは、今日から考へると大に利益になつた話で、吾々は全く同胞人の力で二千萬圓に近い大會社にされたことは、所謂始あり終ありと申して宜からうかと考へるのであります。尤も斯かる事業に於ては、外國人の如き杖になり力になる向を入れて、我が事業の進みをなすと云ふことは、必ず間違つた思案とも申さぬのでございますが、是は既往の話であつて、其の頃にも猶且つ是程に擴張し得られると想像もしなかつたのでございます。

丁度其の翌年であつたが、現在の專務高松(豐吉)君が、從來最初瓦斯局の時分に佛蘭西人の技師を傭つた。――其の技師はベレゲン。どうも佛蘭西人ばかりでは技術上甚だ不安心だと云ふので、明治十年頃から高松君には瓦斯の事を御依頼を申して置きまして、――高松君の會社に入られたのは三十六年からでございますが、併し高松君の應用化學に熟練、又瓦斯に充分なる趣味を有つて御力添を下すつた事は、殆ど三十年以上である。而して高松君が遂に官を御辭し下さつて、此の會社に御入りになる事に相成りまして、事務上には大橋君が居り、又技術上に高松君の如き御方が御入り下さつて、大に進歩を圖つて參り、近頃又久米良作君も御入りを戴いて、是は事務上に付いて大に高松君を御助力下すつて居りますのでございます。而して社運は今御報告になりました通り、誠に穩健に毎期順を追つて二割二分若くは二割三分づゝの擴張をなしつゝ居ります。二割と云ふと唯二でございますが、千の二割は二百である。ずつと何時迄も二割で進んで行くと云ふことは私共異數と思ふ位で、幾年是で行けるかとまで疑ふ程でありますが、併し能く考へて見ますると、四十萬の戸數がございます東京市でありますから、まだ七萬そこそ

こてあれ、過半は瓦斯を引用するとしたならば、此の向ふ二割の繼續がまだ五年も七年も續けて行けると云ふことは豫想し得られるであらう。果して然らば、此の瓦斯事業は千七百萬圓がもう最上關の山、是より大きくなることは出來ぬと思ふのは間違て、日本の富は段々進んて行くものとするならば、同時に瓦斯事業も、亦其の首府たる東京市に供給するために、益〻進み得るだけの資格を有つて居ると云つて宜いてございませう。

重役辭任の事情

斯樣に段々增進して行き又都合宜く擴張されて行く場合てございまするけれども、自身が當年御免を蒙りたいと申した譯は、――もう何時別に會社に對して、又同僚の方々に對して意味がある譯てはございませぬ。前に申しました通り、明治七八年から實業に關係して居りまして、本務は銀行者てございますけれども、其の時分の意見が唯單に銀行ばかりては世の中の進みが物足らぬやうな感じがして、元來からさう云ふ色々な事に口を出すのが好きてあるのと、世の中の進みとが相待つて、あれのこれのと種々な事に關係し來りましたが、何時までも老衰するまてさう云ふ有樣て繼續するのは、どうも行末も甚だ面白からぬと考へましたから、丁度當年は七十歳にも相成りまするので、所謂古稀を界にさう云ふ種々なる關係を絶ちまして、まだ經濟界にまるで身體の置けない程てもなからうと思ひますので、最初實業家になりました時入つた所の銀行だけは止めて、他の事は總て御免を蒙らうと云ふ覺悟を定めて、――折角左樣に明治七年から關係し來りました、殊の外進歩をなして而も今日も穩健にずん〳〵と擴張して行く會社を御免蒙りたいと云ふのは、御名殘惜しい樣な感じも致しますけれども、併し前に申した樣な事情から總て御免を蒙る上には、惜しいと云うて止めることは甚だ理窟の分らぬ事と思ひますので、遂に先月六日に專務の御方に其の事の意思を申上げました次第てございます。爾來重役會議も御開き下さつて種々御相談の上、もう少し任せろと云ふ御親切な御引留もありましたが、前申しました事情て、決して不足に思つたの、何か面白からぬ事態が生じたと云ふのてございませぬ。年の行つたのと色々な事情て老後を安く送りたい。此の會社を御免を蒙るばかりてないのてありますから、御諒察を蒙りたいと云ふことを懇々御斷り申しまして御承諾を蒙つた次第てございます。

回顧すれば三十五六年

左様な譯で今日茲に諸君と御別れになりますが、私は矢張引續いて株主でございますから是から先皆さんと共に出て、或は此の會議に與つて賛成を表し同情を添へると云ふことは出來得るでもございませうけれども、併し役員として當會社の株主に御目に掛るのは今日が最終になります。

回顧しますると、會社として二十四年、其の前が十數年。三十五六年斯業に關係し來りましたが、それ程瓦斯會社が進んだから澁澤の身體も進んだかと云ふと、矢張何時もの通り吳下の阿蒙で、瓦斯會社に對して頗る面目が無いのでありますが、併し矢張長い間の經驗上私の存じて居ることもあるかも知れませぬから、若しも瓦斯會社に『いざ鎌倉』と云ふことがございましたならば、其の時は罷出て御助をすることは、願ひは致しませぬが決して辭しませぬのでございます。古人の言葉に『智惠のある者が事を始めて能ある者が其の事を能くする。決して世の中の事物の進みは唯一人で出來るものでない』と云ふことがあります。私は智惠のある者ではございませぬ。由利さんと云ふ智惠者が瓦斯事業を日本に起すと云ふことを企てたのであります。それが誠に偶然な話で、歐羅巴に行つて瓦斯の點いて居るのを見て、日本に瓦斯を點けたいと云うて、漠然四萬圓ばかりの金を出して瓦斯機械を買つて來たのが、遂に千七百萬圓の此の大事業を爲し得られるやうになつた。即ち智者が始めて能者が能くする。充分諸君の御見立て下すつた重役諸君が尚ほ益々此の會社を隆盛にならしむると思ふのでございます。茲に私は御暇乞の爲に一言を申述べて、諸君に尚ほ此の會社を益々御愛顧あらんことを希望致します。（明治四十二年七月東京瓦斯株式會社總會席上に於ける重役辭任の告別演說なり）

九七　渡米告別の辭

（一）銀行倶樂部に於て

會長及び會員諸君。今度私が亞米利加へ旅行を致すに付きまして、當集會所、手形交換所、銀行倶樂部、興信所の諸團體が御申合せ下さいまして御送別の宴を開かれましたのは、感謝の至りに堪へませぬのでございます。

只今皆様を御代表で、豐川（良平）君から至つて御親切な、深く私を御察し下された御送別の言葉を下されましてございます。如何にももう七十の老年でございま

して、殊に不幸にして英語は解しませぬし、斯かる身で自ら揣らず今般の旅行に假令强ひて勸められるとも應ずるは、頗る突飛な事柄と自身も今尙ほ躊躇して居るのでございます。殊に從來は本業は銀行でございますけれども、併せて各種の事業にも關係して居りました。追々身體も弱つて參りまするし、何時までもさう限無い各種の雜務に關係致すでもなからうと心附きまして、當年總ての事務を御斷りして、唯最初經營しました銀行だけの一途に止めて、どうぞ過少からんことを孜孜として心懸けて居ります際でございますから、斯樣な旅行などは殆ど爲し能はぬと思ひました。て種々なる方面からの御勸めまたは要求も受けましたけれども、意を決し能はなかつたのであります。さりながら、昨年米國の實業家を日本へ御招きしたといふことも、或は一時の出來心と云ふやうなこともあつたかも知れませんけれども、此の太平洋を隔てゝ東西にある兩國の間は、行末益〻關係は深くなるであらう。關係が深くなると同時に、或る點からは交情の阻隔を惹起さぬとも限らぬ。故に事を好む者は種々揣摩臆測を爲しつゝある今日でございますから、五十年の昔コンモドル、ペリーが我が長夜の眠を覺して吳れたとか、閉してある桃源の戸を解いて吳れたとかいふことに付いては、我が國民が押なべて同國の厚情を喜んでありますけれども、唯それだけを以て何時までも兩國の交情を持續することは出來ぬ。此の間に倍〻交情を溫めて行く必要は必ずあるでございませう。畢竟昨年米國商業會議所の人々を日本に御招きしたといふことも、聊か其の意を含みましたことであります。又參られた其の結果頗る好都合で、先方も大に滿足をされて、再び彼の地の企となつて、今度は日本の同位置に在る人を、是非彼の地に招かうと云ふ場合に至つたといふことでございますれば、何れど、の筋からか相當な顏觸の御人々が罷越して、――大なる働を爲し得られんでも、向ふの厚い情に報ゆるだけの事は是非しなければならぬと、自身等は深く感じましたのでございます。素より私などは事情にも通ぜず言葉も解らず、果して其の位置に立ち得るとは思ひませんけれども、段々樣子を拜見しまするとと、奮つて行くといふ御方の方が寧ろ少く、彼も行かず是も厭だといふやうな事態に見えまする爲に、遂に先月でございましたか、平生御親みを厚うして居る數十の御方の御會合の席で、誰ぞ年寄株を見出すやうにしたいと色々御相談のあつた結果、結局千家、高橋、中野の三名が

其の會合の總代として、是非澁澤に此の勞を取ることにして貰ひたい。一同の希望はさう決したから、どうぞ厭と言はんで呉れといふことの御談じを蒙りまして、其の以前から私は外務大臣大藏大臣あたりからちよつと御誘ひ言葉を頂戴しましたけれども、前に申す理由から實は御免を蒙る考で居りましたけれども、今申上げました如くに極く親しい方々の御請求を受けて見ますと、實は反對にさういふ方々こそ適當な御顏觸であるのに、私だけを御責めなさるのは御無理のやうであると、斯う考へましたけれども、最早其の席に於て相讓るといふことは既に晩しと考へましたから、さう云ふ譯なれば、不肖ながら身體の續く限り必ず御引受を致しませう。追々年も取りましたし、餘り健康でもございませぬから、若し病氣の爲に果すことが出來なかつたら、是は平に御宥を願ひまするとと、御請をしました次第でございます。

猿芝居と年期

其の以後段々向ふの招待の模樣を聽きまするとと、思うたより此の旅行は困難と存じまする。概略道順を申しまするとと、先づ十九日出立として九月二日にシアトルへ著して、シアトルの近邊からポートランド、タコマ、スポーケン等を經て、それから段々西部へ行つて、紐育、費府、華盛頓より中央部を又西へ戻つて參りまして、最初の申込であると十一月三十日まで旅行の筈でありましたが再應掛合つた結果、少し日を繰上げて十一月二十三日に桑港へ歸ることになつて居ります。それで廻ります場所が四十六箇所程ございまして、其の日數が七十幾日、多くは汽車生活をやれといふやうに見えますのです。先づ遊山といふことでございますと、一汽車遲れても此方の都合でといふ所に樂がある。昔風の旅でありますと馬に任せて行くといふ筆法で、一向時を定めぬのが旅行の一番愉快なり便利とするところである。然るに今度の旅行は最初からちやんと割付けられて、さうして其の日の休息は汽車の中でする。勿論汽車の設備も日本より好いのでありませう。或は特別の車を出して呉れるかも知れんけれども、併し如何に我々が自ら奉ずるの卑きにして見た所が、汽車の中で七十日旅をしてさうして各地を廻らなければならぬ。其の上に出まする場所は總て言葉の通ぜぬ情意の通はぬ人に、唯々無暗に手を振つて、此方の產物は斯うだ、此の機械は斯うなつて居るから見い。へい、畏りましたと云うて、先づ順送りに廻つて歩きますのですから、卑い言葉で申すと、何だか興行

師に猿芝居が買はれて宿次に打つて歩いて、十一月の三十日にならなければ、年期が明かぬといふ位置に立つたと言はんならぬやうな有様でございます。幾らか此の行程を變更しようといふことを考へて、數回外務省に打合せをして電報を掛けましたけれども、なか〳〵シアトルが振出し元で、――此の企をしました亞米利加の委員長は、先頃參りましたブレーン氏とドールマン氏、此の二人ばかりてあるか、或は其の他の人も加つて居るか知らぬが、なかなか吾々の請求を容れない。どうも各地とも相當の引合をして、段々評議の末斯く定つたのだから動かすことは出來ない。何でも斯んでも此方の希望に應じて呉れ。其の代り休日は息ませるからさう思へ。以て此の旅行は樂でないといふことの御察しを願ひたい。

十二月が除除

左様に苦しんで七十餘日を經過しましても、實は前申す如く事情を知らぬ言葉の通ぜぬ私、決して自分としては大なる効能を其の間に顯はすことは出來ないと考へます。併し吾々の一行は總計て四十六人ばかりてございます――但し從者も加へて。其の中には實業家も大分てございます。是は決して私如き者てないので、私は左様に効能が無いからと云うて、此の一行が効能が無いと云ふことは決して申されませぬ。此の一行を押纏めて行つたならば、或は日本を代表し得るだけの力があると申上げられるかも知れぬ。どうか私の無能を以て、一行が至つて卑い効能が無いものだといふ御解釋はないやうに致したい。但し銀行として皆様が私を斯様に後押をして下さるのは長い間の御同業の關係に因ることて、實に御好意忝い。私は此の諸君の後押に依つて我が行を壯にすることが出來、彼地に參つて――今日日本の銀行は假令中途より豹變してより善くなつたと申しましても、――又自分も善くなつたと思ひますけれども、其の源を質せば亞米利加が根本てございます。明治五年八月何日てございましたか、亞米利加の制度に依つて銀行條例が發布されたのてございます。其の先祖とも申すべき國の銀行狀態を觀察して參りますのは多少趣味があらうと思ふ。況や斯の如く多數の御方が充分行つて調べて來い。手形の交換はどう云ふ有様か、興信所の仕組はどうなつて居るかといふやうな廉々を、相當な地方に付いて充分觀察して參れといふことは、假令其の御言葉がございませんても、出來るだけは調べて參る考てございます。私自身は効能が無いのは前述の通りてございますが、他の方面に於ては幸に實地

に精しい、教育にも、農業にも、或は工業にも、相當な顔觸の人が皆此の一行に加りますから、詰る所どうぞ此の團體に依つて兩國の交情を益〻溫め得る樣に、――又一方には追々情意の通ずるに依つて、事情の近くなる程或る場合には又利害の衝突を來さぬとも申されぬので、例へば支那に對する日本の希望と亞米利加の望とは、必ず同じ道行を爲すとしますれば、是等の事に付いても深く考へて、成るべく其の間の衝突を避けるといふ事は心懸けねばならぬと思ひます。是等の點に付いては心を用ひて、彼等の希望はどの邊てある。之に對する吾々はどう覺悟して宜からうといふ事は、解せぬながらも一部の觀察が出來ますれば、必ず歸朝の上諸君に申上げる事は怠りませぬ所存でございます。詰り今度の旅行は前に申しまする通り、私一身としては、殆どもう之が老後の奉公仕舞位に思ふので、私は此の間から始終申して居るのは、――丁度私は天保時代の生れてますから、規則立つた教育も受けず、兵役などといふ事も、百姓ですから時々領主の夫役に使はれたと云ふ事はありますけれども、一向國に對する義務抔として、勤めたことは無かつたので、今度七十になつて初めて徵兵に取られた。年限は三箇月、志願徵兵だから歳月は甚だ短い。

十二月になると隊を出して戻して呉れる。斯う云ふ譯で彼方に參る積りであります。一言御挨拶を申上げます。（明治四十四年八月四日、東京銀行倶樂部の催に係る送別會の席上に於ける告別の辭なり）

（二）日本橋倶樂部に於て

渡米の覺悟

會長、會員諸君。今夕は私共の今般亞米利加に渡航致しますことを御祝し下さいまして、諸君の御申合に依つて斯く盛大な送別會を御開き下さいましたのは、渡航致しまする者共の誠に感謝に堪へぬ次第でございます。御催しの會員諸君を御代表下さつて、唯今大倉喜八郎君から御丁寧な御送別の辭を下さいましてございます。殊に私の身に付いて一言御添へ下さつたことは頗る溢美とも申すべきことで、敢て當り兼ねると恐懼致すのでございます。

今般の我々の米國へ罷出まするのは、もう喋々申上げるまでも無く諸君の御熟知の通りで、昨年彼の太平洋沿岸の商業會議所の人々を御招きしました結果として、更に日本からして商工業を代表する人々に渡航されたいと云ふ招待に依つて、茲に渡米實業團が成立致した次第でございます。彼の國の我々を迎へます希望

は、蓋し兩國の懇親を厚うすると云ふことは申すまでもなく、更に進んで此の太平洋の水をして、もつと其の幅を狹くせしめようと云ふ程の考を持つて居るやうに承知致しますのであります。御存じの如く、亞米利加の國の農に工に非常の力を以て進歩するのは、屢〻御互に承ることである。此の力は多く東洋に發展しようと考へて居るのでございまして、又我が帝國も維新以後長足の進歩を致したと自らも思ひ人も言はれますから、同じく東洋に事業を進めたいと考へますれば、自ら此の國の間に其の情意を通じ其の氣脈を行屆くやうに致すと云ふことは、我々に於て必要とすると同様、彼に於ても亦必要視するのであらうと思ふのでございます。斯かる事態から我々罷越すと致して見ますると、なか〳〵に此の任務は決して我我共の微力無慧の果して良い効果を收め得られるや否やは頗る疑はしう考へます。しかし今度指定まつた所の渡米實業團の諸君の中には、決して私自身の魯鈍を以て唯御遠慮申すばかりでございませぬ。相當な學問經歷に富んだ御方もございまするで、縱し私共の無慧と雖も、一同誠心誠意加ふるに一致の愛國心を以て此の使命の十分の一たりとも遂げおほせたいと、祈念致して居りますのでございます。

後押しの力

今夕御招きを下さいました諸君は、總て實業上の而も實地に事を御執りなさる方々の御寄合である。而して私に於ては最も日頃御親しく、常に色々說を闘はし來つた諸君である。其の經營されたる所は種々な方面に亙つてござる。前に申す通り、日米の關係は即ち實業にありとすれば、其の實業の根本は此の一堂の中にありと申しても宜いやうに思はれます。斯樣な一種の實力の集つて居る所から、我々の一行を壯んにする爲に斯の如き御催を頂戴して、即ち此の諸君の後押しの力に依つたならば、假令前に申す通り自分の身の魯鈍をも尙ほ練磨せしめて、或は希望の萬一を達し得られるかと、只管斯かる御催を感謝致すのでございます。

昔と今との好對照

段々此の海外旅行も、事物の進化と共に模樣が變つて參ります。只今大倉君が其の昔亞米利加との通商の始りは丁度咸臨丸に依つて云々と、四十九年以前の事を御申述べになりましたが、丁度其の時行かれた御人々は皆政治家の人々である。即ち新見豐前守、村垣淡路守、小栗上野も行つたと覺えて居ります。ペルリが參つて、其の後に亞米加利から參られた、前に領事で後に公使になつたハルリス、下田に

横濱に、我が日本に外交條約を締結せしめたのは此のハルリスの力であります。其の條約が安政五午年に成立つて、其の後に村垣淡路守新見豐前守が渡航されたと考へます。其の時分には吾々はなんぼ年寄でも、御送別申すと云ふ程の年輩でなかつた。併し主人公はどうか知らない。それからして維新前後から引續いて自ら行つたに付いて送別を受け、又人樣を送つたと云ふことは隨分なか〳〵十の指どころでございませぬ。――指を折つて數へれば數へ盡せぬ程數が多うございますが、回一回と其の模樣が變つて來る。甚だこれは面白い。殊に今夕の送別會を拜見致しますると、丁度其の新見豐前守村垣淡路守の時と合鏡に相成つて、頗る私は愉快に感ずる。其の時分の一行もなか〳〵人數が多かつた。鎗を持つたり挾箱を持つて出掛けた。我々も著物を著て行きますが、まさか挾箱は持ちませぬ。所がそれは多く政治であつた。向ふの招きも政治にあつた。今日は勿論、我々の任務中に決して政治をまるで離れる譯のものではございますまいけれども主とする所は全く實業に在る。御送り下さる御方の觀念も全く實業である。行かうと云ふ者もそれより外無いのでございます。五十年以前の旅行とは全く其の方面を異にする。試みに其の證據を言はうならば、此の御集りの中に、辭令を貰つて勤めをなさる御人々は一人も無いと私は想像をする。此の送別會が斯の如く官たらずして全く民業だけの御方の集りて、而して其の行く者の勤めはどうかと云ふと勿論民業に依る。然らば國家の關係はどうかと云ふと、國家の關係は我々無慧と雖も小なるものでなからうと思へば、昔の村垣淡路守新見豐前守の行くのは、口を開けば唯政治と云ふものであつたが、今日は此の實業即ち國家の基本である、一國の元素であると云ふ事が言ひ得られる樣に相成つた。此に至つて送られる者も送つて下さる御方も、大に自ら慰め又自ら重んぜなければならぬ事と考へる。今夕御催を下さつた御人の各位諸君も、蓋し思召は此處にあらうと厚く感謝を致して、私は前に申上げまする通り、政治の關係、國家に對しては我々の微力充分の報告を爲し得られんでも、諸君の御經營なさる實業に對しては、――尙ほ區別すると誰方はどう云ふ事業を勤めてござる、誰方はどう云ふ事業に御苦心なすつてござると云ふ事は能く記憶して居りますから、彼の國に參つて見る度接する度に其の事を考出して、假令充分には行きませんでも、同國の有樣は斯樣である。我々のも

う一層の奮起を要する。我々は此の點に心を用ひなければならぬと云ふ位は、書いて土產として申上げる事が出來ようと祈念致すのでございます。之を以て今夕の厚い御好意に對して謝辭と仕ります。因つて私は盃を擧げまして此の會の萬歲を祝します。（明治四十二年八月十四日、日本橋倶樂部に開かれたる男爵と最も緣故深き紳士諸氏が、男爵及び令夫人を主賓としての送別會席上に於て）

本會に謝せざる可らず

九八　米國視察談

（一）日米貿易の關係

今日は當日本貿易協會より、亞米利加旅行者一同を招待せられたるを、一同と共に厚く御禮を申上げます。今回太平洋沿岸各商業會議所の招待に依り、東西一萬哩餘の旅程、五十餘箇所の都市を經て來ましたから、旅としては誠に大なる旅で、これが爲に受けたる饗筵なり見聞なりに至りては少くありませぬ。其の感想は余の淺き記憶のみを以てしても、尙ほ數日を費しても語り盡すことが出來ませぬ。これ畢竟米國の日本に對する厚情に依ることゝ存じます。中に最も其の力の多かりしは事業上の關係です。實業家として打揃つて參つたのですから、事業を根本として居ますが、貿易に就いては本會が中心となつて發展の策を講じて居らるるから、先づ第一に本會に厚く御禮を申上げます。今回一行が受けたる厚遇は、本會の諸君が平素熱誠に貿易事務に御奮勵せらるゝ反照です。殊に其の始めシアトルなり歸途桑港まで、鐵道の列車を同一のものを以て遇せられし如きは、――少しく自尊の樣なれども再び爲し得難き旅行なりと信じて居ます。日本と米國とは一葦帶水の國で、向後交際益〻頻繁を加ふるに至るは必然である。故に私等のみならず、こゝに集まり居らるゝ御一同の責任は日一日重きを加ふるに至ります。

貿易に對する米人の批難と余の辯駁

私等一行が到處米國人より耳にしたる所は、日本商人は一體に自分勝手で、自國の品物を賣ることのみに汲々として米國人の商品を少しも買つて呉れぬと云ふ小言でありましたが、私は其の都度說明を與へて惑を解くに勉め、殊に紐育にては澁澤榮一一個人の資格を以て、同市及び其の附近の名士を一堂に招き、米國人に向つて斯ういふ事を申しました。諸君私の申したことが善いか御參考迄に茲に申述べて見ませう。――米國人は動もすれば日本貿易に對する不平を唱へ、日本人との取引は不利益だ。日本人は賣ることのみ勉め買ふことに骨を折らないと申さ

れまするが、千九百八年に於ける日本の輸出入總額は九億圓にして、內米國との貿易額は二億一千萬圓であります。此の內日本より米國へ輸出するものは一億三千萬圓、米國より日本に輸入する高は八千萬圓にして、兩者の間に五千萬圓の差はある。併し日本の輸出品は多く半成品にして、之に加工し精製して賣る米國の利益は莫大なるものである。此の意味に於て日本は、米國に物品を買つて貰ふと云ふよりは、寧ろ賣つて上げて居ると云ふも過言にあらざるやうです。之に反して米國より日本への輸入品にあつては、日本は米國の外に英國獨逸其の他の諸國の非常に奮勵せる買主なるに拘らず、比較的賣込に冷淡なる米國の製品を、猶且つ八千萬圓購求するの一事を以て、日本が米國に對する好意を知る事が出來ませうと述べたることがありました。當協會へ罷出て、諸君の前で斯樣な事を申上ぐるは、所謂御釋迦樣揃ひの眞中で說法するやうなもので、恐入りますが、私の說明は極めて平凡なるも、多少は先方に了解を與へた所あると確信します。これ唯一片の議論に止まりまするが、願くは諸君に於て此の上とも飽く迄誠實にして、顧客を大切に御心掛けなされまして、貿易事業に努力せられんことを切に望みます。御鄭重なる御饗應に預り、喜の餘り失禮いたしました。終に臨んで諸君の御健康を祝します。（明治四十二年十二月十九日、日本貿易協會の開催せる歸朝歡迎會席上に於て）

（二）銀行の天職

會長、正副總裁、會員諸君。私は實は此の交換所の委員を當年は御免を蒙り得るだらうと思うたのです。東京市の名譽職などは六十以上て滿期特免を受けて居る。然るに此の集會所又は手形交換所などは、七十以上になつても未だ特典を與へて下さらぬと云ふのは、或は私の身體に信用が強いのか、然らざれば諸君が殘酷なのか、何れどつちかであらうと思ひますが、既に御請をした以上は最早愚痴を申上げる必要はございませぬ。茲に手形交換所の委員として、例の通り豐川（良平）君を委員長に推しましてございまする。未だ豐川君から御披露はございませぬが、明治四十三年の手形交換所の委員長は、相變らず豐川良平君であることを諸君御承認を願ひたうございます。

亞米利加見物

只今段々交換所の進步、又それに對する經濟界の狀態を、既往に將來に、日本銀行

總裁が御觀察下された御演說は、實に至れり盡せりで、此の御話に尙ほ添ふべき言葉は私にはございませぬが、唯昨年亞米利加に旅行をしまして、其の見聞中頗る愉快に感じたことは、歸著早々各團體から御招きを蒙つた時に、これだけは自慢らしうはございますけれども、日本の銀行者として亞米利加人に重く見られたといふだけは、御互に喜ばねばならぬと思ふといふことを申上げました。多分諸君御聽取があつたらうと思ひます。併し今度の旅行は頗る忙しかつた爲に、さなきだに銀行業を永年經營して居つても實務に暗い私が、其の事務を研究調査するといふことは出來得ませなかつたが、唯僅に紐育に於て交換所を一覽した。又市俄古に於て一日四五の銀行者と談話した。スポーケン、クリーヴランド、ボストン等に於て各種の銀行を訪問しました位で、甚だ本務を怠りましたけれども、紐育の交換所の有樣は先年も一寸見たやうに覺えて居りますが、今度も亦一覽致しました。實に非常なもので又盛大なものです。唯素通りの一覽ゆゑに、其の取扱方の細い事を充分申上げる程の調査もございませぬが、幸に日本銀行から派出になつて居る井上準之助君に依つて、規則其の他のものを頂戴して參りましたから、既に此の交換所にはあるだらうと思ひますけれども、御參考に追つて書記長に廻しまして、諸君の御手許に上げるやうに致しませう。是等は幾分調査したと申上げることに相成るのです。蓋し紐育の一箇月の交換高は、多分日本の一年分よりも多いだらうと思ひます。高橋男爵などは必ず其の數字を御記憶でありませう。さういふ有樣でございますから、其の宏大の有樣も測り知るべしである。而して數年前の恐慌の跡抔は、今日はもう完全に回復して居るといふことを、頻りに彼の地の銀行者は誇つて居りました。或は小都市に參つて交換所の樣子を聽いて見ましても、——確かクリーヴランドであつたと思ひます、——何でも其の交換高が數十億弗とか申しました。東京位の交換高があるのであります。實に其の取扱の盛大なること想ひ見るべしでございます。

ゼームス、ヒル氏の農業立國論

海外の事態に就いて事々しう御話する程のことはございませぬが、只今松尾總裁から、未來の經營に就いて吾々に御注意的の御說があつたやうでございますが、是は御同樣に深く熟慮せねばならぬ事かと思ふに就いて、一言添えて見たいと思ひますのは、昨年九月頃市俄古の銀行者の總會に、セントポールに居るゼームス、ヒ

ルと云ふ人が參つて演說をした。其の演說筆記を私は貰ひました。茲に其の趣意を記憶して詳細に申述べるだけの事の出來ぬのを遺憾と思ひますが、其の筆記の飜譯も程無く出來ますから、前に申上げました紐育の交換所の手續書と共に印刷致して諸君に差上げようと思ひますが、ヒル氏の申した言葉が、果して銀行者として全然注意せねばならぬかと云ふことに就いては、多少の議論はあらうと思ひます。ヒル氏が市俄古の銀行者に向つて論じた趣旨は、深く翫味せねばならぬと思ふ點がございます。先づ冒頭に何と言つて居るかといふと、私は銀行者ではない鐵道事業家である。此の鐵道事業の者が斯く市俄古の如き大都會の銀行者の集りに來て演說を頼まれるも餘程を、かしいが、茲に憚らず演說しようと思ふのであるといふ前提で論を起して、而して――茲に私が述べようと思ふ事は、其のを、かしいと思ふより尙ほ一層を、かしい事を言はうと思ふのだ。即ち此の亞米利加の農業に就いて大に注意せなければならぬ、大に改良せんければならぬといふことを充分に詳論しようと思ふのである。而して諸君は銀行者である。此の銀行者に向つて斯樣な間違なことを申すといふのは、平仄の合はぬ話であると思ふが、深く考へて見ると云ふと、決してさうではないと云ふことを私は茲に斷言するに憚らぬのである。蓋し銀行といふものは、信用に依つて他人の金を引受けて、さうしてその金を商賣に其の他の事業に供給するといふのが課業であるけれども、どうしても銀行の天職といふものは詰り經濟社會の中心動脈とならなければならぬと云ふことは、世間も諸君も自任して居るところであらうと思ふ。果してそれであるならば、唯己の課業だけが行立てばそれで足れりといふ觀念のみで經營されるといふことは、國家は決して銀行者に望んでは居りませぬぞ。更に一層任務も大なり、一層才學も研磨して貰ひたいと云ふことを希望して已まぬのである。そこで今亞米利加の經濟界は如何であるかと喝破して、これからヒル氏の持論に移つて、此の工業若くは鑛業のみに依頼すると云ふことは如何であらう。目前は亞米利加の繁昌を助くるけれども、將來の亞米利加が之で以て安穩には行かれぬといふ議論を喋々と論じて、結局將來の亞米利加の繁盛を永久に續けて行く政策としては、農業を盛にするより外無いてはないかと云ふ自己の持論に引付けて、斯く論じ來つたならば國の元素は矢張農業にある。銀行の眞正なる基礎は鞏固なる

三年經つたら三つになれ

國の元素の上に立てなければ、眞に隆盛といふことは言へぬてはないか。經濟界の基礎に立つといふ銀行者であるならば、此の外に議論は出ぬてあらう。斯く論ずると私の玆に演說をするのは間違の樣に思はれるけれども、諸君充分責任を以て、興味を以て聽いて下さらねばならぬといふやうな演說でありました。

蓋しこれはヒル氏の口調を私が此處へ取次ぐだけてありますが、丁度今總裁の御申聞の如く、是から先の經濟界が如何てあらう。――將來どう成行くてあらう。それまてに斯くすれば斯くなるものだといふ經驗を心に銘じて、是から先追々に回春の時期が來るてあらうと想像するならば、いつても同じ樣な事を繰返さぬだけの審案は、御互に持たねばなるまいと思ふのてございます。即ち三十九年の既往を顧みると、其の時の宜しきを制したる方法は必ず吾々に思ひ半ばに過ぎるてあらうと思ふ。それと同時に又今日唯無闇に物が怖いといふばかりも適當とは思はれぬ。三十九年に宜からうと思うた觀念を繰返さないと云ふならば、所謂三年經つたら三つになるだけの智惠を持たなければならぬと思ふ。今ヒル氏の申す如く、吾々をして經濟界の中樞なりとせられ又自らも任ずるならば、丁度今日の時期は最も御互が協力注意して、調子の進んて來た場合に餘り走り過ぎぬやうに、また餘り沈衰する場合に唯恐怖逡巡して此の機運の回復を益〻遲延せし、むるやうな行動にならぬやうに、心せねばならぬかと思ふのてあります。私はヒル氏の市俄古の銀行者に言うたことを直ぐ自らも學び諸君にも學ぶことを望むといふ意味てはございませぬが、其の論旨中の銀行は唯人の金を扱つて金融をすれば本分足るといふものてないと云ふ趣意に至つては、今總裁の御述べになつたことも、ヒル氏の論旨と同一と申して宜からうと思ふ。又御互自ら奉ずる所に大小こそあれ、左樣考へねばならぬと考へるのてございます。どうぞ此の機運の回復する時期に於て、既往を顧み將來を察して、其の宜しきを制したいと思ふのてございます。亞米利加旅行に就いて何等新聞を皆樣に御話することは出來ませんけれども、一二持つて參つたものがございますから、飜譯が出來ましたから差上げるやうに致します。末段に申したことは決して亞米利加から學んて來たといふことてはございませぬ。唯玆に會長總裁の御回答に就いて、私が諸君と共に自ら鑑みたいと思ふことを一言申したに過ぎませぬ。（明治四十三年一月十九日、銀行倶樂部に於て）

(三) 渡米所感

只今校長さんから御叮嚀な御紹介に預りました。私が渡米中に於ける所感を述ぶるに、先づ一言申上げたき事は此の校の學生といふ事であります。四十三年の一月に御目に懸るは御互に悦ばしい事です。併し昨年六月二十一日は誠に悲慘な有樣にて對面した事は御記憶の事ならん。今日此の場合にて憂愁を語るは不祥ではあるが、實際私は昨年の憂に引換へ今年喜を以て再會するは、何とも申されぬ程悦ばしい故、無用の言に非ずと思ふ。さて實業團の旅行は校長さんよりの御話の通り、出發前の豫想以上に歡迎せられ、十二月十七日歸國以來各方面の歡迎會に列席し、殆ど總ての事柄を語り盡し、今日は別段珍らしき話とて無し。唯重複を恐るゝのみ。されど因緣深き諸君と私の間柄なれば、特に御話せん覺悟なりき。且つ校長さんよりも申出がありましたので、更に勇んで參上したる次第なり。之から旅行の概況及び所感の中種々なる事柄を切上げ、多忙なりし事、苦痛なりし事、愉快なりし事、名譽なりし事、利益なりしと思ひし事につき御話致しませう。悲しい哉私は英語を解せず、米國の地理に精通せず、爲に發音其の他不明瞭の箇所無き能はず。此の點は偏に御用捨を願ひます。

團體の旅行は八月十九日に横濱を解纜し、八月三十一日シアトル著、九月一日同市を訪ひ、終りは十一月三十日、此の間汽車にて西より東、東より西に走り行程一萬八百餘哩なり。都市五十三、滯在日數最も長きは紐育にて十日、シアトル五日、市俄古四日、三日は大都市數個、一日の所もあり、或は滯在せず、到著早々見物し直に其の晩汽車に投じて他所へ向け出發する事もありき。

多忙なりし事

五十三個の都市を訪問するに、最初詳細なる時間割を與へられた。元來旅行は豫め決定(日數、時間等)する事の好都合もあれど、長期の旅行に至りては却て繁雜を來し困却する事無きに非ず。今回の如きは殆ど夜中旅行し、晝間或る都市に著くや否や歡迎會に招待され、少くとも二三の演說あり、多き時は五つにも及ぶといふ有樣で、休息の時間は毛頭無い。見る眼は喜ばしけれども、走り廻る身體は非常に疲れる。又夜になれば直ぐ出懸けて、歸る時は一時になる事あり。それでも送つて來た人には御禮に酒でも出して談話する。床に入るのは隨分遲くなる。て眼

覺むれば又直ぐ仕度して出發する。これが九十日間毎日の事だから、實に眼の廻る程多忙てある。但しプログラムを作つて何處々々へは何といふ風に定められし時は、餘程骨の折れ樣が少い。兎に角右の樣で見物もし用向も足し交際上の談話もせねばならぬので、男ばかりではなく、婦人迄も此の忙しい中に處して、能く自ら應對を仕遂げたのてある。多忙てふ文字は決して形容に用ひたのてはない。そして汽車はシアトルから一直線に東岸に通ずる樣先方の厚意でしいらへたので、丁度活きて動く家と思つて差支無い。之に乘るのは初の程は牢屋に入る心地せしが、九十日後には遂に馴れて來て、繁忙なるホテルに泊るより遙に氣持よく感じました。人生萬事斯の如きもので、最初は苦しき事も忍耐して行へば終には却て好む樣になるのてある。諸君の學業に於けるも亦同樣てある。

苦しかりし事

シアトル市の歡迎會に臨みし時は、あまり暑くて卒倒するかと思つた。列席の人々に挨拶するのに順に整列して待つてをるから、當方は一端から順次に手を握り合うて姓名を言ひかはす。此の時レセプションといふ。レセプションの意義は手を握ることなるや、將姓名を云ひかはすことなるやは諸君の斷案に任す。そして私は團長といふので、常に一番先に手を握らせられた。暑くて堪へられぬ上に、また大多數の人と手を握り合ふ苦しさは言葉に盡されない程てあつた。市俄古著第一日は『日本デー』といふ日てあつた(特に名づけたものならん)。此の時も歡迎會て大分多數の人が集り、四名の演說を拜聽しました。引續いて政府の建物の中て會合があつたが、新造の故かペンキの惡臭は鼻を突く。風通は惡く、それは〳〵實に苦しい樣思をした。婦人などは懸命に扇子を動かすけれども、中々婦人の力ては涼しくならぬ。婦人の困憊さ加減は男子よりも著しい。

此處が終ると直ぐ又大會堂でレセプションがある。人數は凡そ五百人位あつたが、これが又例の通り一人々々手を握らねばならない。婦人のやうな柔い手て握つて呉れるなら未しもだが、さういふ人は誠に少い。丸太のやうな大きな堅い手てぎゆうつとやられるのだから堪らない。それに向ふの人は皆大きなもの故、自分は仰いて挨拶するといふ始末。此處ても又卒倒するかと思ひました。之が到著一日といふのだから猶ほ苦しい。

次にこれは私獨りの苦しかりし事なれど序に申上げます。全體私は英語を知

らぬ故、通譯が側に居つて新聞記者其の他の人に談話を交へしも、時として通譯の側に居らぬことあり。此の時は實に困つて仕舞つた。先方は多く頭から英語が話せますかと聞いて來る。面喰うて英語は駄目だが佛語は話せるなど答へる。幸ひ先方に佛語を話せん時は好いが、不幸話せた時には當方は材料極めて缺乏だから直ぐ窮してしまふ。斯かる事は語學に堪能なる神田男などは全く知らぬ苦痛です。今後の社會は語學の才無くしては非常なる損失を招くこと多し。諸君幸に心せよ。

愉快なりし事

初めての土地に三箇月も旅行する事故、愉快なるは素より然る可き事なれど、今度の旅行は親切丁寧極りて至らざる所なしと謂ふべき程であつた。米人は親しみ易く、吾等を見ること一見舊の如く、特に突飛の人は知己親戚に逢ひたるが如く、無邪氣に質朴に待遇し呉れた。爲に一行は心置なく打語らひ愉快窮無かりき。茲に記憶すべきは、米人は自慢の言葉を用ふること甚だ多き事なり。即ち自身の細君、土地、國家を自慢し、甚しきに至りては日本に斯樣なものありやなど、聞苦しき問を發する者さへある。されども之は彼等の性質と見るべきものにて、決して吾等を侮辱するものとすべきに非ず。彼等は頗る快活に一行を優遇し、不愉快の感を起したることは殆ど無い。宴會に於ては彼地の風習ならん、餘興てふもの多くあらず。一行の滯在中芝居の案内を受けしこと五回、餘興の催ありしこと六七回に過ぎず。此の點本邦と大に異なる所がある。更に附言せんに、彼等の長所として質問を歡迎することである。『我が心の鍵は君に渡したり』てふ態度もて萬事を語り、若し我の質問すること案外少からんには、甚だ不快の念を抱くやう見受けた。さらぬだに我は今回渡米の効果を大ならしめん爲め、社會のあらゆる方面に就き疑義を問ひ、一行の人々より『又團長は何か尋ねて居る』と笑はれた位である。

名譽なりし事

今回の一行は、實際の價値以上に價値あるものゝ如く思惟せられた。是一行の最も深く感ずると共に絶大の名譽なりしと思ふ。吾等一行自ら敢て卑下するの要を見ずと雖も、併し米國人の眼中に映ぜし程の光輝赫々たる者には非ず。米人の一行を見ること甚大に過ぎたるを思ふ。旅舍より出づる時の如き、何れの地たるを論ぜず騎馬巡査十數名あるて一行を守り、沿道には無數の男女列を成して一行を迎ふ。斯の如く衆人環視の中に自働車を驅りて過行く一行の胸中、如何ばか

り得意なりけん。或る所に於ては州知事の出でて自働車に陪乘せらるゝあり。或は全市の巡査悉く出でて一行を迎ふるなど恰も査公の敎練かと疑はる。

尙ほ一行は大統領、米國政治家、實業家の有名なる人にも面會せり。斯くして兩國間の情誼を溫むることに努めた。唯憾むらくは、當代に卓絕せる實業家カーネギー及びモルガンの二氏に會見するの機を得ざりき。されども日本の狀況、厚誼、商賣の方針等遺憾無く通ぜしを信ず。斯の如く吾等一行が絕大の榮譽を博したるは、一行が相當の資格ある者の集合なりし事は據る所無きに非ずと雖も、偏に我が帝國の威信の彼に厚く、彼が我が帝國に對する尊崇の反響が一行の頭上に及びしに依るものと思ふ。彼を思ひ此を思へば嬉しくも又痛ましき限りである。

利益なりと思ひし事

利益に關して最大なるは敎育の方面である。こは神田男に讓りて我は他の方面に亘りて所感を披瀝せん。勿論敎育と關係を有す。本旅行の基因を求むるに、四十年に於て米國太平洋沿岸人の來邦せし時、本邦の各所にて彼等に與へたる情誼の甚だ厚かりしに對し、謝意を表せんとて彼國より我が外務省に招待狀を送附し來りたるに始まる。而して一行の覺悟如何と見るに、米國に於て猶ほ未だ排日の熱消えやらず。往々にして彼我の不利を釀せることあれば、之を鎭壓せんとする直接の目的と、今後益〻日米の親善を增進し有形に通商を擴張せんとする直接間接の目的を有したのである。此の使命を帶ぶる一行は常に目的の實現に盡瘁したりと雖も、今日に於て其の結果を明言するに苦しむ。諸君幸に諒せられよ。但し本邦實業家の米人に對する感情を漸く廣大に示し得たるを悅ぶ。換言せば彼等が吾人に對する誤解、即ち戰爭を好み賭博に耽る國民てふ感念は、我等五十三名が日常の言語動作に依りて遺憾無く氷解せられたるを信ず。同時に彼等を更に精密に知ることを得たる等直接の利益ありしは茲に喞々するを要せず。

商業上日本より米國に至る商品の價格甚だ多く米國より日本に來るものは價小なりとて、奇怪なる見解を有する者ありたれば、我々は一々左の如く辯解を與へて置いた。

千九百〇八年の輸出入統計を見るに

(一)日本より米國に一億三千萬圓也。

(二)米國より日本に八千萬圓也。

我が彼に輸出する商品中生絲は最著しき物である。併し佛清伊も亦生絲を產し、價格本邦の物より廉し。而も本邦に供給を仰ぐ。且つ生絲は多少の加工を爲すと雖も尙ほ原料品たり。米國は之を以て更に高價なる精製品を造るに非ずや。是に由つて之を觀れば、日本は生絲を買うて貰ふに非ずして賣つてやるなりと。又米國は自國內に於ける生產物の需用大なる結果として價甚だ高し。從つて海外に販路を求むること他國に比し極めて緩、從つて高價なり。英國特に獨逸の如きは、東洋語を研究してすら販路の擴張に熱中し、從うて商品の價格低廉なり。然るに日本は尙ほ米國の商品を購ふ。これ米國が賣るにあらずして日本が買うてやるなりと。彼等が此の辯解を價値あるものとして聞き研究せられんを希望した。諸君の社會に雄飛する時に當り、斯の如き見解の果して適當なるや否や。大に考察すべき事柄であらうと思ふ。

彼米人は吾等邦人を見るに恐怖の眼を以てするやの感なきに非ず。即ち日本人は機敏なる商人なりてふ念慮を有するものゝ如し。果して然らば、將來商業上多少の敵愾心を持つて吾人と技を爭ふやも知るべからず。これ吾が國人に執り

甚だ迷惑なりと雖も事實は避くべからず。諸君、今より此の點に思を凝さん事を望む。更に米人は學問に忠實にして、實業を補助する事柄は充分攻究消化して常に應用するの才能に富んで居る。吾等一行の始めて太平洋沿岸に上陸するや、鬱蒼たる森林、連々たる鑛脈、茫々たる耕地を見て、米國の富は天賦の賜多きによると、そゞろ羨望の念堪へ難かつた。進んで太西洋岸に至るに及び、黑煙濛々天日を遮る煙突の多きを見ては以前の感想轉た非なるを覺り、天賦を利する知力の絕大なるに據ることを想起した。

又彼米人は學問法律を實務に適用する才智著しく發達せるを感ず。吾人は亦此の點に於て足らざるや明けし。世の進步は充分の要素あるを必要とす。現今吾人は法律及び學問と實務と懸隔せしむること多し。此の狀を以てして世界の大勢に後るゝこと無きや甚だ疑無き能はず。

或は恐る、諸君の我を目して、學問時代に育たざる故變妙な考を起す者となさるるや否やを。我は學問無くして今日に及ぶ。然れども滿堂の諸君は完全なる學業を修むるの人である。而も他日實業界に投じて、帝國の富を增すべきの士であ

る。蓋し自重幸に誤る勿れ。期して待つ、諸君の商界に飛躍を試むるの日、如上の我が杞憂必ずや烏有に歸するを。（明治四十三年一月二十二日、東京高等商業學校の歡迎會に臨み同校講堂に於て爲せる講話の要旨なり）

（四）米人に學ぶ可き點

本會成立の由來

臨場の諸君。今夕の御會合は、誰が主人誰が御客と云うてはございませぬ。相集つた御方が皆主人とも稱せられ、又御客とも自ら思ひ得られるのでございまする。全く無意味な懇親會ではございますれども、無意味の中に亦大なる意味が具へてある筈なのでございます。數年前より致しまして、銀行者にして貴衆兩院に御列席の御方々と京濱の銀行經營の人々とが、此の議會の開けた場合に相會したならば、事に依つたら時事問題に付いて充分に裨益することもあるであらう。又政治の議論を伺うて吾々は大に知識を增す場合もあるであらう。或は又議會に出ぬ同業者中から、斯かる希望を有して居ると云ふことを申上げると云ふことも、議場に上つた場合の御參考に資することが或はありはしないか。懇親も厚うし利益を兼ねて時々例會を開くやうにしたいと云ふのが、抑此の會を起した所以でございました。引續いて毎年此の會合を催しまして、今申述べましたやうな意味が事實に於て左程奏効されたと申しませんけれども、併し議場に御出なさる御方と、議場に出ぬ同業者との意思疏通は、蓋し一會毎に進んで居ると申上げて宜からうと思ふのでございます。而して本年も右等の理由から恒例に依つて開會したら宜からうと言うて、私共發企者の一人に立つて、此處に御列席の貴衆兩院の御方方と御打合を致しまして皆樣の御會同を御促し申して、此の如き盛會を開き得られたのは、御同樣洵に幸慶此の上もございませぬ。私共議席に顏を出すことの出來ない身體ではございますけれども、斯かる機會に或は宅地價修正の御話なり所得稅の御意見なり、工場法は斯樣な考を持つて居る、斯樣な修正意見があると云ふことは、縱令食卓上の談話としても補益する所が尠くなからうと思ふのでございます。

不景氣挽回策に就いて

本務に付いて御互に考へて見ますると、經濟界の有樣は金融上から申せば順調ではございますけれども、併し事業は相變らず沈衰の姿で、昨年下期などにはもう少し擴張の氣運を見はしはしないかと思ひましたが、米の豐熟したのが却て氣勢

を損じたと云ふ樣に見えまして、未だ以て佳境に入ると云ふことは、都會も地方も同樣に見得られぬやうにございます。此の原因が抑何であるかと云ふやうな事に付いては、今夕此に攻究會を開く意味てはございませぬから、私は別に自分の意見を申上げる必要は無いけれども、想ふに大體我が國の財政經濟はどうしても權衡を得ぬ。民業の割合よりは財政の力が重い。此の力の重いことは、一昨年あたりから大に制限せられた。反響が何處までも繼續して行くものてはない。若し之をして景氣を附けようと欲して財政を膨脹せしめたならば、或は附け景氣が出來るかも知れませぬ。併しながら、是は或る場合に、果して世の中を利益するとは申上げ得られぬやうてある。果して然らば、政治上の費用を節約せしむると云ふことが、自然に商工業界に沈衰を與へたと申さなければなりませぬ。一歩進んて、言うたならば、財政よりも經濟が大に進むと云ふ時代を見るやうになりましたならば、或は經濟の力が財政に打勝つやうになりはしないか。併し是は此の席に居る御互に如何に苦心したところが、俄に求め得られることてはなくして、全體の大勢が其處に到るのを期さなければならぬのてございます。さう云ふやうに考へて見ますると、俄に景氣の附くことを求める譯にもいきませぬ。さればと云うて、唯大事を取ることばかり考へて居れば、經濟界の進歩を段々に鈍らせてしまふといふ虞を持たねばならぬやうになる。こゝらは金融界に從事して居る御互銀行者は、商賣や工業に對しては原動力ともなるべき地位に居る御同樣てありますから、常に其の點に注意して、或る場合には相當な力も添へ、道理ある事業の成立は努めて助けると云ふことを、御同樣務めなければならぬと考へるのてございます。現在の有樣が沈衰して振はぬと云ふことは、前に申す觀察が或は當つて居るとすれ、俄に此の財政の擴張を期することは、却て藥を求めて害を來すと云ふやうなことが無いとも申されませぬ。どうぞ自ら進んて、經濟界の發達を圖ると云ふことは心掛けざるを得ないと、斯う思ふのてございます。蓋し諸君が夫等に付いて御攻突の御意見もございませうから、斯かる御會合に、吾々唯東京にて始終其の事を研究し盡したと云ふ次第てはございませぬ故に、地方の諸君の御意見をも、斯かる機會に伺ふは大に利益あることゝ思ひます。特に御名は申上げ兼ねまするが、御說がございましたならば御發言のあることを希望仕ります。

渡米視察談

右様な趣意に因つて開會しました此の會てありますが、先刻千阪君から、私が昨年亞米利加旅行を致したに付いて、歸京後種々なる席て旅行談はしたやうにも聞及ぶけれども、同業者として今日此の席に居らるゝ御方の中には、未だ其の事を親しく聽かぬ方が多いに依つて、縱令陳腐な話てあつても聽くことを御好みになる御方もあらうから、一言申添へよと云ふ御指圖がございました。但し此處に御出席なされました諸君の中に、米國旅行をなしたのは獨り私ばかりてはございませぬ。隣席の佐竹君、或は青木君、其の他一二人あるかも知れませぬ。亞米利加談は私の專賣とは申されませぬ。併し此處に立ちましたのてございますから、亞米利加の旅行談を一言申添へまして、さうして未だ御聽取のございませぬ諸君が、成る程左様てあるかと云ふ事て、若し御參考の一端にもなりましたらば、大きに仕合と考へるのてございます。

事業集中の傾向

昨年の亞米利加旅行は御聞及の通り、八月半ばに出立致しまして十二月半ばに歸りました故に、四箇月の間の大旅行て、大陸の汽車旅行も三箇月てございましたが、其の道行は略しまして、見ました事柄に付いて大體の觀察を一二申上げて置きたうございます。但し工業上に付いての事などは、寧ろ佐竹君が後に御話のある積りになつて居りまするて、御聽取あることを希望致します。獨り佐竹君のみならず、成るべく斯う御集りの所てございますから、どうぞ議會に席を持つて居らる御方又は地方の諸君に於て、新見解新知識を以て充分御論說のあらつしやるやうに希望仕りまする。假りに私が此の會の司會者として見たところが、どなたに御演說の御指名を申上げると云ふことは致し兼ねまするが、先づ隣席に御出の御方などには是非御願申上げる積りてございます。そこて私が今亞米利加の旅行談を取摘んて申上げて、此の開會の趣旨と共に談話を終らうと考へますが、――亞米利加の一般の有様は、百般の事業を頻りに大く網羅するやうに考へて居るやうてございます。一例を申すと製鐵事業の如き、市俄古のゲリーと云ふ處に合衆國の鋼鐵會社が特に大工場を開いて、殆ど鐵事業を集中してしまふと云ふやうな經營をして居るやうてございます。トラストと云ふ言葉が數年前から聞えて居りまして、或る場合には壟斷を意味するが如き嫌があるやうに思ひましたけれども、さう云ふ性質のトラストも無いてはないか知れませぬが、事業をして區々に經營

するのは、生産費を餘計掛けるのと、販賣に付いて世間の見渡しを間違へる。――要りもせぬ物をどし〳〵造り、右の方から左の方へ持つて來るかと思ふと、又左から右へ持つて往くと云ふ弊害が多い。そこて其の弊害を少からしめるのは、成るたけ此の事業を集中して、一番良い方法を以て、工事は分業にして支配は集權にする。斯う云ふ趣意を執つて居るかと見えますやうてす。總ての事業にさう云ふ事が爲し得られるかどうか疑問てございますけれども、果して今申す有樣が私の觀察にして中るとすれば、今日の我が國の有樣は餘り分立に過ぎて居ると云ふ虞がありはせぬか。若し餘り分ち過ぎて居るのてあれば、今申すやうな集中主義の亞米利加の事業とは迚も闘ふと云ふことは出來ぬかと斯う考へまするとどうも今御互が銀行ばかりてなしに、或る事業を經營することに付いては、もう少し集中すると云ふことの考が生じはしないかと斯う思ふのてございます。是等はどうも一事に付いて總ての物を律し得るかどうかは疑問てはございますけれども、亞米利加の有樣はどうもさう見えますので、斯かる御席に自分の感想を申上げて、いやさうてないと云ふ御說があれば伺ひたい。若し果して然りとすれば、御互が心掛けて、成る可く小い物を大くする。二つの物を一つにする。十の物を五つにすると云ふ樣な經營を心掛けねばならぬことてはなからうかと思ふのてございます。

亞米利加人に學ぶ可き氣質

更に一つ申上げて見たいのは、亞米利加人のする仕事は、惡く申すと亂暴と言ひたい位に、良いと見ると直ぐに著手すると云ふ氣風てございます。如何にも直情徑行、勇敢果斷と云ふやうに見受けられます。併しさう云ふ氣象に似合はず、學問を重んじて其の果斷する所作が總て學理に合ふと云ふことを深く考へて居られるかと思ふやうてございます。要するに亞米利加人は、學問とか法律とか云ふものに對して常識の發達を深く心掛ける。是は其の性格がさう云ふ方に長じて居るためかと思はれる。吾々日本人と較べて見ますると、少し輕率と云ふ嫌がある。併し俗にいふ學問醉ひがするとか、法律負けがするとか云ふことが少いやうに思ふ。是は御互に餘程心掛けて、一般に此の風習を興すことを考へねばならぬと思ひます。現に目下我が國の有樣は總て議論づくめになつて、甚しきは法律が人を使ひ學問が人を支配するやうになりはしないか。若しさうなると、即ち學問負け法律醉ひと云ふことになつて、自身が法律を使ふのてなく人が學問を應用するの

てなくして、學問が人を支配するやうになる。亞米利加の有樣は全く反對に見える。此等は我も人も心して、もう少し常識から仕事をし出すと云ふことを心掛けなければ、國家の進運に不充分な嫌があり、はすまいかと懸念されるのであります。要するに亞米利加の大體の風俗に付いて觀察するに、日本に對する感情から申しますると、或は其の間に客を愛する情合とか、或は客を迎へる工合と云ふこともありましたらうけれども、五十三箇所巡回した所の樣子で見ますると、到る處誠に快活に能く其の土地の現況を見せ、頗る深切に迎へて呉れまして、又吾々共も努めて亞米利加人に對して、日本人は押並べて良い感情を持つて居ると云ふことを說明しました。彼の國人も其の事を能く聽き受けて、頗る同情を表すると云うて益〻交誼を厚うし歡喜に經過致しました。吾々旅行の有樣は、風を觀、俗を察し或は友誼を厚うすると云ふことに付いては、所謂漫遊ではございましたけれども、大體に於ては左迄缺點は無かつたと申上げて宜からうと思ふのでございます。

見聞した事の驚くべきもの、盛なることなどは、或は今申上げました製鐵所のこと、又は原料多き鐵山の有樣、もしくは各都市の商店の模樣とか、工場の設備とか、或は公園とか、學校とか、州廳とか云ふやうな事に付いては、何處の土地で斯かる物を見た。其の宏大なる有樣は斯樣であるとか云ふことは、なか〳〵申上げ切れぬ位でございます。且つ是等は申上げても餘り價値の無いことでありますから略しますが、先づ米國の商工業の有樣は、分業にすると同時に集中させると云ふ精神を以て進行して居ると見受けられます。それから個人の働きが頗る直情徑行で且つ敢爲でありながら學問を重んずる。而して其の學問に醉はない。法律に制されぬ人氣であると云ふことは、吾々の十分に學習したいと考へるのでございます。亞米利加に對する大體の觀察は、歸國後種々なる席で申上げて、今日では耳古いことでございますけれども、見たところの目が一つしかなかつたために、申上げることも變つた事を言ひ得ぬのであります。故に初めて御目に懸つた方々には、或は御參考にならうかと思うて、隣席から一言添へよと云ふ御言葉に從つて、亞米利加觀察の概況を申上げた次第でございます。

（明治四十三年二月二十二日、貴衆兩院議員中の銀行家並に東京組合銀行有志第四回懇親會席上に於て）

九九　財政の膨脹と經濟界

農民豐年に苦しむ

明治四十三年の經濟界に向つて如何なる觀察を持つかと云ふ御問に對して、率爾の御答がしにくい。殊に私は八月十九日に亞米利加に參つて丁度四箇月を經て歸つて來たので、目下夜を日に繼ぎて旅行談の尋問を受けて居るやうな有樣だから、未だ內地の事情を知悉するの暇が無い位である。經濟といふものは其のやうに三月か四月の間にえらい變化をするものではないけれども、併し今日の有樣では、殆ど半年に近い時日海外に居つて、日本の樣子を見ないで居つたから、未來の觀察を述べるには最も不適當なる事柄だと思はなければならぬ。況や己が亞米利加といふ國を見て來たのであるから、平たく言ふと、兎角目に惡い習慣を持つて居るといふことを考へなければならぬ。旁〻以て此の觀察は極く正鵠を得るや否やといふことを自身ながらに疑ふ。併し年々年の始めには未來の豫言者の如く卑見を述べる例になつて居りますから、御問に對して說が無い、意見が無いと言ひますのも甚だ殘念ゆゑ、我が信ずるだけのことを御答して見ようと思ふ。

第一に私が旅立つ前の觀察はどうであつたかと云ふと、經濟界は追々順境に向ふと想像した。幸に日本の最も重なる輸出品の原料たる春蠶も、各地皆豐作とは言へなかつたけれども、さまで惡くなかつたやうである。秋蠶も先づ良からうと云ふ豫想であつたし、況や米は豐年といふ景況であつたからして、最早一年以上休養し來つた經濟界は、金融も段々緩慢になり、金利は追々に下り、戰後の熱に浮されて過度の事業計畫を爲したものも中には困難に陷つて居る者もあるけれども、追追に整理して改良の緖に就いた向もあるといふ位であるから、自然と一般の氣合が相助けて、さうして此の經濟界に活氣を生ずるであらうと思うた。然るに其の後米作は豫想以上の豐作で、全國豐年を謳うたにも拘はらず、却て爲に米の價が廉い。此の米價の廉いのが寧ろ景氣引立の害を爲して益〻沈衰を來した。如何となれば、米を賣らうといふには廉し、一方には色々仕拂はなければならぬ入費が迫つて來る。都下は金が餘つて困り、地方は寧ろ金融逼迫といふやうな有樣である。遂に何れの地方も、不景氣を如何にして挽回すべきかと云ふやうな說を友人から聞くのは、寧ろ意外の感に打たれる位であつた。

財政と經濟

併し又靜かに考へて見ると、成る程米の價の廉いといふことは地方農民の大に困苦とする所であるとすれば、一般の人氣が引立つて來ぬ以上は、唯農作の豐年ばかりが、直ぐさま不景氣挽回といふことは出來得ぬといふも無理ならぬやうに考へられる點もある。抑〻此の經濟界に大なる原動力を與へたものは三十七八年の戰爭であつて、其の戰爭の時の有樣が、百事俄かに景氣を附けた事柄は獨り經濟界ばかりではない。財政に於ても大にさういふ有樣であつた。是は勢の然らしむる所、今日善いの惡いのと言ひ得る事ではないけれども、――勿論軍需品ばかりではない、其の以外の總ての方面にも俄に需要を惹起した。或は石炭も、紡績も、織布も、又それらを運搬するに就いての運送事業も總て需要を起した。實はこれは一時の現象であつたけれども長く續いたから、誰も永續するものゝ如き觀念を持つて、此の有樣が直に打消さるゝものゝ如く思はなかつた。即ち財政上から起る原動力が實に强かつたといふことを覺悟せなければならぬと思ふ。同時に此の財政の働きが經濟界に對して大なる關係を持つた。詰り十數億の金を借りて、それをどし〳〵使ひ出すといふやうな有樣から、經濟界に一時の仇花が咲いた。そこ

て三十九年四十年に掛けて經濟界が俄かに勃興の有樣を呈した。此の場合に注意深い人は兎に角、一般の人氣は、此の如き有樣で自然と國の力は進んで往くものと誤解して、進歩を圖つた向がなか〳〵に多かつた。これは未來を考へぬと云へば言ふやうなものゝ、目前に需要が多かつたから其の需要に應ずるといふ以上は、矢張相當の設備をせねばならぬ。左樣にせぬと人に後れるいふ觀念から力を入れたといふことは、今から見れば愚であるけれども、其の場合に於ては多少已むを得ぬ事情があつたかも知れぬ。而して其の財政が左樣に國費を多くするに付いて俄に租稅を增したといふことは、是は一般國民に向つて强い打擊を與へて居ると思ふ。戰時稅の增額は確か一億六千萬圓であつた。それが今日は永久稅になつてしまつた。日本の總體の國力といふものが、決して六億以上の巨額の歲出に堪へる筈は無いのに、俄に一億六千萬圓も臨時稅を課してそれが終に永久稅になつたといふことは、此の兩三年の間に俄に民力が增すか、然らざれば前の割合が甚だ低かつたのであれば別論なれども、然らざる限りは、巨額の稅を俄に增した結果は始終附いて廻つて、直に回復するといふことは出來難い譯であると、斯う考へね

ばならぬ。戰後速に之を改正することが出來ず、漸く當年の議會に一千萬圓ばかり減稅するといふことに相成つた。稅制整理を希望する者から論ずれば、甚だ遲遲たるものと言はなければならぬかと思はれる。是等は經濟界にして不景氣を與へた原因と言はなければならぬかと思はれる。

財政と人事沈衰

吾々銀行者も其の事は固より知つて居つたけれども、一昨々年の冬頃稅制整理よりも尙ほ先に公債の整理を必要と主張した。蓋し稅制の整理も必要であるし、行政の整理も必要である。必要の廉々は數多くあるけれども、如何に希望すると言つた所で、何も斯も一時に遣るといふことは出來はしない。何が一番肝腎であるかと云へば、吾々想ふには今日の場合公債の整理が最も必要である。公債の價格を堅固にすることを努めずに此の儘にして置くと、殆ど日本の信用は地に墮ちてしまふと氣遣つた。其の主なる理由は、第一に銀行者又は一般の富豪の持つて居る公債が段々下落するといふ困難より尙ほ酷いのは、戰後無理に鐵道を國有にした、其の鐵道公債五億萬圓程の高を發行しなければならぬ。既に他の公債が下落すれば、勢ひ鐵道公債の下るのは無理ならぬ。而して追々其の傾が現れて、八十圓臺を割つて七十圓臺にもならうとした爲に、各鐵道會社の重役は、是は大變だ、曩に法律を以て無理に鐵道を國有にされて、これに次ぐに又公債價格が限無く下落する。法律上公債で買取るといふのだから割合は好いやうに定めたけれども、取りも直さず、公債が一割下れば一割だけ鐵道買上の直段が減じたと同じ道理、二割下れば二割だけ知らぬ間に財產を奪はれたと同じ譯になる。それで各鐵道會社が如何にも苦難に思うて、銀行者に相談があつた。銀行者も尤と思うたのみならず、自己に於ても公債との關係が强いから、旁〻以てこれは由々しき大事といふ點からして、前の內閣に向つて頻りに意見を陳じ、其の後一昨年七月內閣が變つたに就いて現內閣にも入釜しく論じた。幸に現內閣は此の鐵道會社もしくは銀行者などの意見を尤として採用し、國家が財政の信用を保つには先づ何より先に公債の價格を堅固にするの外は無い。――それには償還の方法を定める外は無い。それで一方は軍費其の他に向つて節約を加へ、遂に公債整理の方法を確定して其の事が行はれた。其の方が先てあつたから、片方の稅制整理は自ら第二になつたに就いて、一方公債に對しては安心を與へたけれども、一般の經濟界に對して緩和する

までの働きが及んで居るとは思へぬやうである。して見ると戰後經濟界に與へた强い打擊は、一部は稍回復の形を見たけれども、他の一部は未だ充分なる緩和の方法が行はれたと言へぬではないか。故に假令一方に金利が廉くなつても公債が高くなつても、各地押並べて人氣が沈滯して居るものではないかと思ふ。

進歩的氣象と國民

斯く考へて見ると、既に第二の整理法も行はれんとしても、大體の療治法が追々に進んで行つたならば、最早健康の回復も左迄遠くはあるまいといふことは、言ひ得るであらうかと思ふ。今日さういふ時期が見られるかと思うたのに、案外それが見られぬといふのは、未だ前に受けた原因が全く艾除せられんであつたと想像する外は無い。しかしそれも追々に進路が向いて居るから、さすれば丁度昨年の七八月頃より追々に回復するであらうと想像した不景氣は、少し遲れて或は次の期に來るといふことを待ち得られるであらうと思ふからして、其のやうに唯不景氣にのみ傾くものだと悲觀せぬでも宜からうと思ふ。

而して又大體に於ての希望として申せば、成る程今日日本の稅額の甚だ高いといふことは、國民一般の苦痛とする所であるけれども、國家の進運を圖るといふ以上は、唯困難といふ神經を起して縮んでしまふといふやうな觀念を一般に持つことは甚だ望ましくない。畢竟日本の政治でも、財政でも、經濟でも、總て維新以後の仕事といふものは、其の力より以上を望んで刻苦精勵して、始終進歩的氣象に依つて今日まで國運を進めて來たのである。凡そ進歩する國柄の有樣は總てさうである。獨り日本ばかりではない。何時でも安穩の有樣に居て、例へば十貫目の力ある者が八貫目脊負つて居るなれば、成る程躓いたり倒れたりする氣遣は無いけれども、さういふ考を以て國家を經營して往くならば樂なやうではあるけれども、他邦の進運には必ず押倒されるといふ虞がある。故に幾分か力より强い考を以て國運の進歩を圖つて行くといふことは、是までの國是でもあつたし今日も尙ほ必要であらうと思ふ。況や隣國の亞米利加などは最も其の念慮が强くて、最も其の働きが鋭い。さういふ國と相伍して此の國運を進めて往かうといふのに、唯困る困ると言うて、愼重とか堅實とかいふ言葉のみを談柄にするやうな人氣では、それこそ本當に困るのであるから、私共は餘り困るといふことを以て世の中に唱道したくはない。もう少し勇氣を出さなければいけぬと思ふ。然らばというて、此

の仕事を遺つて見たい、斯ういふことに一つ手を著けて見たいと、今直ぐ急激に事業の企をするといふ意味ではないが、唯悲觀のみに陷つて世の中を憂へ且つ悲むやうな人氣になることは、今日の經濟界に採るまじき方針であると思ふ。

（明治四十三年一月十五日發行の『銀行通信錄』に掲載されたるものにして同誌記者の爲に語りたる談話筆記なり）

明治初年洋行の土產は一種の感覺

一〇〇　本邦鐵道の回顧

今は昔、殆ど六日の菖蒲のみかは一種の繰言として聞かれぬてあらうけれども、昨今聊か感ずる所あり。こたびは趣を變へて鐵道の追懷談を試むべし。要するに日本に於ける鐵道の由來經過と、予が一貫の主張を述べて自ら遣るに過ぎざるのみ。

國運の發達を圖るには、どうしても鐵道に據らねばならぬといふ强い感じを持つやうになつたのは外ではない。假令充分の知識は無くとも所謂百聞一見に若かずで、事實眼に見つゝおのづと深い感じを持つに至るは人間の常であるが、殊に予は明治の以前民部公子に隨つて佛蘭西に著し、而して佛蘭西から或は瑞西に行き、和蘭にも行き、白耳義をも廻つて巴里に歸り、再び伊太利に出掛けた。其の時は佛蘭西と伊太利の國境なる例のモンスニー山の隧道は未だ出來上らぬ爲に、半ば其の上を馬車で通つて伊太利に行つた。伊太利の都市は鐵道で經廻り、最後に英吉利へ旅行した。英吉利でも彼方此方と鐵道旅行を試みた。成る程國家といふものは斯の如く交通の便が備はらでは、國運の進歩發達を圖ることが出來ぬと、何も知らぬ自分さへ强き感覺を惹起したことは、未だに深く記憶に殘つて居る。自分が歸朝したのは明治の初年であつた。

京濱鐵道買收事情

時に伊藤さん大隈さん等が、非常に力を入れて京濱鐵道の官設を企てられた。當時世の中には種々の物議もあつたが、特に私は何は扨置き是だけは是非遣らねばならぬと思うて、官途に就くや否や其の事に付いて多少の下働きをいたして、京濱の鐵道が成就したのであるが、其の時分世の中にては鐵道に對する非難が中々喧しかつた。夷狄の眞似をするとか、外國から金を借るは以ての外であるとか、隨分暗殺の危害をも加へ兼ねまじき評判が高かつた。次いで私が官を辭したのは明治六年であつたが、其の以前明治三四年頃と思ふ。當時英國に留學中の蜂須賀

侯爵が、同族方に向つて鐵道敷設の建議を寄せられた。爲に華族さん方の間に大分鐵道敷設論が盛になつて、明治六七年頃伊達宇和島(宗城)、松平因州(慶德)、前田加州、毛利長州、尾州、井伊彦根、松平越前(春嶽)、高松の松平賴聰さん抔、二十一二名ばかり有力の諸侯が申合せて、是非奥州迄鐵道を敷設しようといふ事を企てられた。當時私は官途を辭して居たので、高島嘉右衛門、前島密の諸氏と共に相談役に頼まれた。評議は度々あつたけれども夫程金は出はせぬ。家祿を的に出すことゆゑ、殊に自身の身代はどの位あるか知らぬ御方が多く、私の家の財産はいくら有るかという て人に聽くやうな始末。會合は數度あつたけれども一向豫算も何も立ちはせぬ。其の時に計上した工費は凡そ千七百萬圓か二千萬位と思はれたが、迚も出來さうもない。そこで私が御勸め申した。あなた方が如何に御苦心なされても迚もいかない。寧ろ既設鐵道を御買ひなさい。此の間政府で敷設せられた京濱鐵道を、政府は品によつては賣るといふ。いくら建築費が掛つたか、其の掛つた金高を以つて買ふとすればよいではありませぬか、と勸告して早速評議が纏つた。そこて私が井上侯爵に相談した所が、宜からう、至極面白い。華族が買はうといふなら賣らせようてはないか。伊藤が工部卿をして居るから先づ伊藤を勸めて見ようというて御話をした所が、それは面白い。京濱鐵道は華族に賣つて、政府は又別に造つても宜い。其の時には伊藤公も井上侯も民設を喜ぶ方てあつた。そこて京濱鐵道を七箇年三百萬圓、六鄕川の假橋架換は三十萬圓掛るが政府で架設して渡すといふのて、政府と華族の間に契約が成立つた。それから年賦て二年許り納めた金は凡そ八十萬圓位てあつた。

京濱鐵道の始末

所が明治九年と思ふ。丁度士族の祿制が定まつた。それと同時に華族へも矢張其の食祿相當に金祿公債て渡すといふことになつた。そこて華族方の財産に異狀を生じた。しかのみならず前には出來ないと思つた奥州への鐵道が、岩倉公が何ても斯ても遣らせるといはれて、日本鐵道會社の組立を鋭意計畫された。そこて華族さん方は、日本鐵道會社へも資本を出し、京濱鐵道の年賦金をも納むるといふことは家政上甚だ困る。どちらか一方にして貰ひたいといふことを岩倉公へ申出した。岩倉公は敢て京濱鐵道の契約を毀し主義といふのてはないが、そんなら京濱の方を解除して日本鐵道の方へ資本を出せと言はれた。私は是に於て

如何にも殘念と思ひましたから、然らば京濱鐵道は民業で遣りますから、華族さん方は御止めなさい。私が民間で資本を募つて遣りますと主張したけれども、元來華族方へ契約した事だから民間へは許可せぬと言はれて、到頭京濱鐵道の年賦約定は、日本鐵道會社へ資本を出す爲に解除されて仕舞つた。既に政府へ納付濟になつて居る八十萬圓許りの金額は如何にしたかといふと、これは多く海上保險會社へ注入された。今日でも海上保險會社に華族方の株主の多いのは其の故である。又大阪紡績會社の設立にも、私が勸めて株を持たせるやうにした。さて岩倉公の御盡力に依つて日本鐵道會社が新設された。私は勿論資本が乏しいから其の株は僅しか持たんけれども、引續いて會社の重役となつて、明治三十七年まで殆ど二十年間も勤めて居た。又九州鐵道でも、或は北越鐵道でも、岩越鐵道でも、參宮鐵道でも北海道鐵道でも、各地に於ける鐵道の聯絡を圖ることに就いては隨分力を盡した。獨り內地ばかりではない。朝鮮に於ても京仁、京釜兩鐵道の敷設にも與つて多少の力ありと思ふ。若し私をして遠慮無く言はしむれば、當時或る種類の政治上から力を入れた二三の御方と、私共のやうな表面に立つて刻苦經營した

終始一貫民有主義の挫折

同志者十數名が無かつたならば、彼の鐵道は如何に成行つたか解らぬと思ふ程である。素より私一身から言へば本業は銀行者であるが、內地及び朝鮮の鐵道に就いては、相當の苦心相當の經營をしたというても餘り過言ではなからうかと思はれる。

斯の如く私共が鐵道事業に力を盡したといふのは、畢竟日本の商工業は未だ充分に進まぬ。これを進めて行くに就いて第一の動力と爲る所のものは鐵道である。日本の交通運輸の大革命を爲すに非ずんば、決して國の富を進むることは出來ぬと深く觀念した爲である。又明治二十年であつたと思ふ。時の北海道長官岩村通俊といふ人が、東京の商工業界の人々を紅葉館に集めて、北海道の開發は今後は成るべく民業に委せて進めたいと思ふが、夫には如何なる手段を執るが宜からうかというて諮問されたことがあつた。其の時大勢の意向も左樣であつたが、私は主として早く鐵道を御進めなさい。若し官業で出來ぬといふならば民業に御任せなさい。相當の補助補助というた所が唯金を與ふるに及ばぬ。政府が利益の保證さへなされば大抵成立つだらう。初めては函館を起點とするならば、小

檜、札幌、進みては釧路の邊まで二線か三線是非聯絡させなければ行かぬ。茫漠たる荒蕪地をして相當の價値あらしむるには、鐵道を敷くより外に良策は無い。工業發達を助くるは勿論、農産物の價を高むるにも矢張運送の便に據る外は無い。人間も亦之に依つて充分移住し得るやうになる譯であるからと、左樣な希望を申立てたけれども、其の進みは隨分遲々として捗取らない。そこで自身等の考では、此の鐵道をして今日の如く遲々たる姿にあらしむるは甚だ遺憾である。もう少し早く進むる手段がありはせぬか。それには民業で遣らせるが一番宜からう。或る點から言へば民業に任せては統一を圖ることが出來ぬとか、或は利益配當を多くしたいと云ふ希望から、運賃を高むるといふ弊害は多少之あらん。しかし又一方から言へば、或は經營が自ら粗雜に流るゝ嫌はあるか知らんけれども、官業に比すれば餘程經費を省くことが出來るのみか、萬事敏活に親切に行屆きて、迅速の發達を遂げて行くといふ點は官業の及ばざるところである。尤も線路の延長などに就いては、民業に於ては其の收益が六分に廻らなくては遣り得ないといふ缺點あるに反し、官業に於ては假令利益の割合が少くても、必要と思へば敷設するといふこともあるけれども、併し國の財政は始終歳出の要求多きに反し、歳入の財源に乏しき例なるを以て、思ふやうに事業の進行を圖ることが出來ぬ。さらばといふて、如何に生産的事業にせよ、政府が公債を募るとありては、兎角に應募を澁る傾が無いとは云はれぬ。此の點に於ては民業の方が遙かに爲し易い。旁〻以て鐵道の普及擴張は民設なるかなと、私は始終論じて居つた。丁度明治二十七八年頃でもあつたか、今の山縣公爵などは軍事上の關係から、頻りに鐵道を國有にせにやならぬといふ說を御主張なされた。其の時にも私は飽くまで民有說を主張したので大分御機嫌が惡かつた。私共は何處までも、鐵道をば官營の必要にのみ借用すべきものでないといふのは、國家の必要とする所は臨時の場合で、平時に於ては生産を增し交通を進むる方に供用すべき要務が多いのである。然るに臨時の必要たる軍事上の關係のみに重きを措きて、全國の幹線鐵道を悉く官營として其の維持を圖らんとするは、頗る誤れる說と謂はざるを得ずというて主張した。それが爲に其の頃であつたか鐵道會議が開かれて、川上參謀總長が議長となり、私は商業會議所會頭の資格から鐵道會議々員に任ぜられて、屢〻會議に出席して故兒玉伯

爵、寺內陸軍大臣抔とは、日頃御懇意の間柄でありながら鐵道敷設の件に就いては、經濟上の關係と軍事上の關係に於て大に說を異にして反對側に立つたことがある。未だに記憶に存して居るのは、即ち奥羽鐵道の福島と青森間を聯絡せしむるに就いて、仁別線と野代線との二つがある。――秋田から仁別を通つて弘前に出る山中線と、野代線の方を通つて行く海岸線とである。此の山中線は距離は短いけれども非常に工費が掛る。海岸線は線路は長いけれども、海運の便もあれば貨物も多く人も多い。そこで商賣人は野代線を選み軍人は仁別線を選むといふ譯で、大に爭うたことである。夫等は鐵道會議に於ける問題で、今更繰返す程の必要も無いが、左樣に私は終始鐵道民有說を主張したに拘らず、不幸にして明治三十九年に彼の通り鐵道國有と確定されて仕舞つた。

鐵道國有と當局者の宣言

當時私の考案では、鐵道を民業にして如何にして其の事業の進行を圖つて行くかといふことに就いては是は唯內地の資本許りでは迚も鐵道の普及を圖ることは出來ぬ。就いては鐵道抵當法を設定して外資輸入の途を開くが宜いてはないか。而して外國から相當に資金を借入れて鐵道の普及を圖るが宜い。但し鐵道抵當法を設定する以上は、或る場所に就いては政府に於て相當の撿束を加へる必要が無いとは言はれぬ。若し左樣な必要があるならば、相當の撿束を加へるが宜いてはないか。さすれば民間に於て外資を借入れたところが、結局政府が公債を起したと同じ事ではあるまいか。內地の資本ばかりでは、迚も大いに鐵道の普及を圖つて國の富を增進することは出來ない。但し一方に鐵道の獨立を許し、一方に線路の延長を謀らしめたならば、或る場合には稀に遣損ひもあるか知れぬ。併しながら明治十四五年から私設鐵道を許して、明治三十九年まで二十四五年間、或は弊害もありしならん、過失もありしならん。なれども其の過失弊害幷に不備不足を補うて餘りあるだけに國の進みを助けたと言ひ得るであらうと思ふ。既往既に然り。將來とても民業にして置いて、外國の資本を入るればとて何の恐るゝことか之あらん。若しそれ鐵道の獨立が完全に行はれたらんには、自ら小鐵道の大鐵道に合一さるゝは自然の成行である。九州に於ては九州鐵道が統一の覇權を握るであらう。奥羽線は遂に日本鐵道會社に合併せらるゝであらう。斯の如くにして日本の鐵道も、終には佛蘭西に於ける如く三四の會社となるに相違無い。

失に對して軍事上必要の條件は、政府が命令を以て相當の檢束を加ふることが出來るのである。果して然りとすれば、經營の簡便なると事業の進歩の早いだけ、國家に取つて大利益てはないかといふのが、私の鐵道民有論を主張する所の主眼てあつた。斯くて三十九年まて進み來つた所が、思ひきや鐵道は國有となつて、遂に我々の希望は全然挫折して仕舞つた。

しかし當時政府當局者の言明する所に依れば、國家が鐵道を國有とする其の趣意は、獨り軍事上の便益を圖る爲ばかりてはない。鐵道は國家經濟の要點てあるといふことは須臾も忘れぬと、斯樣な御宣言てあつた。而して鐵道を國有にせられた以來の有樣はどうか。最も注意を拂ふべき事柄てあると思はれる。鐵道國有實行以來既に數年を經るも、其の後の實況は如何てある。毎々或る新聞抔に難ぜられて居る所を見ると、國有以前の進歩と國有以後の進歩とは寧ろ遲緩の嫌がありはせぬか。また其の運賃の割合なり若くは其の荷物の取扱なり、或は工場農場等へ支線の聯絡に至るまて、果して經濟的に統一されたてあらうか。統一の名美なりと雖も其の實擧らずとすれば、既往の不統一なりし鐵道に却てより善きものがあると言はねばならぬ。斯く言ふは或は極端論かも知らぬけれども、國有以來の鐵道の現狀を見ては、未だ以て滿足とは言ひ兼ねるてはないか。成る程或る場合には疎漏の弊害を防ぐとか乃至不一致に失する如き弊は、多少取締られて居る邊もあらうけれども、眼に見耳に聽くところは、唯不便不都合の事のみ多くして、其の可なることを見出さんと欲するる其の數極めて少しと言はねばならぬ狀態にあらずや。しかし國有實行の今日、何と繰言を述ぶるも益無し。只管希ふところは其の職に在る諸君が當初の宣言を忘れず、鐵道の普及、運輸交通の利便を圓滑にすると同時に運賃をも廉くして、能く工場又は農場等へ支線を聯絡せしめ、我々の遺憾とするところを慰藉せられんことを望む外は無い。

（明治四十三年三月廿五日發行龍門雜誌第二百六十二號掲載）

一〇一　慈善救濟事業に就いて

御忙しい中を御尊來を戴きまして誠に有難う存じます。且つ各救濟事業に御關係ある方々、現に其の職に在らせらるゝ方々或は學問上から御研究になり、又は

實地貧民救助等に實務を執つて居らるゝ、種々の方面の方々の御集りを得ましたのは、誠に此の上も無い光榮と存じます。田中太郎氏が歐羅巴及び亞米利加の事業に就いて一應の取調を致しました模樣は、大略先刻申述べられましたが、まだ充分に述べ盡したとは申されませぬさうで、追つて或は報告書等が出來上りましたならば、印刷に付して更に御覽を願ふ機會も生ずる事と思ひます。海外の有樣を聞くに付けても、內地の模樣如何といふ事に就いて私は茲に聊か卑見を陳述致し、斯かる御寄合に對して充分御敎示を請ひ、果して必要と思召されたならば、將來如何なる方法かに依りて更に調査研鑽等の運びを取るやうに致したいと希望して止まぬのでございます。實は今夕申上げたいと思ふことを覺書として認めて置きましたから、其の覺書に從つて愚見を陳述致したならば、話が遣り宜からうと思ひます。朗讀演說らしくなりますが、さう云ふことに致しますから左樣御承知を願ひます。

國家の繁昌に伴ふ貧民の數

元來田中氏の唯今述べられましたことに就いては、私は斯かる事柄に深い趣味を有つては居りますが、併し學問上からも又一身の身分上からも、斯の如きことを研鑽しなければならぬと云ふ譯ではございませぬ。尤も御聞及てもございませうが、私は東京市養育院の事に就いて明治七年から相談相手になつて居ります。なか〳〵充分な譯には參りませんけれども、相變らず繼續して東京市の救濟事業を今尙ほ管掌して居ります。而して同院に於ける被救助者の中には、全く老衰救はねばならぬと思ふ者と、小兒で養育者が無いのと、又は一時職業を失つた者即ち失業者の類、或は貧民が小兒を生んで母親が病氣になつたとか、また其の子の母が死んだと云ふやうな各種の者が皆入つて參ります。それ等の種類を始終世話して居りまするが、それが段々に都會の繁昌の增す每に、斯樣な人間が殖えて來る。養育院の人數の增すに就いて都會の繁昌が增すと云ふことを始終感じて居ります。國の繁昌は增したいが、國の繁昌は貧民を增すのだと云ふ感じを起すと同時に、年々に其の念が深くなるのであります。殊に三十二三年頃から不良少年の感化事業をも開始致しましたが、是は資金の足らぬ爲に滿足な事は出來ぬのみならず、實はまだ普通の救助をするにも骨が折れる。なか〳〵私共の地位では、感化事業に於ては『いろは』とも言へぬ位に思ふ。今夕は其の仕事を擔當させて居る所

の者も參つて居りますが、其等の者と常に且つ論じ且つ行ひして居るのでございます。併し段々世の中を見まするに、國の進むと同時に感化事業抔にも一層心を用ひなければならぬと云ふ感じが、年一年に増して來る樣に思ひまする。て畢竟田中氏が歐米の感化救濟事業を視察しようと思立つたのも其の觀念。私が聊か助力を與へましたのも其の通り。歸朝以來段々に話し合うて居るのであります。又此の事は既に夫々の方々が種々心を勞せられて居らるゝから、唯二人御互の間ばかりでなしに、又養育院と云ふものに就いてばかりでなしに、廣く其の局に當る方に、及び其の他の向へも御話をしたら宜からうと云ふので、實は今夕の會も催した次第で御座います。

救濟事業の不整備

さて茲に私が申上げて見たいと思ひますことは、救濟事業と申しますけれども唯窮民を救助すると云ふのみでなく、貧窮を防ぐと云ふ廣い意味を以て、所謂弱い者を保護する方法を意味して、之を將來に如何なる方針を取つて行つたら宜からうかといふ此の愚見を申上げて、御教示を請ひたいと思ふのてございます。維新以來四十餘年、實に我が國百般の事物は皆面目を一新して、政治なり、教育なり、軍事なり、又我々が從事して居る實業なり、總て之を維新前に比べて見ると、殆ど隔世の感があつて霄壤の差も啻ならぬと云ふ有樣てあります。併しながら、唯文物憲章が左樣に光彩を放つからと云うて、今日はそれだけて悉く滿足して居つて宜しいか。遺憾に思ふものは無いかと云ふと、然うは參りませぬ。即ち弱者保護に關する事業と云ふものは、他の國々と比較して甚だ發達して居ないやうに思ふ。これは大に憾としなければならぬことだと、如何はしいことを申すやうてはありますが、私には然う思はれます。て我が國も現在に於て救濟の事業が絶對に無いとは申しませぬ。明治七年の恤救規則があつて、窮民を救助する方法はありますけれども、其の救助する範圍は極く狹小てある。而して其の規則の下に與へらるゝ救助の人間は、人口百萬に對して僅に三十人位、故に其の費す所の金額は一年二十萬圓位にしか當りませぬ。明治七年から四十三年の今日ては、養育院の被救助者が・増すと云ふ程度から言うても、決して適當な方法てないと言はなければならぬと思ふのてございます。然らば公共團體の救助事業若くは私設救助團體の事業に大に見るべきものがあるかと云へは、慈惠會もありまするし、三井が救濟病院を造

られたと云ふこともあり、彼此色々ありまするが、機械工業の發達とか、都會人口の膨脹とか、物價の騰貴とか云ふことから、貧民の數は逐年增加しつゝあり、業を失ふものも續々と增して參るやうてあります。養育院ても日清戰役以前は、在院者が凡五百名內外てあつたものが、今ては六七百事に依ると二千人にもならうかと思はれる程てあります。單に養育院の數だけを以て全般を推測する譯には參りませんけれども、此の一事ても大概を知ることが出來るかと思ふのてあります。斯の如き事實を見つゝ、これに對する救濟事業は現在の儘に放任して置くことが果して適當てあらうか。これは大に講究せねばならぬことてはなからうかと、深く懸念致しますのてございます。私は斯樣に申しまするからと云つて、法律を以て國家若くは地方團體に救助を强ひるとか、又は都會の力を以て救助したいと云ふ意味てはありませぬ。或は何か方法を設けなければならぬと考へますけれども、將來如何なる手段が此等の窮民を少からしむるか。また自然と此の貧富懸隔の緩和を保たしむるか。而して弊害無からしむるかと云ふ方法の講究が今日甚だ必要と思ふのて、斯の如く必要を感じますに就いて自身の愚見から推測致しますれば、最も深き注意を以て講究を要することゝ思ふのてございます。今其の理由を茲に申上げて見たいと思ひます。

政治上の理由

先づ政治上の理由として申しますならば、諸君の前ては憚多い事てありますが、國家が政を爲すの目的は、天下の億兆をして生を安んぜしむる——即ち自身が營み自身が生きて、公安も害せず秩序も紊さずと云ふやうにするのが、政治の目的と言はなければならぬ。故に立法とか行政とか云ふ機關が形式上完全てあつても、若し人民が生に安んずることが出來ぬとか、窮民路に彷徨ふと云ふやうてはいかぬ。貧者が盜を爲すとか、弱者が病んてこれを癒すことが出來ぬとか、國家が一切これを構はぬとか云ふことは、決して將來左樣あるべきものてはなからう。今日が左樣な狀態てあると、忌はしいことを申すてはございませんけれども、若し果して只今申しまする如く段々窮民が殖えると云ふことを懸念致しまするならば、此の儘放任して置いたら、遂にさう云ふ忌はしいことが生ずるてはなからうかと憂慮致すのてございます。元來日本の制度が所謂家族制度てあつて、隣保相扶くると云ふことは美風てありますけれども、惡く申せば一軒の家に無駄飯食ひの人間

があつてそれを一人が養つて居るから、戸々に貧院を構へて居ると同じことで餘り宜いことではありませぬ。それを以て貧民が少いと賞めるならば、一方からは世人悉く貧民と言はなければならない。所が前に申す通り、物質的發達が段々進んで參りますと、今日では既に美風ではないのみならず、縱しそれを美風とした所で、其の美風を何時までも保つことは出來ないと、斯う考へねばならぬやうに思はれまする。此の救濟に關する現行の法規はと見ると、恤救規則、行路病人及行旅死亡人取扱法、罹災救助基金法、其の他種々の法令はありますけれども、前に申した通り其の範圍が頗る狹い。行旅病者の規則は、病者が道路に倒るゝを待つて始めてそれを救ふと云ふやうな有樣であるし、罹災救助の法は天災地變に罹れる難民を臨時的に救助するに過ぎないので、廣く一般窮民の爲にどうすると云ふ方法は別に存して居りませぬ。或は市町村に貧民救助と云ふことが行はれて居らぬてはございませぬが、其の經費を調べて見ると、地方の經費に依つて救助する金額は、僅に一箇年三十萬圓にしか過ぎぬやうに見えまする。若しそれ救助と云ふことは、些かも之を行ふのが全體良くないと云ふ斷案が下れば、これは別段でございますが、併し今の所では滿更無いてはない。而してある所のものは唯形ばかりで、充分に行はれて居らぬと云ふ姿である。尤も現今の制度では出來ぬのでありませうが、果して然らば今の制度は頗る不滿足千萬てはないかと思はれまする。若し窮民を救ふと云ふ方法を講ずると云ふことてあつたならば、或は職業の紹介をするとか、疾病者の救助てあるとか、其の他勞働者の保險制度てあるとか、或は貯蓄奬勵の方法とか云ふことは、國家としてもう少し現在よりは進んだ所の方法を設くる必要がありはせぬかと思ふのてあります。政治上から貧を防ぎ貧を憫むと云ふ事に於て、今日の有樣て置くは適當と思はれぬと云ふのが、一の理由として愚見を陳述致す次第てございます。

經濟上より見たる關係

次に經濟上の關係から見ますると、最も力を盡さなければならぬやうに思はれまする。經濟上から考へますると、此の救濟と云ふことが、一面に於ては生產的勞働力を增加させる。他面に於ては、裁判とか監獄とか云ふ費用を減じて、さうして生命財產の安固、國利民福の增進に及ぼす所少くないと思ひます。試みに一例を申さば、働いて居た者が一旦病氣になる。職に從ふことが出來ない。救助を受く

ることも出來ぬ爲に路頭に迷ふ。困窮極つた結果盜賊を働かぬとも限らぬ。若しさうであつたならば、其の本人の不幸のみならず、種々なる厄介を社會に殘す譯になるから、其の勞働者を助けて遣る費用よりも、更に幾十倍するものを費さねばならぬ譯になる。不良少年などの如き、更に大なる影響を及ぼすものであつて、例へば櫻の木にある毛蟲は、小さい間は容易に其の驅除も出來まするが、大きくなつて繁殖して來れば、遂に其の樹を皆燒いて仕舞はなければならぬやうになる。されば總て斯う云ふことに就いて救濟の方法を講じたならば、啻に細民の幸福のみならず、國家の損害を防いで福利を增進することが出來るであらう。防貧及び救恤の事業は、慈悲哀憐の仕事を爲すと同時に一般國家の利益を增すと云ふ結果を來すこと疑無いと思ひます。斯う考へまするとこの救濟事業は經濟上の見地からも、是非主張してもう一層力を盡さねばならぬことではあるまいかと思ふのであります。

人道上よりの考察

更に人と云ふ位置から考へて見ますると、即ち人道上から、考察して見ましても、所謂『惻隱の心は仁の端なり』で、救濟の制度を必要とする觀念は惻隱から起るものと云つても宜からう。現在泰西開明諸國に行はるゝ各種の社會政策の如きは、皆弱者を保護するを其の結局の目的とするものでありまして、實に文明國の一特徵として見做さるゝやうに考へられます。現在の有樣から社會生存競爭の風潮を見ますると、世の中は弱肉强食と云ふやうに見えますれども、若し國家に人道が行はれなければ、其の國は滅びると言はなければならぬ。これは歷史に徵しても明かなことで、今何處にどう云ふことがあつたと云ふ例を引いて申上げるまでもなからうと思ひまする。で茲には申上げませぬ。惟ふに政治の組織は時勢の變化に伴うて、段々に遷り變つて往かなければならぬと思ふ。幸に今日は民を見ること赤子の如く、民亦其の德に化して親族相助け隣保相扶くると云ふ美風は盛んでありますけれども、將來は唯家族相助け、隣保相扶くるの美風にのみ依賴しては居られぬ時代に到達するであらうと思はれるのであります。即ち時勢の變化は人民の移轉を盛んならしめ、職業の轉換を隨意ならしめ、競爭心を激甚ならしめ、產業組織の革命家と勞働者とをして利害相反するの二階級として對立せしむると云ふことになりますると、從つて情愛が薄くなるのは免かれませぬ。即ち社會の

一般の趨勢と云ふものが、どうしても今日弱者保護の方法を講じなければならぬやうになつて來たのであらうと思はれます。しかし此の世の中が、今日の儘に放任して置いては明日が日にも何うかなると恐れる譯てはございませぬが、幸に識者相集つたならば充分にこれを講究しなければならぬことてあらうと、私に於ては深く思ふのてあります。故に如何なる方法を取つてやつたら宜からうか。政治上からも、大なる金を費すに至らぬまても適當なものを設けたい。もう少し防貧とか濟貧とかに就いて、見るべき施設を作ることが必要てあるならば、これを皷吹したならば成立つものてはなからうか。また地方費などに依るべき途がありはすまいか。幸に斯かる御集りて諸君が之を必要と考へたならば、どう云ふやうに方針を向けて行くか。或はそれは杞憂てあるから此の儘に放任して置いて宜しいと云はれるか。私は老婆心か知れませんが、此の儘放任主義を取つたならば、貧富の懸隔益〻甚しく、其の極や遂に大なる害を來しはせぬかと憂ふるのてございます。誠に忌はしい言辭に及びましたが、其の段は御宥恕を願ひます。畢竟愚案として唯今陳情致しましたのも、斯く〳〵の事を行はうと云ふのてはなく、唯政治上から見ても、經濟上から見ても、はた人道上から見ても、弱者保護の方法を何とか講じなければなるまいと云ふことに就いて、二三の愚見を述べたに過ぎませぬが、此の御集りに於て幸に之を講究して見ようと云ふことに御贊同を得ましたならば、尚に此の上も無い本望てございます。海外の模樣は先刻田中君から申上げましたから、私は本邦に於ける直接問題として、聊か平素考へて居ります所の卑見を茲に申述べた次第てございます。

（明治四十三年四月六日、海外の慈善救濟事業の調査を遂げて歸朝せる田中太郎氏の報告を兼ね日頃本問題に趣味を有する朝野の紳士の意見を聞かん爲め男爵が銀行倶樂部に催したる會合の席上に於て）

一〇二　本邦公債制度の起原

（附）銀行及び取引所創設事情

只今も申上げた通り、私の此の度の旅行は用事て無く、昨年亞米利加へ御一緒に參つた方々から、渡米實業團の集會を名古屋て開くから來ないかとの御話て同地迄集り、夫より山田、吉野、高野、和歌の浦を經て、久しく御當地（大阪）へ來ないから支店の營業の模樣も一寸見たいと存じて來ました所が、昨日岩本君から取引所の樣子

も見て呉れとの御話でありました。私は日本の公債と云ふ者には最初から關係して居たから、日本の公債の起りはどう云ふものであつたか。又將來の覺悟はどうあつたらよいかと云ふ、私の希望を序ながら申上げたいと思つて出た譯で御座います。然し私の御話は惡くすると落語家の致す義太夫好きの家主の如く、自分にばかり愉快で皆樣方は百も御承知、却て御迷惑となるかも知れませんが暫く御清聽を煩はしたいと思ひます。只今濱崎君の御案内で取引所を拜見致しましたが、其の事務の整頓したる事は實に立派なもので、實際見たところでも二千人からの人が一堂の下に集まつて居て公債株券の賣買をやつて居るのは、世の進むと共に、一方に於ては諸君の御盡力が大に顯はれて居るものと思ひまして、國家の爲に悅ばしい次第であります。

公債の必要を知る

日本の財政計畫を完全に立て、公債證書の流通を盛にしたいと云つて立案されたのは故伊藤公爵です。公爵は明治三年に亞米利加へ行かれて、全國の財政狀況に鑑み、我が國にも是非公債政策を實行したいと云つて寄越された。私は其の時に大藏省に居りました。私の公債と云ふ事に考を持つた始は、私が舊幕府の人として民部公子の御供をして佛蘭西へ行きました。一行は二十八人でしたが、慶喜公が政權を返上せられた爲に幕府は大變革があつて、一行の多數は明治元年十月に日本へ歸る事になつたが、私の考では幕府は無くなつても日本が潰れる譯ではない。民部公子も折角出て來られたものであるから、四五年は佛蘭西で學問をさして日本の爲に役に立たしたいと思うた。其の時に金が丁度二萬圓程あつたから、是を如何したらよいかと云ふ事を、當時佛蘭西政府から民部公子に附けて居たコンマンダー、バンソンと云ふ人に相談をした所が、夫は公債證書を買ふに限る。年々四分や五分の利息は呉れる。又賣りたい時はブールスに行けば何時でも賣れると云ふ事であつたから、同人とブールスに行つて公債を買入れた。其の種類は半分が政府公債で半分が鐵道公債であつたと思ひます。夫から暫く經つと、民部公子が水戸家を相續されることになつて日本から迎ひに來たから、最初の計畫を止めて日本に歸られるに付き、自分も歸らなければならん。前に買入れた公債も賣らねばならん。ブールスに行つて丁度買入れてから半年後に賣つた所が、政府公債の方は買入れた時と餘り直段が變らなかつたが、鐵道公債の方は相場が上

つて居て五六百圓儲つた勘定になりました。此の時に、成る程公債と云ふ者は經濟上便利なものであるとの感想を強くしました。私は前後洋行を三度しました。最初が此の時と、次が明治三十五年、其の次が昨年(四十二年)の渡米實業團で、最初の四十四年前の旅行は非常に不便極まるものであつて、其の次はいい加減第三回目の渡米實業團は到る處で非常なる歡迎を受けて光榮ある旅行をしましたが、自分の一身上一番効能のあつた旅は四十四年前の洋行と思ひます。此の時が銀行を起す事とか、公債を發行するとか、外國では役人と商人の懸隔が日本の如くでない、是は何とかしなければならぬと云ふ事に氣が付いた。是は餘程効能のあつた事と思ひます。

始めて公債を發行す

夫から前に戻つて伊藤公の亞米利加から言うて寄越された事に敬服した。亞米利加も南北戰爭の財政困難を救ふ爲に國立銀行制度を起したが日本にも之を起さねばならぬと考へた。其の時には大藏の大輔が今の井上さんで、私は井上さんに就いて職務を執つて居りまして、井上さんに御相談して是非四つの箇條を實行したいと思ひました。其の第一は國立銀行制度を作る事。之と同時に公債を發行する事。――是は福地源一郎氏等を相手に取調をしました。次は明治四年七月十四日廢藩置縣の始末を附ける事。――是は頗る大問題で、此の始末に付いて先づ第一に諸藩が物持から借りてある債務を如何に處分するか。是は天保八年水野越前守が今日限り借用證文に棒を引いて仕舞ふと云ふ例を用ひ、其の以後のものは元金年賦なしくづしとし、其の次のものを利息付の公債としようと云ふ事になつた。それが日本での公債の始りて御座います。これは今迄に有つた借金を形を換へたに過ぎないので、それと同時に士族に對しての祿制を變更したいと云ふ大問題で、井上さんも躊躇されましたが、是非共何とか始末を付けねばならんと云ふので、明治四年に吉田清成と云ふ人を英國へ遣つて外國債を起した。其の前に明治二年に京濱鐵道を作るに付き、オリエンタル、バンクの手を經て倫敦のレエトと云ふ人に百萬磅を借りた。是は借りた方の人は相對借用の積りで居た所が、貸した方の人はさうでない。それから訴訟をして公事は勝つたが、矢張レエトと云ふ人が公債として世間に賣出し、其の中間に入りて幾分の利益を取つた。夫かちが前申した吉田清成と云ふ人の百萬磅の公債で、是が卽ち祿制變更の元資金と

なつたので御座いました。諸藩の借金と引換へたるものを、舊公債新公債の二種にしました。夫から内地の公債は明治十一年に始めて起したが、其の初めには經濟思想が至つて幼稚であつたものだから、こんな書付を貰つて是が金になるかなちぬかを疑つた位でありましたが、次第に價を増して信用も出來て來ましたから是を擴張する事になりました。併し此の頃には井上さんも罷められて民間に居りまして、此の議に與られたのは大久保さんと大隈さんとて御座いました。

銀行及び取引所創設事情

是より先銀行の方はどうなつたかと申しますに、明治五年に第一銀行が出來、横濱には第二大阪に第三、新潟に第四、鹿兒島に第五と云ふ順序に段々銀行も出來、政府も隨分力を添へては呉れましたが、何を申すも其の時に日本は金銀の比價が定まつて居りませんで、總て支那の銀相場に依つて動くと云ふ有樣で、支那人や外國人が此の紙幣を買つて遠慮無しに正貨と引換へに來る。是ではならんと云ふので、遂に紙幣發行を止めると云ふ事になりました。夫から政府の紙幣を以て銀行紙幣と引換へると云ふ議が起り、明治九年には銀行條例の修正が出來まして、夫と同時に有價證券の賣買をするを所立てると云ふ必要が起りました。然るに其の頃司法省に玉乃(世覆)と云ふ人があつてなか〳〵の論客で、取引所にて公債株券の延取引をするのは正當の商賣でないと云ふ議論で、伊藤さんや井上さんは此の論に反對でしたが、何分司法省で聞かんと云ふのであるから如何ともする事が出來ませんで。然るに明治七年頃司法省の御傭で佛蘭西人のボアソナードと云ふ人が來て、玉乃さんは第一番に豫て懸案になつて居る延取引と云ふものに對する同氏の意見を聞かれた所が、ボアソナード氏は少しも差支無いと言ひ、玉乃さんは有らゆる反對議論をして見られたが、遂にボアソナード氏の爲に自說を破られて成る程と感じられ、是まで私は取引所は立てゝも差支無い、玉乃さんはいかんと云ふので數年間に互に議論をして居た事を思ひ出されたと見え其の頃銀行者になつて居る私の所へ來られて、取引所の議論は私の敗てある。大いに惡かつたから今日は詫びに來たと云はれたことがある。それから明治十一年に取引所を設立しても差支無いと云ふ御許可が出て、東京で私が發起人となつて取引所を起し、御當地は慥か五代さんが發起人となつて取引所を起されたと思ひます。私の取引所の關係は種々の原因から暫くにして止めましたが、明治の初年に公債と銀行の起り

と引續いて取引所の起因は、只今申上げた通りて御座います。而して斯かる立派なる起因を持つて居る取引所で、公債とか株券とか云ふ立派なる商品を扱ふ、立派なる地位名望のある可き筈の仲買人の、現時の社會に於ける地位は如何てありますか。御當地の御方には未だ御懇意も少し、決して左様の事はありますまいが、東京の仲買人の中には往々識者の謗を受けるやうな言語行動をした人もある。これは決して商賣の罪ではなくして、從事する人の心掛と行とにより、忌む可きものともなりまた立派なるものともなる。どうぞ皆さん、思想行動を共に進めて行つて、財政上の活動力を益〻敏捷堅實ならしむるやうに願ひたいと思ひます。私はふだんから感じて居りますところと、斯くありたいと思ふことを御遠慮無しに述べました。決して皆様の悪口を申上げるのではありませんから、吳々も其の邊は誤解の無いやうに願ひます。

（明治四十三年四月二十二日、大阪株式仲買有志者の招待會に出席して爲せる演說の大要なりとて『大阪銀行通信錄』に掲載せるものなり）

一〇三　伊藤公と財政經濟

評議員長閣下、臨場の諸君。故伊藤公爵の如き大政治家大偉人の追悼會にして、其の御集りの諸君は最も學者の粹を拔いたと云ふ方々と御見上げ申しますのでございます。而して場所は帝國の學問の本家本元たる此の御殿てある。斯う云ふ場所て一言申述べますのは、學問に緣の無い私共には頗る光榮てございますが、同時に少しく恐縮致す次第てございます。併し先日評議員長から、故公爵閣下の實業方面に付いて緣故の深いものは先づ私てあらうと云ふ、評議員の御議決てあつたから、是非一言を申上げるやうにと云ふことてございましたによつて、欣んて御請を申し、茲に參上致した次第てございます。只今評議員長の御述べの如く、あとにも段々諸大家の種々なる御話がございますやうてありますから、私の實業關係のことは成るべく簡略にして、短い時間に所感を陳べませうと思ひます。

維新當時の伊藤公と大隈伯

私が公爵に御目に掛りました抑〻の始は明治の二年てある。數へますると四十二年目に相成ると云ふ、古い經歷を有つて居りますのてございます。當時御列席の大隈伯爵にも、故伊藤公爵と共に大藏にあらせられて、天下の財敎經濟の任に當られて居りましてございます。私は其の頃靜岡の藩士て居りました爲に、御喚出

しに預つた明治政府の御役人を少しも知らなかつたのてございます。明治二年の十一月頃伯爵又公爵にも御目に掛つたと記憶して居ります。其の時の大藏省の事務は維新匆々の際てあつて、今夕最後に御演說を下さる大隈伯爵が、最も主として其の衝に御當りてあつたやうに存じまする。而して百般の事務いづれの方針に進んて行くがよいか、所謂錯雜極まると云ふ時代てあつたから、其の際伯爵から私は御說得に與つたことは今以て記憶して居りまするので、度々諧謔的の談話として人に話すのてあります。私が靜岡藩士として出て參りまして、新政府の事務に付いて何も知り得ることも無くまた盡すだけの能力も無いから、職務の御免を蒙りたいと云ふことを申出てました時に、大隈伯の御說得の主旨は、『現今の世の中は殆ど混沌てある。維新の制度が立つたと言うて、何も出來上つたことが一つも無いぢやないか。君は祝詞の高天原に神留まると云ふことを知つて居るか。八百萬の神たちが集つて神集ひに集ふことを知つて居るか』。『それは何處かの神主が言つたこともございませう』。『それを覺えて居るなら、今日僕も君も神てはないか。共に國家に盡さうと云ふことを誓へば宜い。靜岡藩がどうだ、他の强藩がどうだと云ふやうな考を有つてはいかぬ。殊に今日の國家の事は吾々がやらなければならぬと云ふ場合だ。そこて志のある人々を集めて神つどひにつどひ、神謀りに謀る所てあつて、靜岡藩だから御免を蒙る抔と、そんな下らぬことを云うてはいかぬ』と云ふ御說諭を受けたことを、昨日今日の如く覺えて居ります。御本人が御出になるから必ず御記憶てありませうが、大隈伯爵は必ず御忘は無からうと思ひます。

伊藤公の亞米利加と改革行の意見

故伊藤公爵にも其の際同時に拜顏を致しまして、是も神樣の御一人て頻りに神謀りに謀りつゝ入らせられたやうてある。而して其の事實に付いて私の能く記憶致しまするのは明治三年の十月てございました。伊藤公爵が言はれるには、此の委ては何分大藏省の事務を十分に發展して行くことが出來ぬから、自分は茲に米國旅行をして充分なる取調をして來る。それに付いては政府に對して海外旅行の必要といふ建議を書く樣にせよと云ふ事て、其の文章は私が起草したのてあるが、――文章てはない願書てございますが、――それは明治三年の十月てある。詰り財政經濟を米國に則つて發達させようと云ふ御意念から起つたのてあつた。

其の旅行に公爵に御隨從した人々は、死なれた福地源一郎、又今の芳川伯爵此の兩氏と吉田次郎氏とであつたと記憶致して居ります。而して公爵が亞米利加に御越になつた後、彼の地の有樣を取調べられて日本に申越された。即ち主としては大隈伯爵、續いて私共に迄通信して、是非其の事を盡力せいと云うて寄越された。種々なる要件があつた樣でございましたが、今記憶致して居ります重要の事は、四つであつたやうに覺えて居ります。當初維新の經費を支辨する爲に財源が無かつたからして、由利公正君の建議によつて、其の時分に太政官札と云ふものを通用して居つた。而して大藏省としては相當なる方法を立てゝ、是非此の太政官札に兌換の制度を立てたいと云ふことが、大隈伯伊藤公爵などの深い御希望であつた、また御期念であつた。これを兌換制度に引直すには、千八百六十年亞米利加に行はれて居る國立銀行制度に依つて其の方法を講ずる外無いと云ふのが一の御意見であつた。而して此の亞米利加に行はれた國立銀行制度及び其の行はれて行く實際の景況を丁寧に取調べて日本へ送られました。之が一の懸案であつた。今一つは公債問題でございました。元來日本では貸借金の證文も甲乙相對で之を秘密にして、貸すと云ふことも公言せぬが、借りると云ふことに至つては、殆ど公衆の前にても言はれると大恥辱と云ふ如くになつて居た。個人の間がさう云ふのであるから國としても其の通りで、國家の借財を償券に依ると云ふことは、殆ど世の中に唱へられぬやうになつて居つた。けれども外國の財政經濟はさう云ふ有樣でないから、是非共に公債の制度を設け、相當なる習慣を付けて之を發達させねば、國家の富を增すと云ふことは決して出來ないやうに思ふ。それに付いて亞米利加の公債の仕組は斯樣である。歐羅巴の振合は斯うなつて居る。是非此の公債の制度を日本に行ふやうにしたいと、之を第二の希望として丁寧なる見込を添へて御申越してございました。

貨幣制度及び官制改革意見

もう一つは貨幣の制度であつた。維新前の日本の貨幣と云ふものは確乎たる方式は無いので、金と銀との差別も本位定位といふ明瞭なる區別は無かつた。但し從來の習慣法でも、金に對して銀を用ひ目方で取ると云ふ樣なことではございませぬ。ございませんけれども海外のそれの如く整然たる極りは無かつた。而して其の初め故伊藤公大隈伯などの御考は、是非金貨制度にしたいと云ふ御意

念てあつた。然るに丁度其の頃英吉利から開店して居つたオリエンタル、バンクと云ふものがあつて、其の支配人にロベルトソンと云ふ人があつた。これは東洋通てあつた。頻りに支那日本の近況にては、金貨制度を以ては完全な通貨たらしむることは出來ないから、矢張銀でやるが宜しいと云ふことを主張された。只今てあつたら大隈伯の如き、學問と言ひ識見と云ひ勝れた御方は馬鹿を言ふなと仰しやるてあらうが、當年に於ては或は仰せなかつたかも知れぬ。或はロベルトソンの說に多少疑を起して居られても、事實金貨が無かつたから金貨制度は困難と思はれた樣てあつた。伊藤公爵も矢張其の間に躊躇逡巡のやうてある。ところが亞米利加の金貨制度を見て酷く欣羨されたと見えて、是非是は金貨制度にしなくてはならぬ。今は躊躇する時機てないから速に相當なる制度を設けて假令金が充分てないにもせよ、制度だけても切めて布くやうにしたいと云ふのが、第三の希望のやうてあつたのてございます。更に一つ申越されたのは、其の時分の諸官省の法制と云ふものは昔の大賓令に依つて定められて、『令義解』と云ふ者は其の時分の官衙を支配する一の金科玉條になつて居つた。即ち大藏省と云ふ名も大賓令から出た名てあつて、今以て其の名に依り居る所から見ると、中々大賓令の力も四十年も傳つて居るは頗る强大てあつたと申して宜しい。併し其の名はあつても、今日は事實が全く歐羅巴式に變つたやうてすが、其の時分の官制は總て『令義解』に依つて居つた樣て、而して出納の方法金銀の出入などと云ふものも、尙且つ令義解然たる取扱てあつたから、是てはいかぬと深く感ぜられて、大藏省の職制事務章程の如きものを是非直さねば、以て其の實際を動かす事は出來ぬ。現在の職制事務取扱の規則が十年昔の有樣て居つては、迚も整然たる事務も取扱ひ得られぬば又簡便なる取運びも出來ない。故に此の官省の制度を直すが宜からうと云ふ、此の四のことが、明治四年の春頃てあつたと思ひまする、詳しう書き送られました。

大藏省に於ては、さなきだに日常用の多い役所が、さう云ふ新らしい問題を而も有力なる故伊藤公爵から言ひ送られまして、何とか解決をせなければならぬと云ふことになつたから、私共手足となつて働く者はいとゞ擂木を尙ほ强く摺合せなければならぬと云ふ次第が生じたやうに覺えて居ります。しかし其の事柄は大隈伯爵が大藏省に御出てあつて、主としては故公爵が伯爵を目當に書き送られた

やうてありましたが、其の後聊か任務が變更致して、明治四年の秋頃からは大隈伯爵は政府に御這入りになつて、大藏卿が故大久保利通公で、大藏大輔が井上、今の老侯爵となつた。故に最初伊藤公爵の書送られた時の人々と相違は致しましたけれども、事柄は是非共に之を行はなければならぬと云ふので、遂に明治五年から續いて五年の間に頻りに其の事を攻究しました。

國立銀行條例の實施

そこで第一に御申越になつた銀行の問題は、明治五年に至つて遂に國立銀行條例が日本に發布相成りました。其の發布になつた原因は、明治三年の故伊藤公爵の發意であつたと云ふことは誠に明かなる事實で、歴史に證明されて居るのでございます。其の後此の銀行の條例を、大隈伯爵が大藏省の事務總裁をなさる頃即ち明治九年に於て大に修正され、其の後又十六年に於て松方侯爵の時代に再び變つて、明治五年から九年頃に成立したる所の銀行が其の條例によつて許可せられてから二十年を經過した後は最早國立銀行として繼續を許さぬ。私立の銀行として繼續を許すやうに相成つて今日に及んで參りました。其の以後の變化又は擴張は茲に申上げ切れませぬが、其の創立の原因は右樣の次第であつたと云ふ事が、第一に伊藤公の實業界に大なる御關係のあつた點と申されるのであります。

公債制度の實施

次に公債のことも前の如く必要を御申越になつて居るので、大隈伯も是非何とか工夫しようと云ふ所に、只今述べました通り御職掌が變りましたが、希望としては同一であつた。故に跡を引承けられた所の井上侯が、此の公債を如何なる手段で世の中に發表して宜からうかと、大藏省に於て種々評議をした所が、恰も好し明治四年の七月十五日であつたと思ひますが、廢藩置縣と云ふ霹靂一聲の大變革が起つた。王政維新は種々なる大激動で、其の中には戰爭も加つたが、此の廢藩置縣と云ふのは御書付一本で、寧ろ王政維新の時の總督宮が押して來たよりも未だ酷い變化を國内に惹起した。後日書物の上にも形の上にも左樣には見えなかつたか知れぬが、殆ど日本の國力を完全に增進し得たと云ふのは此の廢藩置縣の一擧である。若しも明治四年の七月十五日に廢藩置縣の實施無かりせば、日本の國は何時までも神經衰弱半身不隨で居らなければならなかつたと思ひます。斯の如き決斷の行はれたのは、是は公爵も伯爵も、其の他の種々たる元勳方の力でありまして、是は今此處で申上げる迄もございませぬが、それが今の伊藤公爵の御申越に

なつた公債をして世の中に形作らしめる一の導をなした。何となれば、其の時分には前に申す通り、中々貸借と云ふものは親類の間にも知らせぬと云ふ風習でありましたから、例へば外國に如何に結構なことがあると云ふても、おいそれと資本家が貸すなぞは致しませぬ。故に公債が國家の經濟上に良いからと云つて、其の公債を形作らして、さうして世間に習慣を與へ便利を知らしめると云ふ方法が無い。何か思案は無からうかと云ふに、恰も好し、諸藩の其の治下の人民から借金して居つたものを政府が引受けなければならぬと云ふ事になつた。政府は之を引受けても直ぐ樣金を返すことが出來ない。そこで之を公債證書と云ふものにしてやつたならば、言はゞ公債證書の方法を敎諭するのと、借金を年賦で返すのと二つの良い仕方になる。所謂一擧兩得であると云ふ事になつて、大藏省にも其の時分は中々智慧者があつて、遂にさう云ふ案が至極宜からうと云ふので決定した。右の諸藩の借財に付いては相當の區別を要する筈で、往時天保の頃に水野越前守の老中たりし時、『棄損』と云ふ事を布告した。其の年月は覺えませぬが棄損の方法は、總て其の時迄の貸借は幕府に於ては處理せぬといふのであつた。故に此の度の處分も、其の棄損以後維新になるまでの借財は、新政府の直接の貸借でないからして、舊公債と云ふ證書を渡さう。新しく出す公債證書を、舊と云ふ字を付けるのは可笑かつたが、併し新と云ふものがあつたから新に對する舊としたのであつた。また其の新公債と云ふのは如何なるものかと云ふと、是は丁度維新になつてから明治四年まで、卽ち廢藩置縣の實施されるまでの間の借金、之をは公債として年四分の利を付けてやる。其の前のものは五十箇年の年賦で元金だけやる。卽ち新公債舊公債と云ふ制度はそれから起つたのである。これを以て公債の御手本を世の中に布いて見ようと云ふことが井上侯爵の大藏省擔任の時に行はれた、卽ち明治三年の伊藤公の御意念が實施されるやうになつたのである。

貨幣制度の實施

次の貨幣制度も、是も明治五年でございます。是非速に眞正なる金貨制度に致さうと云ふので、それから貨幣條例と云ふものを作つて、此の條例に貨幣に關する細い理由を書いた。條例にあれ位丁寧に講釋の付いたものは殆ど千古無いと申しても宜い位であつた。各種の貨幣は皆雛形を付けてさうして其の條例を出した。故に金貨制度と云ふものは、其の時には兎に角完全であつた。但し事實金が

無いものですから、制度は整然としたが實際は矢張一圓銀を以て通用した。所謂銀貨國たらざることを得なかつた。これはまだ實體が其處まで進んで來なかつたのである。決して原案者若くは之を施行した人の罪とは申さんで宜からうと思ふのでございます。

官制制度の改革

更に一つ申上げました官制の制度である。蓋し官制と云ふものに付いては、他の官省までも速に其の時實施されたか、若くは、あとになつたか、其の邊は記憶致しませぬ。併し大藏省に於ては、伊藤公爵の建議が如何にも然りと云ふので、諸寮司の章程を而も明治四年の八九月頃、つかり直しました。其の之を直すに付いては中々面倒であつた。各寮司の人々と引合して、それでは此方が差支へるとか、是ては、彼方の權利が縮むとか云ふやうな、今日でも隨分御役所にある例でせうが、私は久しくさう云ふことに關しませぬから知りませぬが、當時の議論は今日よりも未だ一層强かつた。而して之に加ふるに腕力を以てすると云ふやうなことまであつた。殊に傳票の仕組などに付いては、一體傳票とはどう云ふのであるか、之を說明する人にも半分は分らぬ。聽く方では尙ほ分らぬと云ふ樣な有樣でしたから、良いとは知つても、之を拵へ且つ之を實施すると云ふには餘程骨が折れましてございます。是は明治四年の九月頃で、――公爵が彼の副使として歐羅巴に御發途になつたのが十一月頃であつたと思ひますから、其の發途前に是非此の事を取極めて仕舞ひたいと言うたことを記憶して居ります。其の年の春若くは五月頃に建議されたものを、半年以內に之を實施せしむると云ふことは、其の局に當つて居る井上さんが極く性急な事をするのを御好きな人であつた。又是に隨從した者も疎忽であつたか知らぬが、世間では此の改正は尙ほ早からうと云ふやうなことを言つて居つた。――之が私の伊藤公に隨從して居つた時代に於て、伊藤公が實業界に對する改新の端緒を御開きなすつたと云つて宜からうと、深く其の功德を肝銘し居る次第でございます。

伊藤公と實業界

續いて私は明治六年に官途を去りまして今の位置に移りましたから、全く身分の變りましたものと相成りましたけれども、引續いて御懇意は御願して居りました。又經濟上の事柄は、官と民との差別無く始終關係することでございますので、例へば明治九年に華族の方々が鐵道を奧州に架けたいと云ふことを頻りに相談

して居られましたが、其の時の大名華族の人々でも、青森までの鐵道建設と云ふことは迚も出來得ぬと云ふことからして、遂に京濱間の鐵道を華族が買はれたら宜からうと云ふ議があつた。是等は伊藤公爵が是非それをやらせて見ようと云ふので、遂に其の議が成立つて、私が其の周旋人で、二十三人ばかりの華族の組合で京濱の鐵道を、伊藤工部卿と契約して七箇年賦で賣買の約束をしたなどと云ふこともございます。また前に申した銀行の事に付いても、斯く修正したいとか、之を斯う云ふやうにとか、種々御話致したことも少からぬやうに思ひます。或る場合には會社の事業に付きまして殊に公爵に御力を添へて戴き、また或る時には種々なる調停の勞を御執り下すつたなどと云ふこともあつて、決して淺からぬ御心配を掛けたやうに記憶して居ります。私の從事する事柄と、公爵の御執りなさることとは全く違ひまするところからして、前に申上げました時の如く屢〻說を相交へ敎を受けると云ふことは少かつたかも知れませんけれども、實業界に深く御心を寄せられて、引續いて始終經濟財政に御力を添へて下すつたと云ふことは、申上げ盡し得られぬと思つて居るのでございます。殊更最終に韓國の事を御配意なされ、

米國旅行中に聞きたる公の兇變

統監として御任じなすつたので、丁度私が第一銀行の主任者として、韓國に對しての關係を深く持つて居りましたから、是等の事に付いては別して篤に御指導も受け、また御心配も蒙つた、御幇助にも預つた、と申さなければならぬのでございます。統監を御辭任なすつた後までも、其の事に付いては常に御話を申上げて、御心添も願うた次第でございます。

想ひますと、昨年私は亞米利加旅行を致しましたに付いて、出立の前故公爵は韓國の太子を御同行なされて北海道へ御旅行の場合であつた。私の旅行も迫りましたから、御歸りの上で立つ譯にゆかぬので、一日官邸に罷出でて御暇乞を致したのを記憶致して居ります。やがて歸りて御目に懸らうと云ふのが、思ひきや永訣に相成つたと云ふことは、實に殘り惜しいのでございます。私は亞米利加に於て、十月二十六日ボストン地方の旅行を終りて、ウィスターと云ふ所に參りまして其の凶變を承りまして實に驚愕致した。初めは決して事實でなからう。さう云ふことのある筈は無いと申して、頻りに他人に向つて虛傳なることを申張つて居りました。再度三度の來電がどうも虛傳でないやうである。遂に紐育に電報を掛け

て華盛頓に電報を掛けて確報を聞きますと、それが事實であると云ふので、如何にも殘念千萬なことだと存じ、丁度其の日はスプリングヒルドで宴會に出まする約束であつたけれども、一同斯かる場合には宴會を避けて遠慮致したが宜からうと云ふので、其のストリングヒルドの宴會を俄かに申譯をして斷りました。それ等は海外の人々も、成る程日本人は情に深い人民であると、折角の用意が無用になつたにも拘らず、寧ろ吾々の其の日の宴會を謝絕したのを賞讃すると云ふ譯でございました。又費府に參る頃までも、到る處に國の凶變を慰問され追悼されるので、歡迎の言葉は追悼の言葉と併せて述べられて、それに對して各所に答辯を申述べたと云ふやうな次第でございました。其の時の事を今思ひ出しても、ウィスターの汽車の中で、午前七時頃に新聞記者が參つて頻りに問答を致して、さて愈〻事實であつたかと云ふことを確めたのを思出しても、眞に涙に咽ぶやうな心持が致すのでございます。

公に受けたる訓戒

私は公爵に久しく御親みを致しました爲に屢〻御接遇して、或る場合には訓戒を受け又或る場合には議論もしたこともございますが、常に此の微力者を愛すると云ふ御誠意で、能く吾々に親切なる誘導をして下されたやうに思ひます。殊に記憶して居りますのは或る事業に付いて、他に向つて自ら不滿といふやうな意味を以て私が公爵に御話をした場合に、懇々と言はるゝに、兎角日本の商賣人が事業に關して或は誹謗或は嫉妬と云ふやうな心を以て、己を立てゝ人を捨てると云ふ風習が多い。君などは歐羅巴風の學問は爲されぬけれども、相當なる漢學も修めた人だから、成るたけ品格を良くしたいではないか。努めてさうありたいと思ふ。君にして自分を立つるには、先づ人を誹ると云ふやうになるは甚だ面白くないから、是非さう云ふ風習は御互に止めるやうにしなければならぬと云うて、懇切に教訓的御談話を受けたことを覺えて居ります。今日に於て勘考して見ても成る程左樣である。己を褒めるには先づ人を誹るが世の中の常である。兎角に人はさう走り易いが、伊藤公爵が斯う言うて下さつたは、自身がさうなさるからであらう。他を誹つて己を是とすると云ふことは、殆ど人の惡德である。此の惡德を戒めた言葉は實に金玉と聽かねばならぬと思つて、私は深く其の事を敬服して、今も忘ることの出來ぬのでございます。

公の恩人

私は明治政府の元勳の方々のなさり方を見ますると深く敬服して居ります。例へば大隈伯の如き、御自分が斯うといふ意見も御立てなすつたことが、其の通り自分の手に屹度成るものではない。今申上ぐる如く、例へば公債證書の事は、伊藤公爵の建議が井上さんに依つて成り、銀行の事が後日松方侯爵に依つて就ると云ふことがございましても、――御自身の宜いと思つた事は他人の手によつて成就しても、元勳の方々は皆共に喜んで我が手に成つたと同様に思つて居ると云ふ事は、即ち明治の政治が今日ある所以てある。此の先輩者が斯く公德に富んて居るから今日の隆盛あることてあらうと、深く敬慕するのてございます。而して其の敬慕すべき事柄が最も伊藤公爵には多かつた。故公爵の御德は、今も尙ほ實に心に銘して慕はしく思ふのてございます。又事に當つて實に勉强された御方と深く感心します。曾て私が何か書いて下されませと云うて、書いて下さつた掛物が尙ほ存して居ります。其の文字が多分斯うてあつたと思ひます。『膽以主之識以補之强力以濟之』斯う云ふ文字てあつた。私を戒める積りて書かれたのてもなかつたやうてあつたが、何かの場合其處に筆があつて『一枚書いて下さらぬか』『宜しく』と云ふのて書かれましたのて『爲澁澤道兄書』と書いてあります。私は之に由りて行へと云ふ意味と思つて頂戴して、自分は常に修養して居りますが、公爵其の人が即ち膽以て之を主り、識以て之を補ひ、强力以て之を濟した御方と申して宜からうと考へるのてございます。

追悼の詩

前に申す通り、私は生憎と斯かる兇變の場合に日本に居りませぬから、御列席の諸君よりは何やらん尙ほ殘り多いやうな感じが致して居りますのてす。十二月十七日日本に歸りまして其の當時の事を聽き、其の有樣を伺うて深く歎いて居りました。翌月即ち一月二十六日御墓前に參拜しまして、前年の八月の初に御別れ申したことを思ひ出して、暗涙を催したのてございます。其の時の詩作てございますけれども故公爵を哭する一絕を得てありまするて、茲に御披露しまするが、亞米利加て兇變を聞きましたので、斯う云ふ詩を作りましたのてございます。

異域先驚凶報傳　靈壇今日涙潸然
溫容在目恍如夢　花落水流四十年

丁度四十年の長い歲月厚い御懇親を受けまして、始終指揮誘導の下に奔走した

ものが、今は此の追悼會に於て實業界に關する愚見を陳述するの場合に至つたのは、實に追懷に堪へぬのてございます。茲に私は故公爵に關係して居りました事柄の一端を申述べて諸君の清聽を煩はした次第てございます。

（明治四十三年五月十九日、東京帝國大學集會所に於て開會せる國家學會の故伊藤公爵追悼會席上に於て）

一〇四　朝鮮に於ける我が銀行發展の徑路

大藏大臣閣下、臨場の閣下諸君。今夕は第一銀行て從來負うて居りました重荷を卸しましたに付きまして、其の重荷を負うに至らしめて下された所の諸君、及び又負うた重荷を經營致して居る間に種々御幇助下され引續いて其の重荷を卸し得られるに就いて御高配を下された諸君に對しまして、茲に小宴を開いて尊臨を乞ひました次第てございます。幸に大藏大臣閣下其の他諸君の尊臨を得ましたのは、第一銀行として光榮此の上もございませぬ。唯憾むらくは此の席に故伊藤公爵を迎へることの出來ませぬのを、千載の遺憾と致す次第てございます。のみならず前統監及び現正副統監の臨場を缺きましたのも、私共深く殘念に存じます。幸に大藏大臣閣下其の他諸公の斯く打揃うて御臨場を得ましたことを、行員一同に代りまして深く御禮を申上げます。

第一銀行韓國支店開始の由來

今申上げました第一銀行の重荷は、若しも德川家康の遺訓の如く急ぐ可らずと云ふ主義を以て負うて參りましたならば、或は遠き途が歩し得られたのかも知れませぬ。故に堪へ能はぬから卸したとは申上げませんけれども、時勢の必要時代の要求から負ふべきものてなからう、卸すが宜からうといふことに覺悟致しまして、遂に韓國に對する行務は極めて僅かの部分を殘して、總ての任務を他の肩に替へますやうに致しました次第は、既に臨場の諸君の皆御熟知のことてございますから、喋々此處て繰返すのは誠に無用の事と存じまするけれども、併し明治十一年以來彼の國に對して努力を致しました其の最終てございますから、茲に聊か冗長の辯を費して清聽を煩はしたうございます。

元來第一銀行が韓國に事業を開きましたのは今日から考へますと、何か先見てもあつたやうに、或は無理に强辯し得られるかも知れませぬけれども、私の不敏又

行員の不束、決して明治十一年頃に左様に遠大の考を持つた譯てはございませぬ。唯其の時分の銀行の經營は一向筋道が分りませぬので、バンクと云ふ文字が腰を掛けるものてあつたか、金を取扱ふものてあつたか、能く分らぬ位の時代てございましたからして、明治十年に私は大藏省から命ぜられて、第一銀行の名を以て支那に金貸に參つたことがございます。其の頃支那の壯部に於て左曾棠と云ふ人が、大分勢力を振うて居る時分に、其の部下に金順と云ふ將軍がありまして、其の人が支那の陝西甘肅二省の征伐に就いて金が要ると云ふことから日本に借りに參つた。其の時分は私も、今ては或る場合にはさうてありますが、若い時分てすから一層突飛てあつた。當時の大藏卿たりし大隈伯も突飛。突飛が寄合つて遂に支那に向つて金貸に行くと云ふ事になつた。それは誠に一場の滑稽談に終つたことてございましたが、參りましたのは益田孝、其の時の銀行局長岩崎小次郎、福原和勝などといふ人が相連立つて行きました。始めて支那朝鮮に銀行の手を延したいと云ふ觀念が起りました。それが抑〻朝鮮に支店を開くの原因てあつたのてございます。是まてそんな事を喋々しく申述べることは差控へて居りましたが、源を質せばさう云ふ譯て、續いて支那にも支店を開くと云ふ考を持つて居りましたが、支那には手が延びなかつたかと申しますと、——それは斯う云ふ理由てあります。其の頃日本に御雇となつて居りました、後に倫敦のバースバンクの支配人になりましたシャンドと云ふ人が、内地一般の人を得意にする銀行と、海外の爲替事業を主とする銀行とは、英吉利ては全く兼務することは出來ぬ。第一銀行はどれを主義とする積りてあるか。其の目的を明かにせぬと、大なる間違を惹起すといふことを八釜しく言はれました。私は『固より内地の金融を專ら開かうと思ふのだ。續いて海外の金融も十分誘導しようと考へる』と答へると、シャンド氏は『いやそれはいかぬ。さう思ふのが素人の考てあるけれども、英吉利のエキスチェンジ銀行と、それから内地を主とする銀行とは劃然と區別がある。法律ては禁じてないけれども一緒には出來ぬ』というて、其の時に紙數三四十枚もありましたらうか、——翻譯したら一冊の書物になる位の理由を認めたる書面を寄せられた。それは十一年の春てございましたか秋てございましたか、何ても十年の戰爭が過ぎた後てございます。そこて朝鮮には支店を出しましたけれども、支那に向つては手を伸ばす

といふことを遣らなかつた。さらば朝鮮も止めるかというて見ましたけれども、朝鮮へ支店を出しますときに、内務省と大藏省とに御願申して、何でも三萬圓であつたか五萬圓であつたか、確か五萬圓と思ひます。五箇年賦六分位の利息で拜借するといふ特典を得た。其の特典に依つて、折角出した支店だから先づ五年の間は繼續して見ようと云ふので維持したのであります。それであるから朝鮮へ支店を出したと云ふ源を質すと、左樣に意氣地の無いことである。それを以て、今喋喋と先見の明のあつた如く法螺を吹くのは怪しからぬと仰しやられるかも知れませぬが、併し是は明治維新の初めを回想すると、正面に御著席の總理大臣閣下と雖も或はさう云ふことが無いとは言はれませぬ。獨り私ばかりさう卑下する限りでないかも知れませぬ。甚だ冗辯に亘りますが、朝鮮へ支店を出したのは左樣な譯で、幸に海外に手を著けたのであるから、俄に止めるでもなからうと言ふからして、僅に持續して參りましたのでございます。

開業後の事業

しかし既に支店を出しました以上は、朝鮮位はシャンドの持論に背く譯でもなかちうから持續しよう。持續するには朝鮮に對して何か工夫もがなと、種々心配を致しました末に、十七年に至つて幸に朝鮮の海關稅を取扱ふことを一手に任せられるといふことになりました。それが朝鮮に對して第一銀行の手を伸ばし得る端緒でございました。其の初は釜山京城だけでございましたけれども、引續いて仁川、元山、それから鎭南浦、平壤に手を伸ばすやうに相成りましたが、さて二十五六年までは唯僅に關稅を取扱ふだけで、些細の貿易の媒介者になつて、金融機關といふのも御恥かしい位の仕事を致して來たのであります。明治二十四五年頃に於ては、如何にしたものであらうか。寧ろ面倒だから止めたら宜からうなどといふ說もあつた位で、然るに二十七年の日淸の戰爭が大に朝鮮に影響を與へました。朝鮮の諸事業がそろ〳〵伸びて參り、引續いて銀行事務にも影響を致して參りました。其の後二十八年、九年、三十年と追々に銀行事務ばかりでなしに、社會上の事柄も種々なる關係を生じて來まするし又銀行業務も從つて伸びて參る。普通の事務の伸びるのみならず、政治關係の仕事に多少手を出さねばならぬやうに相成りましたのであります。朝鮮の政府に對して、相當の機會があつたら貸金でも致して、幾らか手足の伸びるやうにと云ふことは、戰爭の前後から少し思うて居りま

したのですが、漸く二十七年に井上老侯爵が公使で御出での時、始めて此の朝鮮政府に金を貸して遣つたら宜からうといふことで、公使が中へ這入つて要求された。二十五萬圓でありましたか三十萬圓でありましたか金融を致さねばならぬやうなことが生じて參りました。右樣少し手の伸び掛つて參りました所に、二十八年の變からして、却て政治上の關係が後戻りをすると云ふやうなことになり、折角伸びようとしたのが、果して順好く進んで參るや否や期し難いといふやうなことでございました。併し其の頃に京仁鐵道を日本人の手に經營したい。亞米利加人の手に渡つたのは殘念であると申して、私は銀行外の方面から頻りに相談に與らねばならぬ場合も生じて參り、追々に其の事が進んで來るに從つて、銀行の望みも見えて來ましたに依つて、私は始めて朝鮮に參りましたのは、三十一年の四月でございました。

計畫屋組織す

參つて見ますると、銀行事業も僅かに維持して居りましたけれども、折角二十七年の大戰爭の後が露韓銀行が出來る。京仁鐵道もまた米國人の手にあるといふやうな有樣で、私は行つて見ましても或る場合には實に殘念だと感ずるやうな事もあつたのであります。幸に其の露韓銀行も稍中止の姿であつて、日本も唯手を縮めて仕舞はんならぬといふことでございませなんだけれども、三十一年に參りました頃には、行末どうなるといふ疑を持ちつゝあつたのであります。併し前に申上げました京仁鐵道は、幸に米人モールスから日本人の手に引繼ぐことになつて、其の鐵道が未だ亞米利加が人の手で工事中に、私は參りましたのであります。元來國際上の關係から考へましても又民間の經濟上から見ましても、所謂一葦帶水の對岸にある韓國を、斯かる有樣に置くのは如何にも殘念である。到底何時迄も此の儘置き兼ねるものであるといふ樣な念慮が益〻強くなりましたに就いて、遂に京仁鐵道に止めず、京釜鐵道も是非共日本人の手によつて創設したい。どうか今日の場合は行けるだけ擴めて行きたいと、微力ながらも實に腦力を費し、力のあるだけは盡した積りでございます。其の頃から段々と我が政府に於ても朝鮮に對する經濟上に深く心を注がれて、三十三年の秋でございましたか、金融上第一銀行をして韓國政府と一種の契約を結ぶことを、内々命ぜられるやうな運びに至りました。將に其の計畫が成らんとすると、大に其の事が蹉跌して、俄に又そんなこ

とをしては相成らぬといふことに變化した。此の變化に就いては、今日では誰でも御笑ひなさる位の談話であるが、其の時は大變賢い人が、笑ひどころではない、眞に顏を顰めたのである。――事物の推移といふことは驚くべきものである。偖右樣色々に心配を致して、韓國の當局者と約束まで濟したのであるから、實は第一銀行としては穴へでも這入りたいやうな感が致した。折角手を著け掛けたことも、是非無く止めることになつたのである。現に二十七八年頃からして苦心經營して、大に手を伸ばさうと云ふ場合に至つたときに、そんな事をしたら大變だといふので、止めねばならぬやうになつたのですから、據無く其の事は止めることにしましたが、朝鮮人ばかりなら未だ宜しうございますけれども、其の當局者といふのは英吉利人のブラオン氏である。此の間に立つた第一銀行の困難は實に名狀し難いのであつた。故に其の年の冬、再び私は朝鮮に參りまして、今度は官に關係せぬ一の方法を案出して、朝鮮政府と第一銀行との間に於て一の金融を圖ることを考へまして、彼のブラオン氏と色々相談を致しまして折角それが稍緒に就きまするとと、朝鮮政府の官吏の間に猜疑心が生じて、種々なる故障を入れた爲に、折角假契約をしたことも又破れてしまつた。

逐に中央金融機關となる

官に御賴りしたいことも思ふやうに行かず、又御勸めに預つて力を入れようと思うたことも、政治上の關係から行はれませず、さらば唯單に自己の力を以て經營する積りにて一の方法を編みましたのも是も其の事が遂げませぬから、餘儀無く三十四年に至りて、今度は銀行だけの力て一覽拂の手形を發行してそれを以て融通を稗補して、大に朝鮮の發達に資するといふことに致しました。其の年に大藏省の許可を得て銀行券を發行したのであります。併し是は、內に於ては大藏省の許可を得ましたけれども、朝鮮政府の方から承認を得ませぬ爲に、發行の後二度ばかり急激なる取付に遇ひました。しかし其の金額は澤山出して居りませぬから、手配さへ屆けば何たる心配もございませぬが、何さま常に正金を朝鮮に備へて居る譯てはございませぬから、すは、と云ふ問に合せる爲には、大に途胸を突くといふこともあつたのてございます。運送の間に合ふや否やと云ふ心配から、此の席の一隅に居ります尾高次郎などは、當時仁川の支店長であつて其の時に白髮になつたやうてあります。右樣な事もございましたが、段々と時を經て其の中に三十七

年の大戰爭があり、引續いて三十八年に目賀田君が財政顧問となつて行かれて、茲に始めて朝鮮の眞正なる中央の金融機關となり得たかと思うたのでございます。

第一銀行支店引繼の次第

併し私が斯う申しますと、折角大藏大臣の尊臨を乞うて愚痴でも申上げるやうに御聽取下さると甚だ本旨に背きますけれども、實は私は我儘の性質で、政府の命令に依つて仕事の經營をするといふは好まぬ方で、微力ながらも自分だけで遣りたいといふのが希望でございますから、第一銀行が其の組織を更めて中央銀行の位置に立つといふことは、或は恐る後日又法制上の必要から直に變ることがあるかも知れぬ。若しさういふ時に、否の應のといふことは甚だ見苦しい。私は智恵も無し、さう云ふことも豫知することは出來もせず頗る困るからして、此の事は御免を蒙つたが宜くはないかと、丁度三十七年には、私は大病後僅に出勤して其の事を聽きて餘程躊躇したのであります。併し窃かに伺ひますと、目賀田財政顧問の御考として、成るべく速かに朝鮮の財政を釐革しなければならぬ。第一に貨幣の整理、第二に國庫金の取扱と、斯う云ふ御方針から手を著けて行くには、是から拵へるものでは間に合はない。どうか有るものを利用して遣らせる方が宜いから、是非第一銀行に之を任ずるといふのが一番宜からう、といふ御思案であると伺つて見ると、朝鮮の財政改革には誠に御尤千萬なる方法と深く其の政策に敬服をしたので、それで自分が病氣後に其の事を承つて、第一銀行としては御免を蒙りたいとか、或は斯うなつてはいかぬから斯樣にして欲しいものといふやうな我儘のことは一切申さぬが宜い。唯國家の御爲に服從するといふ心が無くてはならぬぞ、と云ふことを申したのであります。右樣の精神で引受けた中央銀行事務であるから、其の後の引繼にも、第一銀行は彼此と我儘は申しませぬ。但し第一銀行は自己の利益を度外に致した譯ではありませぬ。相當なる希望は申しましたけれども、本旨としては朝鮮の金融機關たること、朝融の財政に對して多少の貢献を爲し得れば足れりといふことを主としたのであります。それが丁度三十八年御用を仰付けられる時の大主眼でございました。併し其の時には直ぐ二年三年にとは思ひませんでした。越えて四十年の確か八月と覺えて居ります。故伊藤公爵から、時代の必要上、折角骨を折つてしたことだが、銀行制度を別に設立しなければなるまいと思ふといふ御話を承りました。私は一言で御請を致しました。いか

にも御尤、さういふ御沙汰であれば決して異存は申しませぬ。必ず都合好く終局するやうに致す積りでございます。しかし第一銀行としては自己の利益を思はぬ譯には參りませぬから、それに就いては宜しく御諒恕の程を願ひたい。決して其の事柄に對して情無いとか、一年しか經ちませぬとか云ふやうな、愚痴は申しませぬと御答を致しました。それから其の引繼方法に就いて種々協議を致したので、遂に四十二年十一月に至つて、今申上げました重荷が全く第一銀行の肩から下りて、幸に其の移した人は、其の性質こそ他人でございますけれども、申さば私共從來仕立てた親戚と申しても宜い。――決して切つても切れぬ間柄の者が後任に直るやうに至りました。而して其の銀行の將來を考へますると頗る有望である。次第に進みつゝ行くやうに思ひます。

將來に對して希望を述ぶ

翻つて第一銀行を見ますると、外國に一種の支店を持たんでも、必ずしも其の目的は遂げ得られぬことも無からうやうに思ひますれば、即ち前々申します通り假令負ひ遂げる重荷かも知れませんけれども、移して他人の肩に乘せ、これが滿足に負ひ得るやうになつたならば、最初の期念は十分に遂げ得らるゝことゝ思ふのでございます。――斯う考へて靜に其の初を追想致しますると、實に偶然なる些細な水が遂に大河を成したやうな心持が致しまして、茲に小宴を開いて御禮を申上げまするのも、殆ど三十年以上の歳月を回顧するやうで、大いに心懷しう考へるのでございます。畢竟斯樣に都合好く少しも面倒無く、殊に其の事業が自分等と至つて懇親を厚うする人の手に引繼いで、彌增に繁昌して行くとしますれば、其の初め偶然の企業が斯樣にまで擴大致したのは、其の間に扶掖誘導を蒙りました諸君の御力に因ることゝ深く感謝せざるを得ませぬのでございます。此の食卓の上にあります一小卷物は、我が攻府から賜りました賞狀と、韓國政府から受けました感謝狀も皆收めてございます。聊か謝意を表すると同時に紀念として御覽に供へますのは、頗る滿足致す所でございます。成る程これで萬事結了したと御承知を乞ひたい爲に、茲に小宴を開いて一言の謝辭を呈ました次第でございます。蘇東坡の文章に『知者事を始め能者述ぶ、一人にして成るに非ざるなり』といふことがあります。第一銀行は敢て知者ではありませぬが、此の後を承繼します者は、能者となつて十分に述べ得るであらうと思ひます。承繼者たる銀行に對しても、列席の

諸君は前以て我々の銀行と同樣に御幇助下さるてあらうと思ひます。斯く申し上げますと、未だ自己の銀行のやうに思つて居るかといふ御疑があるかも知れませんが、上來陳述しました心を以て重荷を負はした韓國銀行でございますから、完全に發達せらるゝことを深く希望します故に、己の事を感謝すると同時に、韓國銀行の人は今夕は居りませんけれども、同樣に御幇助あらんことを希望致します。茲に來賓諸公の御健康を祝します。（明治四十三年六月十七日、帝國ホテルに於ける第一銀行晩餐會に於て）

一〇五　東洋生命保險會社の革新と保險事業の回顧

只今取締役監査役の選擧も終りましたから、臨時總會の要務は相濟んだと申して宜からうと思ひますが、私はこの生命保險といふ事に付いては、何等實驗も無ければ學問も無く、隨つて此の席に於て重役諸氏に對し、本事業の經營上斯々の注意が必要であるというて精しく申上げる事も心得ませぬ。併し保險といふ事業に就いて、絶えて、考慮を拂はなかつた者でもない。昔物語ばかりを申すやうてすが、

余が明治初年實業界に對する期念

我が國に創めて海上保險の事業を成立たせたことに付いては、私も大に與つて力ありと申して宜からうと思ひます。本年四月「東京海上保險會社の總會に出席して、其の昔物語を株主の前て致したことがございます。それはなぜならば、私は昨年限りに同社の重役を辭退致しまして、私の爲には其の最後の總會でありますから、株主と御別れの意にて一場の御話を致したことてすが、此の話の順序として、明治初年の頃に於ける會社組織の事を前提に述ぶる必要があります。

私は明治の初から此の世の中の實業を規則的に進めて行かねば、どうしても眞正の發達を期待し得られぬと思うたのてあります。源平時代の戰爭の如く一騎打の勝負、所謂一の谷て熊谷直實が敦盛を討つたり或は猪股金平六が平盛俊を討つたりするやうに拔駈の功名のみを心掛けるのは、まだ軍の訓練が規則的に出來て居らぬからの事て、とても整々堂々たる軍隊に對抗することは出來ぬと同樣、實業界の位置を高めるも歐羅巴式の學理的經營に據らねば迚もいけない。それには商工業に從事する人に相當の人才を得なければならぬが、其の人才なるものも唯特志だとか、義俠だとか、献身的だとかいふだけては遠大の事業が出來るものて

はない。要するに從事する人に科學的智識が無ければならぬ。此の種の人材を得んとするには、之に酬ゆる俸給が無くてはならぬが、其の頃の有樣であるから、個人的小仕掛の經濟を以てしては決して多分の報酬を遣ることは出來ぬ。就いては五十萬圓とか百萬圓とか、少くも三十萬圓の資金を集めて一會社を組織するにあらざれば、事務員に百圓若くは百五十圓といふ月給を遣ることは出來ない。尤も其の時分の金銀は今よりは價値がありましたから、立派な人でも月に五十圓も遣れば、今の百圓、百五十圓にも優つて大層な給料と思うた。一例を申せば、當時私が第一銀行から受けた月給は五十圓でありました。但し月給の外に賞與金といふものもあつたけれども、其の他に何か役德があつたかと云ふと、決してそんなものは受けたことは無い。資本金二百五十萬圓の銀行ですら尙ほそんな鹽梅であつたのです。それ故に小さい仕組で人才を求めるといふことは到底出來ぬ。人才を得ざれば、歐羅巴式の實業を日本に移すことは叶はぬ。これが叶はぬ時はいつ迄も日本の實業は一騎打拔駈的のやりかたであるであらう。就いては是非とも會社組織を唱道せねばならぬと深く考へた。今の第一銀行なども其の主義に依つて設立したものです。

海上保險會社成立の次第

そこで將來を種々と考へて見ると、商賣も必要である、工業も肝腎である。道路を造るにしても家を造るにしても同じことで、例へば市街を以て論ずると、先づ大動脈を引いて、水道とか下水とかいふものが追々に出來なければならぬ。抑〻商賣の大動脈は何であるかといふと、どうしても銀行であると言はねばならぬ。そこで己が不敏ながら銀行を遣つて見ようといふ覺悟を定めた。しからば銀行ばかりで總ての事物が進行するかといふと、其の外に於て運輸といふことが必要である。運輸は水陸共に開かねばならぬ。陸には蒸氣車、海には蒸氣船、此の二つが無ければ貨物の疏通を辨ずることは出來ない。廉く且つ早く運ぶことが出來ない。迚も俄に歐羅巴と匹敵するまでに行かんでも、假令後れ居るにもせよ、運輸が無ければ似寄つた經營すら望み得られまい。故に大動脈として是非陸海の運輸に力を入れざるを得ぬ。運輸に力を入れるとすると其の次に何が要るかと云ふに、海運に對してはどうしても海上保險が必要である。通商貿易を安全ならしむるには、海上保險業は缺くべからざる機關である。歐羅巴の保險業の盛大なるはそれ

から起つて居る。是非此の保險を遣りたいものである。然るに運輸は民間の力ばかりては完全の事は出來ぬ。これに就いては政府の保護を請はねばならぬが、保險とても草創の時代に於ては、歐米各國共政府が多少の被助を與へた例がある。故に私は頻りに其の事を時の大藏卿たる大隈伯に話した。折柄故岩崎彌太郎君と同伯邸の食堂で遇柄たから、又も保險會社を設立したいと申しましたら、岩崎君は未だ早いと云うて席上各〻意見を言ひ合うた。尙早論と急施說と互に相爭うた――といふ程ではなかつたが大隈伯は之を判斷して、『早いか知らんけれども遣れる機會があつたら遣つたら宜いぢやないか。何か機會があるのか』と云はれますから、私は『華族の人々が曩に京濱鐵道の拂下を政府より許可せられたが、都合あつて中止となつて其の資金があるから、それを保險事業に振替へたいと思ふ。併し此の事業は華族ばかりてはいけない。海運を經營する人が力を入れなくては困る。それで岩崎君を勸め、銀行者も這入り、商賣人も勸誘したら宜からう。約言すれば金利の多きことを望む資本家だけては六ヶ敷いが、幸に華族の資金などを加へたら大に事業進步の階梯を爲しはせまいかと思ふから、斯ういふ說を述べるのだ』と申しました所が、『成る程それは耳寄りの話だ。それでは岩崎君も考へて返事をし給へ』といふことで別れました。其の翌日岩崎君は、是も故人となつた小野義眞といふ人を寄越して、能く考へて見ると尤だから、相當なる資金は三菱て引受けようといふ樣なことて、遂に彼の海上保險會社が出來たのだが、誰か經營者が無くてはいかぬといふ所から、益田克德といふ人を私が薦めて專任者とした。益田氏が果して海上保險事業を發達させたとまては申されないけれども、兎に角事業の創始者といふことてあつた爲に、英吉利へも參りましたし亞米利加へも參りました。隨分苦心經營を致したけれども、不幸にして其の事業が十分鞏固の域に至らぬ間に彼の人は物故しまして、本人の爲には氣の毒千萬てあつたのです。

經營者と事業の盛衰

爾來の經營は取締役としては末延莊田などといふ人が當りまして、私も暫くの間取締役の一人に加はつて居りました。併し實務を取扱ふ人は各務謙吉といふ人て、其の頃英吉利て三年程保險事業の稽古をした。此の人が保險のアンダーライターとしては實に適當の人て、一寸英吉利式の人て御世辭も言はない。惡く言ふと少しく强情の人だけれども、保險の引受方が如何にも上手て殆ど技術的てあ

る。此の船は此の程度で保險しなければならぬ。此の船はどういふ種類に置かなければ安全でない。太西洋廻りの船は斯うしたい。太平洋廻りの船はあゝしたい。どういふ貨物に對しては斯くありたいと、誠に其の判斷が宜い。丁度銀行の支配人だの保險のアンダーライターといふ者は、鐵道のポイントメン若くは鋼鐵會社の火色を見る人の如く一の技術者のやうなもので、手心と目分量で人の眞似ることの出來ぬ技倆がある。保險のアンダーライターと銀行の支配人とを同じ樣に見るは少しく比例を失しますけれども、各特長があつて始めて其の事が出來るのだと私は申したいのです。決して誰でもさういふ適切の人々になり得るといふことは六ヶ敷いのだが、此の各務謙吉などといふ人は、其の判斷力其の選擇力に於て確かに特長を持つて居る人であらうと思ふ。而して之が三四年保險の本場たる倫敦で稽古をして來ました爲に、其の人の働きに依つて、彼の海上保險會社が一時は困難にまで陷つたけれども、爾來回復して今日は保證準備金も大層な高を積んで、基礎も極く堅固になつて居ります。然らば最初危險の有樣に陷つたのはどういふ譯であつたかと申しますると、即ち益田氏が未だ熟練せぬ前のことです。保險の計算を堅固の仕組にせぬものですから、期限が經過しなければならぬ保險料を利益勘定に出して配當してしまひ、後から段々に損害が起つて來る。甚だしきは是では迚も堪らぬ。早く潰れた方が危險が薄らぐといふ位までに考へた。今日より十年ばかり前であつたが、益田氏は一般から經營其の宜しきを得ないと云うて攻擊の燒點となつた。私も推薦した關係があるから大に益田氏のために側から力を入れた。幸に益田氏の推薦した各務氏が代つて主務者となつて改革したから、益田氏に功罪相償うたと申して宜いのであります。

保險事業の根本義

私はさういふ長い關係から、――生命と海上とは違ひますけれども、――保險といふ事業に就いては多少の經歷を持つて居る。況や其の時に私が思ふには、どうも歐羅巴人殊に英吉利人などは、成るべくたけ危險には遠ざかるといふ經營が多いのに、反對に其の危險を引受けるのは危險に遠ざかりたくないといふ事になる。是は餘程怪しまなければならぬ。然るに此の危險を引受ける爲の保險業を、却て堅實のものとするのは何か理由が無ければならぬ。蓋し危險は斯くすれば左迄恐るべきものでないといふ明かの道理があるに違無い。それを能く攻究すれば

決して遺れぬ事は無いと思ふから、先づ第一に其の論理を調べて見ようてはないかと云うて、私は益田氏に其の事を申して學理的の調査をさせたのです。ところが果して英吉利邊にて行はるゝ理論としては、成るべく多數に成るべく平均の出來るやうにするが宜い。理窟から言ふと危險を受合ふのだから、危險に遠ざかる筈はない。まるで危險の渦中に這入る形であるが、其の實は數を多くして平均の出來る樣にすれば、危險といふものは事實に於て全く無くなる。恰も多數の人が相共に危險を共濟する理窟になる。乃ち此の理由を論じて一編の書物にしたことがあります。右の如く私も明治十二三年頃から保險事業に就いて多少の研究は致したところから、爾來他の生命保險業の有樣を見ましても、どうしても確實の仕組を以て、堅固の基礎から計算を立てゝ行くといふことを缺いたら駄目と思ひます。

利益配當を目的とすべからず

そこで當會社に對しても、まづ以て株主は己の拂込んだ金額を其の根本の土臺にした覺悟になつて、利益配當の望を努めて抑制して、さうして保險業其のものが極く鞏固に成立つ樣にといふ事を目的とせねばならぬ。尤も事業の盛衰は今申す通り當局者其の人に存すると申しても差支無いと思ひます。則ち此の東洋生命保險會社經營の既往は、果して其の當局者が完全てあつたか不完全てあつたか。是迄噂に承知して居る所て見ると、生命保險業を社會的公共的の考案から割出さないて、或は投機的材料にてもするが如き經營があつた事もないてはないかと想像される。果して、さうてあつたとすれは其の人は才もあつたてあらう、精神もあつたてあらうが、此の事業に對しては宜しきを得たる人とは言へぬかと思ふのです。故に今日の東洋生命保險會社は、さういふ精神は全く打棄てゝ、前に申す公共的の考を以て多數から平均を得るといふ主義て、多數の人の眞中に立つて社會から世話人を頼まれたといふ心得て經營をする外私は無からうと思ふ。而して世間の多數が之を信じ之を喜んて來て呉れるか否かは、從事する人の心得方の如何と、精勤か不精勤かに基くと思ふ。今日の取締役の諸君が、殘らず常務の衝に立つといふ譯にはいかぬ。六名の御方が申合せて、直接に仕事を爲る人を一名か二名に定め、其の餘の人は其の議に參して、面倒が生すれば速にこれを解決し、妨害があればこれを防ぐやうにして、成るべく會社の利害を伸暢するといふやうになさる

ならば、從來困難であつた當會社も、恰も東京海上保險會社が創業時代の難局を切拔けて、今日の盛大を致したやうな機運に向ふてあらうと思ふのであります。何故なれば、當會社も今日までが困難であつたが、立派な株主が過半入變つて整理が出來たとすれば、是からは誠意と勤勉とを以て進むのみで、惡くなる筈は無い。詰り此の保險事業といふものが前に申上げますやうな性質だとしますれば、相當の人が遣りさへすれば成就せぬことはないと思ふ。

唯一努力のあるのみ

但し目前此の事業に付いて如何であらうかと思ふのは、同業會社の競爭が甚だ多いといふ點です。故に若し新規にこれを起すといふならば、寧ろ御考ものではないかと私は言ひたいのです。併し既に成立つて居る。總ての材料も揃うて居るので、此の儘にして置くのは如何にも殘念であるから、此の際資力を充實し社務の整理改善を爲して、事業の擴張をも致したいというて先頃からの御依頼に付き、今度始めて御相談相手になりましたが、此の甚しい競爭時代に立つては、當局者たるものは餘程注意が必要である。さりながら、幸にして此の會社は日本内地に於ても又韓國臺灣等に於ても、從來多少の地盤は作られて居るから、新しく成立した會社の樣に敢て事を急ぐ必要も無く、隨つて今俄に他の同業會社に對して攻擊的競爭を仕掛けて行つて、自らも苦み彼等をも苦めるといふ程までになさらないでも、正當の位置を保つて追々進行して、是までは不安心の嫌もあつたけれども今日は安全の會社である。是までは時々仕事に冷熱もあつたけれども、今日は穩健にして且つ親切だ。株主は各地各方面に於ける有力者のみである。重役は其の中より選拔され、最も堅固に最も眞似目に働いて、誠に忠實に遣つて呉れるといふことが十分に世間に擴まつて行きますれば、從前に變つて被保險者を增して行くことが出來得ることであらうと思ふ。況や幸に此の六十七人の株主が、今申上げますやうな觀念を以て、而も其の事務の取扱は局に當る者が勤勉怠ることなく、又御互に各株主なり其の知人朋友なり、此の事業を助けて會社を隆盛ならしめようとする心あれば、何時にても又誰にでも助力が出來ることであります。固より私自身が此の會社へ保險を附けて呉れろと言つて世間を廻るといふ譯には行きませんけれども、少し心を用ひれば直に被保險者を作ることは出來る。殆ど社會的事業ですから、株主七十名が十人づゝ世話をすれば、七百人の被保險者を作り出すこ

とが出來る。百人づゝ世話をすれば七千人の被保險者が出來ると言ひ得るのです。重役が今申上げましたやうな觀念を以て、倦怠すること無く此の事業を經營されて、御互株主が今申上ぐる心を以て之を補助するといふことであつたならば、現在全國にある六百有餘の當會社の代理店に於ても、安心して今後は大に會社の爲に盡力して呉れるであらう。同時に從前からの被保險者も不安の念を去るであらうから、解約などの申込を爲すものも減ずるであらう。果して然らば、今まで微々振はざりし當會社をして、鞏固なる活きた會社たらしむることが出來るだらうと思ふのでございます。幸に今日の總會に一新紀元を開いて、今申上げましたやうな會社たらしめたいと深く私は希望するのでございます。即ち微力ながら私も株主たる本分は盡さうと思ふのでございます。どうぞ諸君に於ても左樣御承知を願ひます。御指名を申した諸君に對して訓誡がましいことを述べたのは失禮でございますが、蓋し私の申したことは諸君の成る程相當だと御思ひなさることで、敢て意表のことを申上げることにはなるまいと思ひます。

（明治四十三年七月二十日、東洋生命保險會社株主總會に於て）

一〇六　華族の處世法は偏務的に非ざるか

德川公爵の希望

閣下及び諸公。予は今夕榮譽ある諸公の面前に於て、德川公爵に對し送別の辭を述ぶるの光榮を有するを慶ぶものであります。抑、德川公爵は名門の出にして貴族院議長の榮職に居られ、內にしては同族の御世話は申すに及ばず、社交上に於ても終始誠意を盡され、外にしては最も嚴正に上院議長の職責を盡され、憲政の發展に資する所尠からざるは予の敬服に堪へぬ所で、其の聲望一世に赫灼たるは實に謂れある事であります。宋の歐陽永叔は晝錦堂の記を書いて韓魏公の德を頌したことがある。兎角に今日の世の中には、彼の蘇秦が嫂に疎んぜられたとか、或は朱買臣が其の妻に輕蔑されて離婚を求められたるが如き、窮乏の地に落醜したる閭閻一介の書生が、俄に時を得て六國の印を佩ぶるとか一國の政治を秉るやうになつて、始めて其の昔日輕蔑したる庸人愚婦が、奔走し俯伏して車塵馬足の間に悔いて、其の才能其の顯貴を羨むと云ふやうな事は往々に在る例であるけれども、彼の韓魏卽ち衛國公は左樣云ふやうな身分の人ではない。昔から顯貴の家に生

れて而して最上の家庭に生長し、充分なる學殖があつて終に大宰相の位地を占めたのである。さればこそ歐陽永叔が、始め卑くして後高位高官に上つた人と違つて、品格もあり素行もあり溫厚の長者であると云つて、畫錦堂の記を書いて其の德を頌したのである。予は思ふ。德川公は恰も韓魏公の如き御方なりと。即ち蘇秦と其の選を異にし誠に尊敬すべき御方である。而して身は貴族院議長の榮職に居りながら、常に謙德を以て議會に於て議長の職責を盡され、家に在つては社交上に心を勞せらるゝのみならず、今回海外に旅行して大いに造詣する所あらんとする、蹇々匪躬の御志は私の敬服する所であります。斯程の實驗あり斯程の學殖ある御方が、親しく歐米各國を歴遊して實地を視察し來られたる曉には、定めて政治界に裨益する所が多からうと思ふのであります。

今の華族は何を爲しつゝある

斯かる御人を見るに就いても、私は茲に慨歎せねばならぬ事がある。即ち他の一般の華族方の、現在の世に處する有樣は如何でありませう。何ぞそれ斯の如くなるやの歎を發せざるを得ぬではないか。悉く其の名を御指し申さぬが、華族と云ふものは帝室の藩屏である、國家の顯貴であると人に稱揚されて居りますけれども、其の華族諸公が今日の世の中に盡す有樣は如何であらうか。私は甚だ憂慮に堪へぬと思ふ。帝室の藩屏たり貴顯なりと、世人から具瞻尊崇せらるゝ名譽の位地に立つ華族諸公が、世の爲に盡さねばならぬ義務或は責任は、果して盡されて居るでありませうか。其の有樣は殆ど偏務的行動と云はざるを得ない。世の爲に何の盡すところがありますか。得る名譽得る尊敬に對し、何の償を爲しつゝ居らるゝか。殊に大名華族の御方は、右樣の有樣の多いのを甚だ遺憾とする。

國家の位地を高むるは誰の責任ぞ

凡そ國家なるものが其の位地を高め他國から重んぜらるゝやうになるのは、勿論政治上の整備、軍事の强大、總ての事物の發達に歸することは固より論を俟たない。教育も盛なれば法律も備へて居らねばならんけれども、どうしても其の國民が外國に行きて其の實況を視察し、外國民との交情を溫め、其の進步發達美事善行を見習うて我の補となし、また外國から來る人に對しては、眞に國家を思ひ國家に竭すの誠意を以て之に接見し、或の場合には自己の私財を費して好遇する等、能く彼我相互の意思の疏通を圖り、交情を濃かにするやうに努めなければならぬ。若しこれ無かりせば、如何に政治が進步して居るとも、陸海軍が優勢であるとも、法律

が整うて居るとも、宗教が普及して居るとも他國から敬愛される譯のものではない。他國の敬愛を受くるやうにするには、國民各自の外交が甚だ必要であると云ふことを忘れてはならぬと思ふ。其の國民の外交を盛にするには、國民誰でもと云ふ譯には行かぬ。どうしても名譽あり、他位あり、學殖ある人々が心掛けなければならぬ。然るに其の任務を盡すべき華族諸公が、前に申す如き有樣であると云ふことでは、私は甚だ之を憂へねばならぬ。どうか其の地位其の名譽、社會から受くる所の尊敬に對して、雙務的の心掛を以て欲しいと云ふことを希望せざるを得ぬ。今度德川公爵が歐米御旅行から御歸朝の曉は、是非とも此の御心を以て御同族に對し御誘導下さるであらうと思ふ。是は隴を得て蜀を望む嫌があるか知らんけれども、眞に此の望を屬せざるを得ぬので御座います云々。

（明治四十三年七月廿五日發刊龍門雜誌所載、德川家達公洋行送別會席上に於ける演說の要旨として當の日本に掲載せるものなり）

一〇七　渡清實業團の歸朝を迎ふ

閣下、實業團諸君、臨場諸君。渡清實業團諸君の御無事御歸朝を歡迎しますに付いて、茲に盛會を開かれまして、私も其の席に陪する光榮を荷ひました。諸君の御勤勞を謝し其の効果を讃するに就いては、既に農商務大臣、又石井外務次官の前來の御演說に於て用の無いやうに考へます。私が蛇足を添へます餘地はございませぬ。但し私は實業家の位地に居りまするで、其の方面よりして此の席に一言を申述べるやうにと、歡迎委員長からの御指圖がございました。で茲に不肖を顧みず蕪言を呈する次第でございます。

國家の發展と相互の往來

國家の隆盛が其の政の維遍く其の武の維揚ると云ふことに歸するは、勿論申す迄もございませんけれども、併し其の原因は其の國家の實業の發達に起因すると云ふことは、最早今日まで何れの方面にも否と申される氣遣は無からうと思ふのでございます。故に國として商工業の繁盛を努めると云ふことが、同國の未來を思ふ念慮の最も强い所以であると云ふことを、政事家も、學者も、御互に其の局に當る者も自ら論じて居る。只今外務次官の御述べの如く、其の實業の發達に於て、國と國との間の商賣を、成るべく事情を透徹し、種々なる阻害を取除かうと云ふには、努めて相往來すると云ふことが必要である。且つ其の往來も個人々々の往來に

止めずに、一種の團體を組んで意思の疏通を謀り、或は事業の成効を期すると云ふことが、此の二十世紀の近頃に起つた時代の要求のやうてある。先に渡米實業團の擧のあつたのも、此の際の渡清實業團も、卽ちそれ等の意味から生じた甚だ必要なものてある、と云ふことを御述べになりましたが、斯く申上げる私は其の前の渡米實業團には團員に加つた一人てございまするて、申上げる言葉が少し我田引水自畫自讃の嫌がございまするけれども、外務次官の御言葉は實に其の當を得たものと、深く御同意を表するのてございます。

渡清實業團の効果

而して今回の渡清實業團の諸君の御勤勞は、前に較べれば更に多とし、効果も更に大なりと思ふのてございます。何ぜ左樣に申すかと云ふと、亞米利加と支那とを比較しますると、第一に自國から申すと、交りの深いのは清國が最も古いのてございます。清國に對する千年以上の修交ある日本は、殆ど今の東洋が西洋の文物を摸倣すると同じ有樣てあつて、例へば大賓令を見ても、百官の制度なり又民間の事物なり、大抵唐制に摸倣せざる無し、と申して宜い位てあります。時として變化無き能はずてございますが、前にも農商務大臣外務次官の御說の通り、所謂同種同文の國、距離は近いし、人情は等しい所が多くあるし、我が產物が澤山清國に行くと云ふことも誠に明かなる事實てある。從つて彼の國の品物も、我が國民は能く之を購買するのてあります。唯從來の有樣が、兩國共に實業に重きを置くと云ふ念が少し薄かつた。是は清國ばかりてはございませぬ。我が帝國も最も其の風習に長く居つたのてございます。旁〻以て商賣人が相共に意思を交換し、自分等の働きに依つて努めて門戶を開き交通を盛にすると云ふことが出來得なかつたのてございますが、幸に帝國も今申上げます通り、總ての方面が是非さうなければならぬと云ふ國運に發達したと同樣に、大清國に於ても今日の現況を窺ふと、我が帝國と殆ど同樣のやうに拜見される。清國との善隣を望む吾々に於て、是位喜ばしいことはありませぬ。故に今回渡清實業團の企があり、此の御揃の如き有爲の諸君が罷出て、彼の官憲に、若くは彼の實業團體に、或は個人に御接し申して、我が帝國の商工業家の意志は斯く〳〵てある。我が帝國の商業家の輿論は斯樣々々てある、と云ふことを能く御通徹申した次第てございます。これに就いて大清國の官憲若くは商業團體或は個人が充分に御引受け下すつて、到る所に衷情を以て歡迎し